朝鮮半島系渡来文化の伝播・普及と首長系譜変動の比較研究

課題番号：12610416

平成12年度～平成14年度科学研究費補助金

（基盤研究Ｃ２）研究成果報告書

研究代表者　　杉井　健

熊本大学文学部助教授

2003年3月

熊本大学文学部

例　　言

1　本書は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究Ｃ２）を受けて実施した研究の報告書である。研究の課題、経費、成果等は以下の通りである。

課　題　名：朝鮮半島系渡来文化の伝播・普及と首長系譜変動の比較研究

課 題 番 号：12610416

研究代表者：杉井　健（熊本大学文学部助教授）

研 究 経 費：平成12年（2000年）度　90万円

平成13年（2001年）度　50万円

平成14年（2002年）度　50万円

研 究 成 果：本書

研 究 発 表：

（学会誌等）杉井　健　2001「朝鮮半島系渡来文化の動向と古墳の比較研究試論－九州本島北部地域を題材として－」『考古学研究』第47巻第４号　考古学研究会

杉井　健　2002「第５回（2002年度）九州前方後円墳研究会によるひとつの成果－古墳時代中期以降の新規出現要素に着目して－」『九前研通信』第11号　九州前方後円墳研究会

（口頭発表）杉井　健　2002「古墳時代中期から後期の土師器研究の諸問題」『古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－』第５回九州前方後円墳研究会発表要旨資料　第５回九州前方後円墳研究会実行委員会

杉井　健　2003「伝マロ塚古墳出土遺物現状調査報告」熊本古墳研究会2003年３月29日例会

（出 版 物）杉井　健　2002「13　境目遺跡」「14　上松山遺跡」「17　向野田古墳」「18　チャン山古墳」「19　御手水古墳」「20　南山内箱式石棺群」「22　石ノ瀬遺跡」「23　宇土城跡城山遺跡」「26　轟遺跡（貝塚）」「27　スリバチ山古墳」「28　迫ノ上古墳」「29　城ノ越古墳」「30　猫ノ城古墳」「32　神合古墳」「43　天神山古墳」「55　長浜箱式石棺群」「57　小松二号墳」『新宇土市史』資料編第２巻　考古資料・金石文・建造物・民俗　宇土市

杉井　健　2003「古墳時代の始まり」「古墳時代の展開と終焉」「東アジア世界と古墳時代」「宇土半島基部における古墳文化の始まり」『新宇土市史』通史編第１巻　自然・原始古代　宇土市

杉井　健　2003発表予定「生活様式における中心周辺関係の成立とその意義」『先史学・考古学論究』Ⅳ　龍田考古会

（報 告 書）杉井　健・櫂　佳克編　2003「高熊２号墳測量調査報告」『考古学研究室報告』第38集　熊本大学文学部考古学研究室

2　本書は２部構成をとる。第Ⅰ部は、上記研究発表の学会誌等の項にある杉井2001、および出版物の項にある杉井2003・2003発表予定を、相互に関連させながらまとめなおしたものである。第Ⅱ部には、今後の研究に資することを目的に、朝鮮半島系渡来文化のうち甑形土器と竈にかんするおもな文献を収録した。

3　当補助金の一部を使用して古墳の測量調査を実施しているが、その成果については本書とは別に上記研究発表の報告書の項にある杉井・檀編2003として公表しているので、それを参照していただきたい。

朝鮮半島系渡来文化の伝播・普及と首長系譜変動の比較研究

目　　次

第Ⅰ部　研究成果
一　本研究の課題と目的 …… 3
二　生活様式における中心周辺関係の成立 …… 4
1．はじめに …… 4
2．九州本島における古墳時代中期以降の新規出現要素の動向 …… 4
3．新規出現要素にみる九州本島と東日本の共通性 …… 14
4．生活様式における中心周辺関係の成立 …… 15
三　九州本島北部地域における朝鮮半島系渡来文化の動向 …… 18
1．九州本島における甑形土器と造り付け竈の普及 …… 18
2．弥生時代から古墳時代前期における朝鮮半島系渡来文化の様相 …… 20
3．朝鮮半島系渡来文化受容地域の３つのパターン …… 23
四　古墳動向からみた中央政権と朝鮮半島諸地域との交渉 …… 24
1．鋤崎古墳が提起する問題 …… 24
2．朝鮮半島系渡来文化の動向と首長墓系譜変動の相互関係 …… 26
3．中央政権の対外交渉内容の変化と朝鮮半島系渡来文化 …… 28
4．おわりに …… 29

第Ⅱ部　甑形土器および竈にかんする主要文献一覧
一　凡例 …… 41
二　甑形土器にかんする主要文献一覧 …… 42
三　竈にかんする主要文献一覧 …… 47
四　執筆者別索引 …… 61

挿　図　目　次

図１　甑形土器蒸気孔の形態分類模式図 …… 5
図２　九州本島における多孔タイプ把手付大型甑の分布 …… 6
図３　九州本島におけるつつぬけタイプ把手付大型甑の分布 …… 7

図４　九州本島における粘土による桟タイプ把手付大型甑の分布……8
図５　九州本島における桟渡し用小円孔タイプ把手付大型甑の分布……9
図６　九州本島におけるつつぬけタイプ把手無大型甑の主要分布地域……10
図７　大型甑と小型甑……10
図８　佐賀平野地域における模倣坏と黒色処理技法の出現……11
図９　模倣坏の分布の南限……13
図10　九州本島における多孔タイプ把手付大型甑の分布集中地域……19
図11　九州本島における造り付け竈の普及……21
図12　後期前半無文土器の分布……22
図13　鋤崎古墳の横穴式石室・円筒埴輪と丸隈山古墳の円筒埴輪・巴形銅器……25

表　目　次

表１　九州本島における古墳時代中期以降の新規出現要素の消長……12
表２　日本列島における古墳時代土器の地域性……16
表３　古墳時代における倭と中国王朝および朝鮮半島諸地域との関係……27

第Ⅰ部　研究成果

一　本研究の課題と目的

弥生時代における農耕文化の伝播を、朝鮮半島系渡来文化の日本列島への第１次波及とすれば、古墳時代中期から後期におけるそれは、第２次の波及と評価することができるほど大規模なものである[1]。それは生業活動や生産技術、生活様式、埋葬習俗、祭祀・儀礼行為、政治活動など、社会が有するほとんどすべての場面におよぶ。しかし、厳密にみれば、製陶（須恵器製作）技術や製鉄技術などの経済活動にかかわる側面と、横穴式石室やそれにともなう埋葬習俗などの精神活動にかかわる側面の本格的な受容時期に差異が存在していることには注目してよい。とくに、横穴式石室にかんしては、４世紀後葉にすでに九州本島北部地域で受容されているにもかかわらず、近畿地方中央部で受容され東北地方南部地域まで普及するのは６世紀になってからである。これらのことには、どのような背景が存在しているのだろうか。

古墳時代中期以降における朝鮮半島系渡来文化の受容には、近畿地方中央部に存在した中央政権の意向が大きくかかわっていたと推測できる。このことは、当該時期における最大の須恵器生産地が、政権の中枢地域である大阪平野に営まれたことからもうかがうことができるだろう。したがって、上述したような各種要素の受容時期の差異にも、何らかの政治的状況がかかわっている可能性が考慮されなければならない。

そうであるならば、朝鮮半島系渡来文化の動向と政治的側面にかかわる首長墓系譜変動のあいだには、何らかの関連性をみいだすことができるのではないか。本研究のもともとの出発点には、このような問題意識が存在している。

わたしはかつて、この視点にしたがい、熊本県地域における造り付け竈や甑形土器の動向と首長墓系譜変動を比較検討したことがある。そのなかで、それらの分布の南限には共通性がみいだせることを指摘した（杉井1999b, p.43）。では、九州本島全体では、どのような状況を描き出すことができるのだろうか。

把手を有す大型の甑形土器と造り付け竈は、古墳時代中期以降における朝鮮半島系渡来文化の重要な要素の１つである。それらは生活様式的側面に含まれる要素であるから、とくにその初期段階の動向は渡来人の動きと密接にかかわる可能性がある。また、以下で述べるように、それらが普及して以後も、朝鮮半島系渡来文化にかかわる要素として着目した場合、とくに甑形土器の形態的特徴やその日本列島全体における分布傾向には興味深い事実をみいだすことができる。

そこで、本研究では、九州本島における朝鮮半島系渡来文化、なかでも大型の甑形土器と造り付け竈の動向を明らかにすることを第１の目的とする。また、甑形土器や造り付け竈は古墳時代中期以降になって新規に出現した要素としての位置付けもできることから、それら以外の新規出現要素についてもあわせて検討する。そして、生活様式的側面の一部においても、古墳時代中期以降になって、近畿地方中央部を中心とする同心円型の地域性が成立することを示したい。そのうえで、九州本島北部地域における古墳動向と朝鮮半島系渡来文化の動向を比較検討し、中央政権が朝鮮半島諸地域、およびそれらの地域からの渡来文化とどのようにかかわろうとしたのかについての現段階における見通しを述べたいと思う。

なお、以下では必要な場合をのぞいて、甑、竈と記述する。

二　生活様式における中心周辺関係の成立

1．はじめに

古墳時代は、葬送行為において、すなわち墳墓や副葬品などのあり方において、近畿地方中央部が日本列島の中心となった時代である。それは、最古の定型化した前方後円墳の１つとされる奈良県桜井市箸墓古墳の築造当初からの特徴である。そのため、当時の政治的状況が古墳のあり方に表されているという一般的な認識にしたがうとすれば、古墳時代前期初頭においてすでに、ある程度の政治的な中心と周辺という関係が日本列島に形成されていたとみなしうる。しかし、葬送行為以外の要素においては、どのような地域間の関係を描くことができるのだろうか。

2002年６月15・16日に行われた第５回九州前方後円墳研究会では、九州本島における古墳時代中期から後期の土師器の変遷と地域性について議論されたが（九州前方後円墳研究会2002)、わたしはその研究会において、土師器という生活様式的側面の一部においても、古墳時代中期以降になって、近畿地方を中心とし、そのまわりを周辺とした中心周辺関係が成立するのではないかと発言した（杉井2002a)。しかし、その意義についての議論をほとんど行うことができなかった。また、研究会では、わたしの発表に対していくつかの批判や助言をいただき、さらに九州本島各地の土師器の様相について多くのことを学ぶことができた。

本章では、それらの点を補いながら、当該発表の後半部分で述べた日本列島全体からみた土師器の地域性という点に重点をおいて、あらためて私見をまとめたい。

2．九州本島における古墳時代中期以降の新規出現要素の動向

古墳時代中期以降の土師器は、須恵器やいわゆる韓式系土器、あるいは造り付け竈の受容などの影響を受けて大きくその内容を変化させる。なかでも、当該時期以降に新規に出現する要素の動向は、日本列島における土器の地域性に中心周辺関係という新たな一側面を付け加えたという点できわめて重要な意味をもつと考える。そこで、大型の甑形土器や須恵器模倣坏（以下では、必要な場合をのぞいて、模倣坏と記述する）といった新たに加わる器種、あるいは土器の表面を黒色に変化させるという新たな土器製作技法（同、黒色処理技法と記述する）について、まずはその九州本島における動向から検討を始めたい。

（１）甑形土器

分類の視点　甑形土器はさまざまな分類要素をもつが、本稿において重要なのは、法量、蒸気孔、把手の３つである。先の論考（杉井1999c）にもとづき、それらについて略述しておく。

法量については、容量１リットル前後の小型と３リットル前後以上の大型に区分できることが重要である（杉井1999c, p.384)。長野県を中心とする中部山岳地域では弥生時代中期後葉（木下1976, p.69)、多くの地域では弥生時代後期になって出現する鉢形有孔土器は小型に、古墳時代中期以降の把手付甑は大型に分類される。

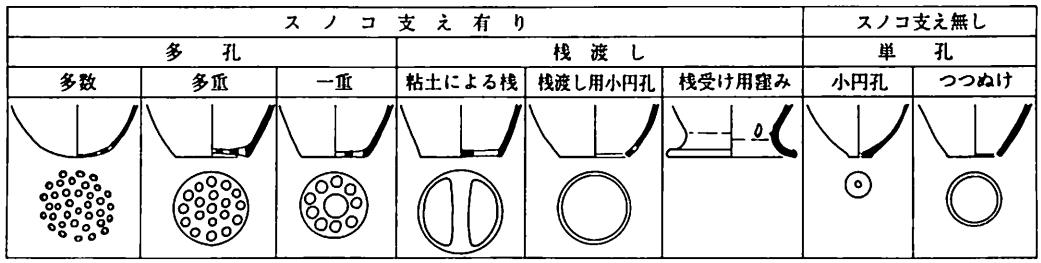


図１　甑形土器蒸気孔の形態分類模式図

蒸気孔、すなわち底部の形態は、甑を使用する際にスノコなどを入れたとの考えにもとづき、スノコを支えるための工夫がなされているのかどうかによって大別する。スノコ支え有りタイプとスノコ支え無しタイプの２つである（杉井1999c，pp.385－386）。これらは、蒸気孔の形態によってさらにいくつかに細分されるが、今回おもに問題とするのは、多孔タイプ、桟渡しタイプのうちの粘土による桟を渡すタイプ（桟作り付けタイプ）と桟渡し用小円孔を有するタイプ（桟後付けタイプ）、つつぬけタイプの４つである。これらのうち前３者はスノコ支え有りタイプに、後１者はスノコ支え無しタイプに分類されるものである（図１）。

把手も、その上面に施される切り込みなどの細工や接合方法などに注目すればいくつかに細分できる（杉井1999c，pp.386－387）が、ここでは、その有無を問題とする。

多孔タイプ把手付大型甑（図２）　多孔タイプ把手付大型甑の九州本島におけるあり方については、すでに言及したことがあるが（杉井2001，pp.90－92）、その分布は九州本島北部地域でも福岡平野周辺地域から筑後川中流地域に集中する。それが佐賀平野以南の九州本島中・南部地域にほとんど分布しない点が重要である。

その出現の時期は、古墳時代前期前半を中心とする時期に位置付けられる福岡市西新町遺跡の事例（図２－８）をのぞくと、古墳時代中期でも須恵器が出現する頃にほぼ対応する。そして５世紀後葉から６世紀になると、蒸気孔の形態は、次に言及するつつぬけタイプへと急激に変化するのである（杉井1999c，p.388）。この蒸気孔形態の急激な変化という現象は、九州本島北部地域の甑にみられる特徴として注目に値する。

外面にタタキ目を有するいわゆる韓式系土器に分類できる甑（図２－９）が少数である点も、九州本島の特徴である（杉井1999c，p.388）。このことから判断すると、５世紀以降においては、福岡平野周辺地域といえども、大阪平野周辺地域と比較すれば、朝鮮半島との関連の密接さという点では１ランク低く位置付けざるをえないのである[2]。

つつぬけタイプ把手付大型甑（図３）　上述したように、九州本島北部地域において、甑の蒸気孔形態は、多孔タイプからつつぬけタイプへ急激に変化する。次に述べる桟渡しタイプの２種を、変化過程のあいだに介在させたという形跡は見受けられない。

つつぬけタイプ把手付大型甑は、その成立以降、九州本島北部地域においてもっとも多く出土するタイプの甑で、その存続期間も長い。そこで図３には、おもに５世紀後葉から６世紀代のものを選んで示した。

これを図２と比較すれば、北九州市周辺地域から瀬戸内海沿岸地域、あるいは佐賀平野地域以南にまで、その分布域が拡大していることをみてとることができる。宮崎平野地域にも一定数存在している点には注目してよい。

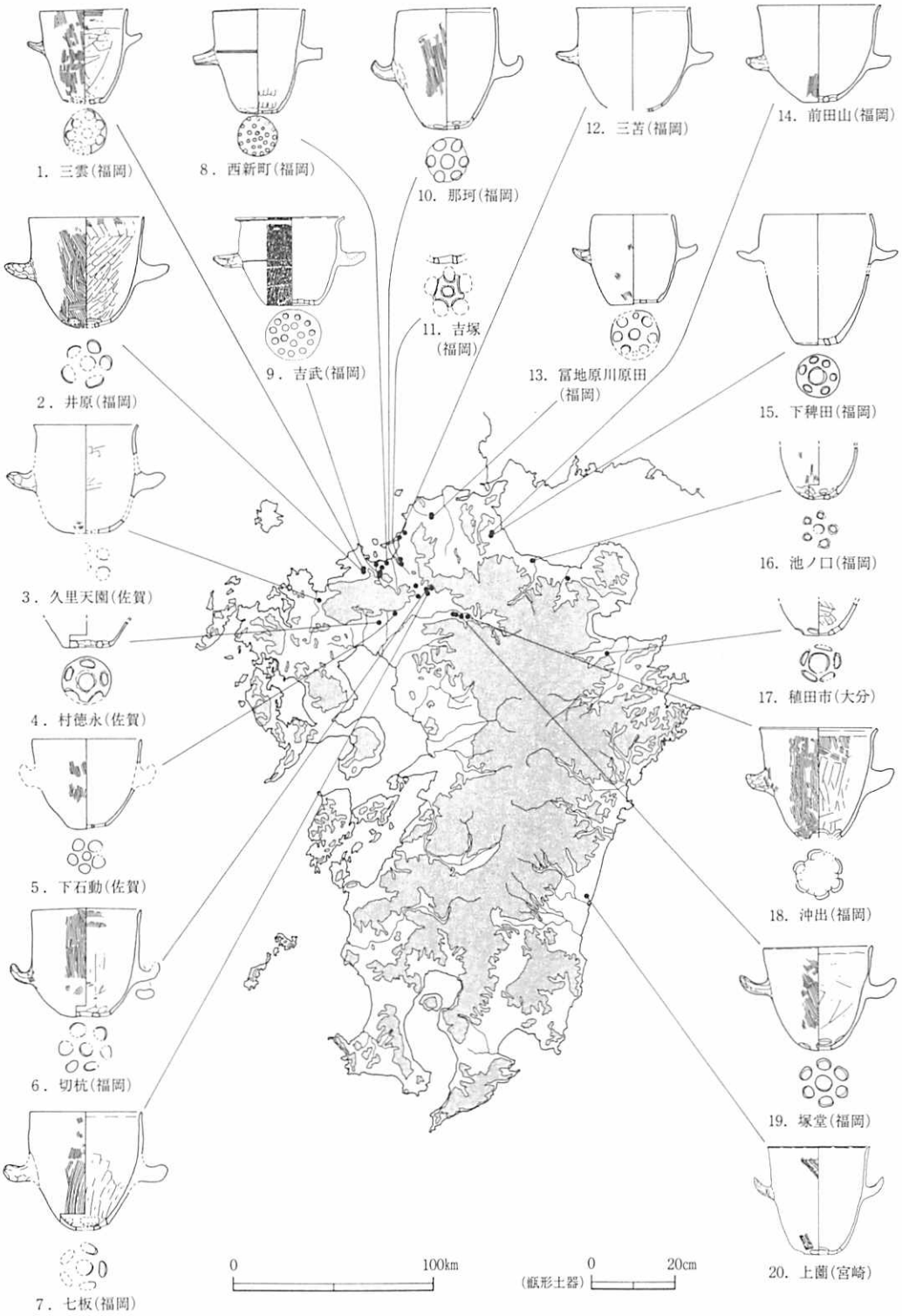


図２　九州本島における多孔タイプ把手付大型甑の分布（おもに５世紀代）

一方、熊本県地域から南部、あるいは長崎県地域にほとんど分布がみられない点には注意を要する。これが本来の分布傾向を示しているのかどうか、現段階では確信をもつに至っていないが、ひとまずここで指摘しておきたい。

粘土による桟タイプ把手付大型甑（図４）　底部に粘土による桟を渡し、半月形の蒸気孔を作る甑である。平底に作ったのちに蒸気孔部分を切り抜くものと、つつぬけに作った底部に粘土棒を掛け渡

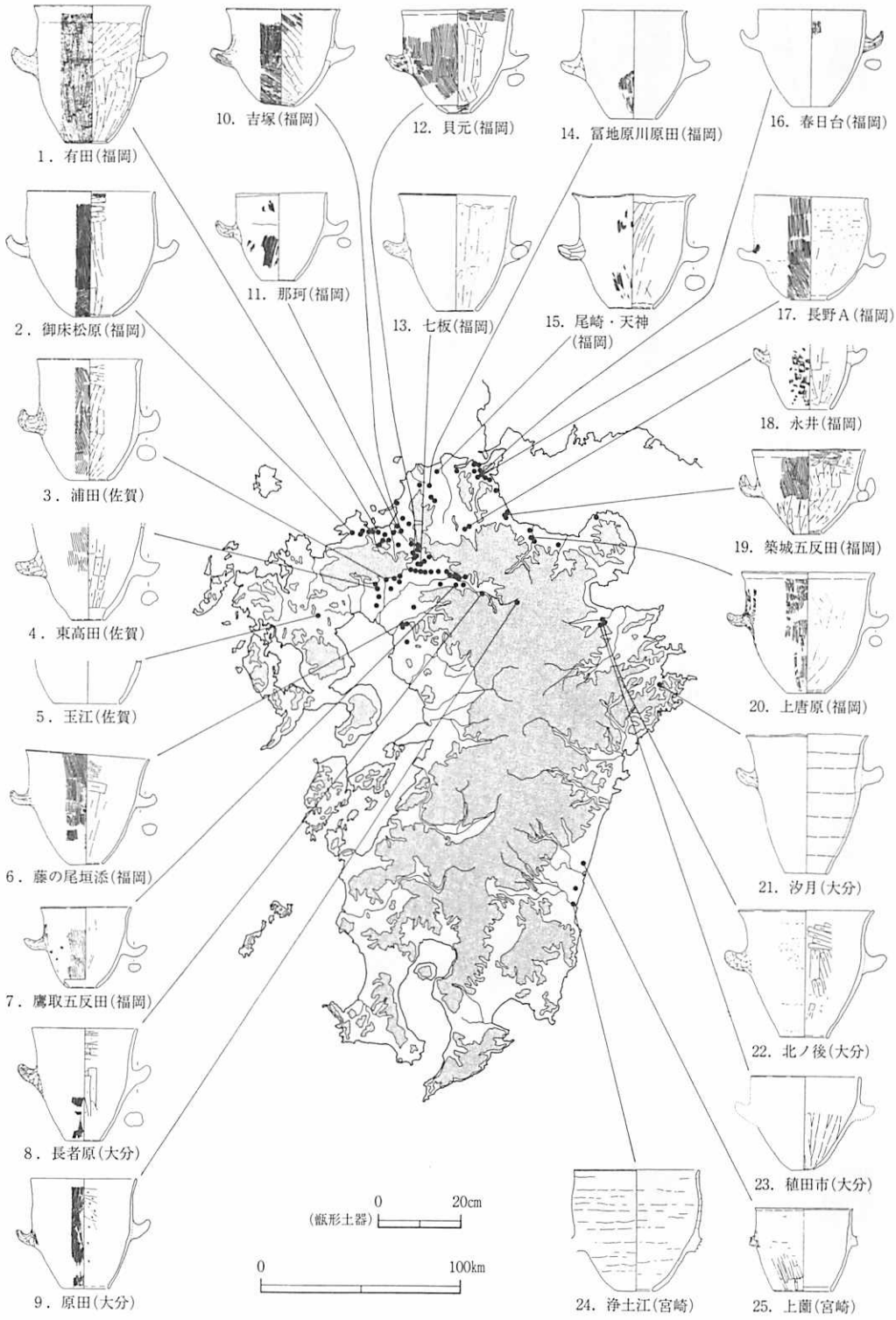


図3　九州本島におけるつつぬけタイプ把手付大型甑の分布（おもに5世紀後葉から6世紀代）

すものの2者が存在する（杉井1999c，p.386）が、ここでは一括して取り扱った。図4には、5世紀後葉から6世紀代のものを示したが、熊本県地域などでは8世紀以降にまで存続する形態である（杉井1999a）。

図4をみてまず気付くのは、熊本県地域に多く分布することである。これはつつぬけタイプ把手付大型甑でみられた状況とは異なっている。また、須恵質、あるいは似非土師須恵器（橋口1989）とよ

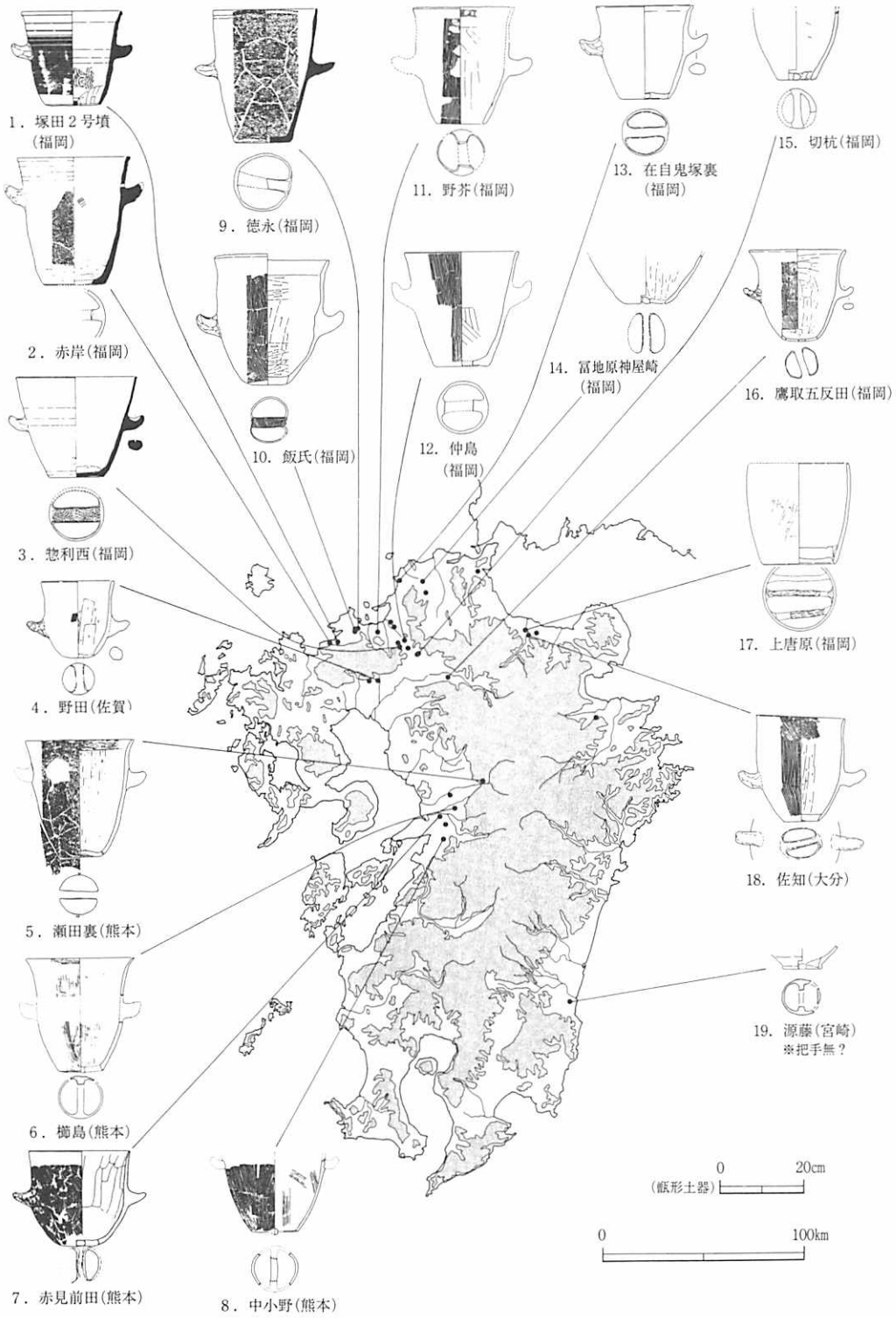


図４　九州本島における粘土による桟タイプ把手付大型甑の分布（おもに５世紀後葉から６世紀代）
※断面黒塗りは須恵質あるいはいわゆる似非土師須恵器を示す

ばれる須恵器の製作技法を用いて作られた土師質甑が、おもに福岡平野周辺地域を中心にして分布している点にも注意される。さらに、長崎県地域や熊本県南部地域、鹿児島県地域などの九州本島西南部地域には分布していない点も重要である。

桟渡し用小円孔タイプ把手付大型甑（図５）　つつぬけに作った底部付近の器壁に、１対ないし２対の小円孔を穿孔する甑である。対になる小円孔に木製の棒などが渡されて使用されたと考えられる。

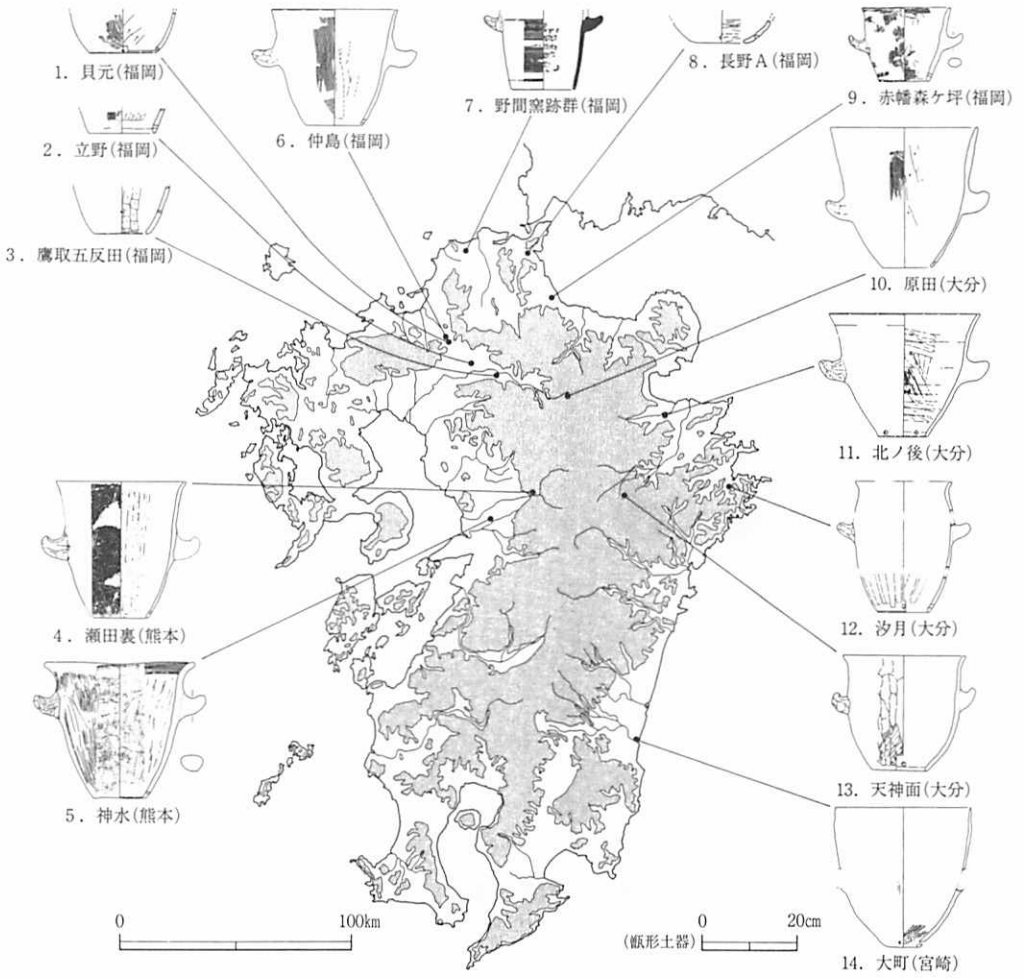


図５　九州本島における桟渡し用小円孔タイプ把手付大型甑の分布（おもに６世紀代）
※断面黒塗りはいわゆる似非土師須恵器を示す

上述の粘土による桟タイプ把手付大型甑より、若干その出現が遅れる傾向がある。図５には、おもに６世紀代のものを図示した。

図５からは、その分布が散漫である状況をみてとることができる。どこかに集中して分布するという傾向はうかがえない。上述した他の形態の甑では分布の中心であった福岡平野周辺地域に分布が少ない点は重要であろう。ただし、九州本島西南部地域に分布をみない点は、他の形態の甑と共通している。

つつぬけタイプ把手無大型甑（図６）　つつぬけタイプの蒸気孔形態をとるが、把手を有さない大型の甑である。この種の甑は九州本島北部地域でもわずかに出土しているが、図６には一定程度の割合で存在している地域を示した。その分布は、九州本島南部地域でも宮崎県地域に集中している。時期は６世紀代以降のものが多い。当該地域にみられる甑の顕著な特徴といえるだろう。

把手を有す甑が主体の西日本にあって、このような把手をもたない大型甑が一定程度存在している点は特異であり、むしろ東日本の状況と類似している（杉井1999c，pp.398－399）。宮崎県地域の日本列島内での位置を考えるうえで、非常に興味深い現象である。

小型甑（図７）　把手を有さない小型の甑である。弥生時代後期に多く存在する鉢形有孔土器からの系譜をひく。

九州本島の特徴は、把手付大型甑が出現して以降も、この種の小型甑が一定程度存在していること

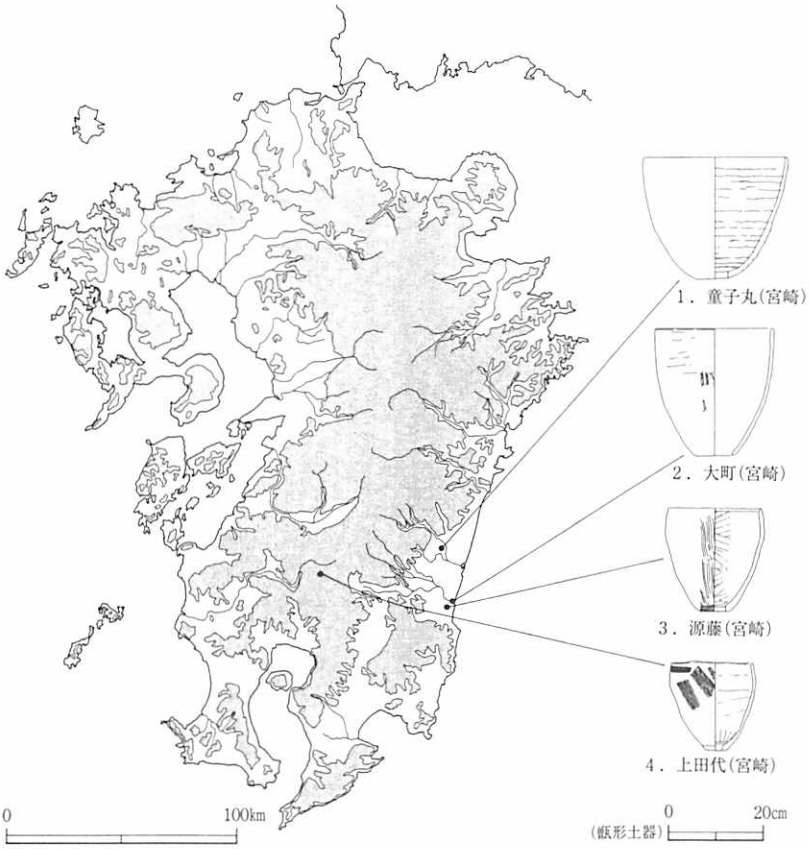


図６　九州本島におけるつつぬけタイプ把手無大型甑の主要分布地域（６世紀以降）

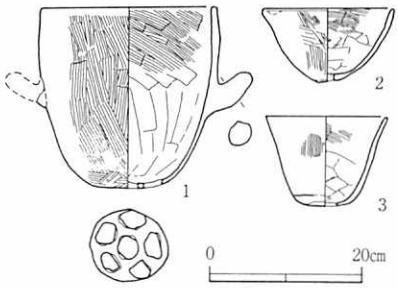


図７　大型甑と小型甑

である（杉井1999c，p.398）。このことは東日本における状況と同じであり、一方、東海地方西部地域から近畿、中四国地方との大きな相違点として指摘できる。

（２）須恵器模倣坏と黒色処理技法

古墳時代中期から後期にかけての時期に、須恵器の坏身あるいは坏蓋を模倣した形態の土師器坏が出現する。いわゆる模倣坏と称されるもので、関東地方では鬼高式の指標として評価される土器である。また、模倣坏はその内面あるいは外面、または両面が黒色に処理されることがある。東日本では、およそ６世紀頃にこのような黒色処理技法が出現することがわかっている（長谷川1989，p.180）。

ところが、近畿地方を中心とする西日本では、当該時期において、模倣坏や黒色処理技法は存在していない。このことは東日本との顕著な相違点であるが、そのような西日本のなかにあって、九州本島にはそれら両者が存在しているのである。

九州本島におけるこのような状況は古くから指摘されていた（伊達・森1966，p.203）が、第５回九州前方後円墳研究会（2002年６月開催）で議論されるまでは、この問題について総括的な検討がなされたことはなかった。以下では、わたしが行った模倣坏や黒色処理技法についての検討結果をまず記述したのち、研究会で学んだことをまとめてみたい[3]。

佐賀平野地域における模倣坏と黒色処理技法の出現（図８）　模倣坏と黒色処理技法の出現過程を検討するために、佐賀平野地域に所在する東脊振村三津永田東遺跡と浦田遺跡を取り上げる。その理由は、検討対象とする土器が住居址から出土していること、須恵器を共伴していること、また甑形土器の形態変化が追えることなどの条件を、それら遺跡が満たすと判断したためである。両遺跡は500mほどの距離にあり、三津永田東遺跡から浦田遺跡へ集落が移動した可能性も指摘されている（細川1997，p.25）。

さて、両遺跡で検出された住居址から４棟を抽出し、図８を作成した。これをみれば、５世紀後葉（TK23～TK47型式期）の三津永田東遺跡新２区10号住居では模倣坏が出土しておらず、偏平な半球形を呈す坏のみの出土であることがわかる。黒色処理も施されていない。なお、この住居には造り付

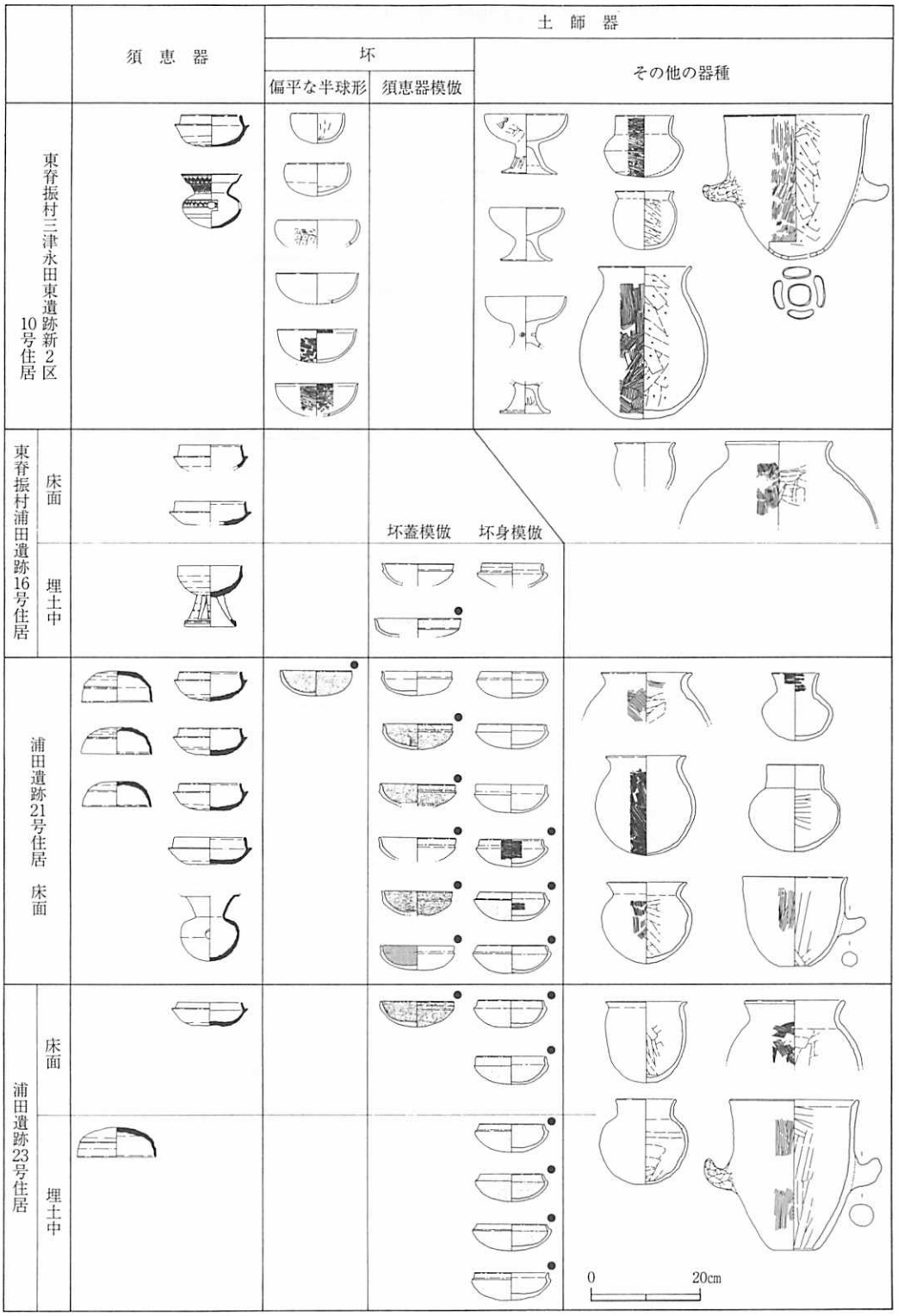
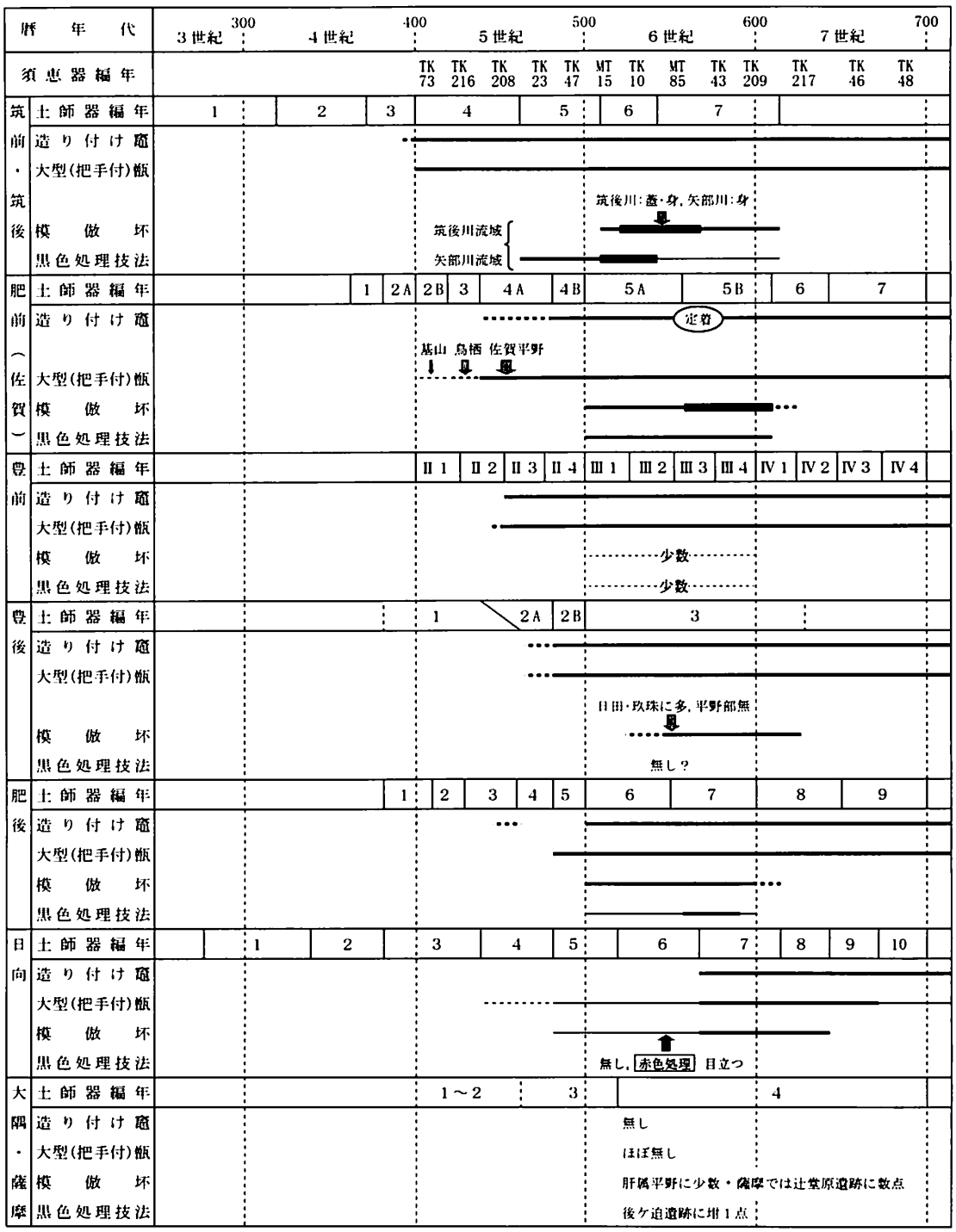


図８　佐賀平野地域における模倣坏と黒色処理技法の出現
※●は黒色処理が施されているものを示す

け竈が付設されており、多孔タイプ把手付大型甑がともなっている。ところが、６世紀初頭前後（MT15型式期前後）に位置付けられる浦田遺跡16号住居では、その埋土中であるが模倣坏が出土している。坏蓋、坏身を模した両者があり、そのうちの１つには黒色処理が施されている。ただし、この住居には造り付け竈が存在していない。次の浦田遺跡21号住居は造り付け竈を有しており、時期は６世紀前葉（MT15～ TK10型式期）に位置付けられるが、ここから出土した土師器坏の多くが模倣

表１　九州本島における古墳時代中期以降の新規出現要素の消長



※本表は、2002年６月15・16日に佐賀大学で行われた第５回九州前方後円墳研究会『古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－』の発表要旨資料および当日の発表内容と討論についての私的メモにより作成した。

坏であり、またその半数以上に黒色処理が施されている。さらに次の浦田遺跡23号住居では、すべての模倣坏に黒色処理が施されている。

以上のことから判断すれば、佐賀平野地域では、６世紀初頭を前後する時期に模倣坏や黒色処理技法が出現すると推測することができるだろう。

九州本島における模倣坏と黒色処理技法の消長（表１）　では、九州本島の他の地域において、模倣坏や黒色処理技法はどのような動向を示すのだろうか。第５回九州前方後円墳研究会では、それら

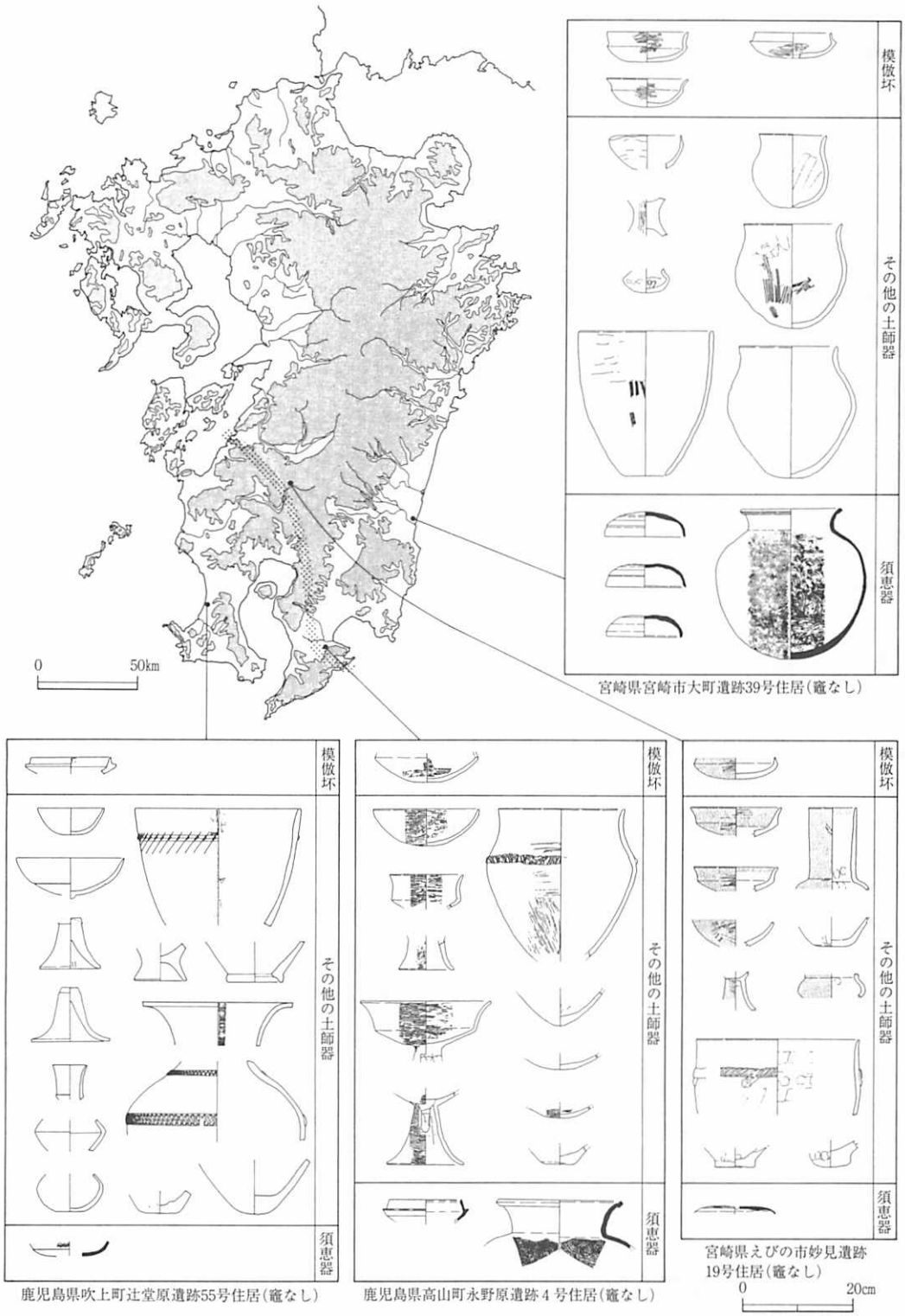


図９　模倣坏の分布の南限

の消長や地域差などが非常に明確に示された。ここでそのすべてについて言及することはできないが、研究会の発表要旨資料に掲載された各論考（今塩屋・松永2002，宇野慎敏2002，小松2002，重藤2002，中西・服部2002，中村2002，林田2002）、および当日の発表内容と討論についての私的メモにより表１を作成した（杉井2002b）。

今回この表で注目したいのは、模倣坏の有無にみられる地域差である。九州本島北部地域の玄界灘

沿岸地域や瀬戸内海沿岸地域、あるいは九州本島南部地域にはほとんど分布しないのである。重藤輝行は、玄界灘沿岸地域や瀬戸内海沿岸地域に存在しない理由を、須恵器の供給量が十分であったことに求めている（重藤2002，p.39）。すなわち、須恵器の坏蓋、坏身と土師器の模倣坏が補完関係にあったとみるのである。しかし、九州本島南部地域は須恵器の普及程度が低いから、当該地域の状況をこれによって説明することは難しい。九州本島南部地域については、上述した甑形土器が存在しないこととあわせて考察すべきと考える。なぜなら、模倣坏と甑形土器の分布の南限に類似性が認められるからである。

模倣坏の分布の南限（図９）　分布の南限を考えるうえで重要なのは、鹿児島県地域の状況である。中村直子の研究会当日の発言によれば、模倣坏は、鹿児島県地域の東部、大隅半島の肝属平野（志布志湾沿岸地域）に少数分布するという。また、薩摩半島西岸の吹上町辻堂原遺跡でも数点出土していると教えられた。これらの知見を加味して、模倣坏の分布の南限を図示すれば図９のようになる。

これを甑形土器の分布図（図２～６）と比較すると、辻堂原遺跡での出土がごく少数であることからこれを非常にまれなものとみなすことができるとすれば、模倣坏の分布範囲が甑形土器のそれよりは若干南に広いが、両者の分布傾向は類似していると判断することができる。すなわち、熊本県南部地域と宮崎平野、あるいは志布志湾沿岸を結ぶ南限ラインを引くことができるのである。

３．新規出現要素にみる九州本島と東日本の共通性

甑形土器　わたしは以前、甑形土器を検討するなかで、「ある意味で東日本と共通したあり方を示す九州地方北部地域の動向については、さらなる検討が必要であろう」と記述したことがある（杉井1999c，p.402）。今回の検討をふまえて、あらためて甑形土器にみられる九州本島と東日本との共通性について整理すると以下のようになる。

第１に、つつぬけタイプの蒸気孔形態をとる大型甑が、古墳時代後期段階に普及するという点がある。大型甑の出現当初からつつぬけタイプが主流とならない点は東日本の状況と異なっているが、九州本島北部地域では多孔タイプからつつぬけタイプへ急激にその形態を変化させるのである。このような現象は、近畿から中四国地方ではみられない。なお、つつぬけタイプ大型甑が把手を有している点に着目すれば、東日本西部地域の様相と共通しているといえる。また、宮崎県地域で顕著にみられた把手を有さないという特徴は、東日本東部地域の大型甑に共通する。

第２に、大型甑と小型甑の両者が存在しているという点がある。九州本島中南部地域の様相についてはさらなる検討が必要であるが、九州本島北部地域における小型甑の一定数の存在という点は東日本と共通している。

須恵器模倣坏と黒色処理技法　上述したように、模倣坏は東日本と九州本島に多く分布する。それら２地域にはさまれた近畿地方などには分布していない。

伊達宗泰・森浩一は「須恵器生産の中心から遠ざかると、土師器として模作される器種は増加する。関東や九州では、須恵器の坏の模作がさかんであった」と述べ、須恵器の普及程度の低い地域で模倣坏が製作されたとみる（伊達・森1966，p.203）。同様に、西弘海も「須恵器の絶対量の不足が、食器の一部に須恵器杯の直接的な模倣という特殊な変化を生み出すことになった」と述べている（西1982，p.454）。このように須恵器坏の多寡と模倣坏の普及程度を関連させてとらえる視点は、先に紹介した、玄界灘沿岸地域や瀬戸内海沿岸地域に模倣坏が普及しないことに対する重藤輝行の解釈（重藤

2002，p.39）とも共通する。

黒色処理技法も、古墳時代後期においては、東日本と九州本島で特徴的にみられる土器製作技法である。古墳時代後期におけるこの種の技法については、これまで東日本に多く分布することが強調されがちであり（小笠原1971）、またその研究も東日本においてさかんであった（東国土器研究会1989）。しかし、第５回九州前方後円墳研究会での検討（九州前方後円墳研究会2002）でも明らかなように、地域差はあるにせよ九州本島にもそれは確実に存在する。重要なのは、黒色処理技法が存在する地域では、その消長が模倣坏のそれとよく似ている点である（表１）。両者のあいだに何らかの関連があった可能性を想定できよう。このことについては、黒色処理技法を、土師器坏の透水性という欠陥を補う技術の１つとしてとらえる小笠原好彦の見解（小笠原1971，p.66）が重要であると考えている。

韓式系土器　外面にタタキ目を有するいわゆる韓式系土器も、古墳時代中期における新規出現要素として重要である。今津啓子は、韓式系土器としてひとくくりにされる土器のうち、日本列島で出土した軟質のものを「朝鮮系軟質土器」（今津1987）とし、これの「器種が揃うところはほぼ間違いなく彼ら（渡来人…筆者注）の生活の場と考えてよい」（今津1994，p.123）という視点のもと、地域別・時期別に渡来人が居住したと考えられる集落の消長を示した。今津が行う時期区分のうち、２期は「布留式土器が出現し、須恵器が登場するまでの時期」、３期は「須恵器が出現し、定型化してしまうまでの時期（陶邑編年のTK73型式からTK47型式まで）」（今津1994，p.125）に相当するが、今津は、九州本島北部地域で渡来人居住集落が中心的に営まれるのは２期であること、一方、３期になってそれが中心的に営まれるのは摂津や河内、和泉などを中心とした大阪平野周辺地域であることを明確にしたのである（今津1994，p.129）。

すなわち、古墳時代中期以降における韓式系土器の分布の中心は大阪平野周辺地域にあり、それと比較すれば、九州本島北部地域における分布は少数であるとみなしうる。つまり、大阪平野周辺地域に比べて韓式系土器の分布が相対的に希薄であるという点で、九州本島は東日本と共通するといえるのである。

４．生活様式における中心周辺関係の成立

新規出現要素と同心円型の地域性　古墳時代中期、とくにその５世紀以降は、弥生時代初頭に匹敵するくらい大規模に朝鮮半島系渡来文化が日本列島へもたらされた時期である。上記で検討した新規出現要素のうち、大型甑と韓式系土器は、まさに朝鮮半島系渡来文化の影響を受けて出現したものとみなしうる。模倣坏や黒色処理技法も、その成立に須恵器の普及程度が関連しているとする見解が正しいとすれば、これらもまた朝鮮半島系渡来文化にかかわる要素であると判断できる。つまり、東海地方西部地域から近畿、中四国地方をはさんで、列島の東西両側の地域で共通した様相を示す甑形土器、模倣坏、黒色処理技法、韓式系土器のいずれもが、何らかのかたちで朝鮮半島系渡来文化とのかかわりを有す要素なのである。

すなわち、古墳時代中期以降になって朝鮮半島系渡来文化の影響を受けて土師器のなかに新たに出現した要素は、近畿地方中央部を中心とした同心円型の地域性を示すといえる。さらに、日本列島全体を視野に入れれば、九州本島中北部地域から東北地方南部地域の外側に、それら新規出現要素がほとんど分布しない地域が広がっているのである。このことは、当該要素の同心円型の分布状況を考えるうえできわめて重要である。

継続要素と東西二分型の地域性　では、土師器でも古墳時代前期から継続する要素は、中期以降になってどのような地域性を示すのだろうか。甑形土器と同じ煮炊具である甕形土器を例にとり、その地域性についてみてみよう。

甕がもつ諸要素のうち、今回着目したのはおもにその底部形態である。なぜなら底部形態は、炉への据え方、あるいは竈での用い方にかかわって、煮炊具と火処の関係に表される炊飯方式のなかでももっとも重要な側面の１つに関連すると考えるからである。

さて、前方後円墳や造り付け竈の分布範囲を念頭におきながら、沖縄諸島から北海道地方までを視野に入れたかたちで、甕および上述した新規出現要素の地域性を表２にまとめた[4]。

まず、古墳時代前期について、前方後円墳の分布範囲における甕の地域的まとまりをみてみると、九州本島中北部地域から近畿地方までは丸底甕、東海地方から関東地方南部地域までは脚台付甕、関東地方北部地域から東北地方南部地域までは平底甕の分布域であるとみることができる。つまり、前方後円墳の分布範囲が大きく３つに分割されるのである。しかも、それぞれに異なった底部形態の甕が分布している。古墳時代前期段階の甕は、前方後円墳の分布範囲において、互いに接する地域同士が異なったあり方を示すのである。隣接地域分割型の地域性を示すといえるだろう。

しかし、古墳時代中期から後期になると、甕は、九州本島中北部地域から東海地方西部地域までは長胴丸底甕、東海地方東部地域から東北地方南部地域までは長胴平底甕というように、前方後円墳の分布範囲を大きく東西に二分するような地域性をもつようになる。すなわち、上述の新規出現要素とは異なり、古墳時代前期からの継続要素の１つである甕は、古墳時代中期以降、東西二分型の地域性を示すのである。

生活様式における中心周辺関係の成立　土師器のなかに新たに出現した要素は同心円型の地域性を示すと上記した。このことは、古墳時代中期以降になると、生活様式的側面の一部においても、近畿地方中央部を中心とし、そのまわりを周辺とした中心周辺関係が成立したことを推測させる。

ここで重要なのは、それが朝鮮半島系渡来文化に関連する要素において成立したという点である。古墳時代前期からの継続要素である甕にはそのような傾向はみられないのである。

本章の冒頭でも述べたように、古墳のあり方から判断すれば、古墳時代は、近畿地方中央部を中心とした中心周辺関係が政治的に形成された時代として位置付けられる。それと同様な地域的関係が、

表２　日本列島における古墳時代土器の地域性

		沖縄諸島	奄美諸島	大隅諸島	九州南部	九州中北部	中四国・近畿	東海	関東	東北南部	東北北部	北海道
前方後円墳												
造り付け竈												
前期	甕	尖底甕	平底甕	脚台付甕		丸底甕（布留式）		脚台付甕		平底甕	平底甕（統縄文）	
中・後期	甕	尖底甕 ↓ くびれ平底甕	平底甕 ↓	脚台付甕		長胴丸底甕		脚台 ↓	長胴平底甕		平底甕（統縄文）	
新規出現要素	多孔大型甑					△	○		×			
	つつぬけ大型甑					○	×		○			
	小型甑					○	×		○			
	模倣坏					○	×		○			
	黒色処理技法					○	×		○			
	韓式系土器					少数		多数	×			

古墳時代中期以降の朝鮮半島系渡来文化に関連する要素においても成立したと推測できるのである。古墳と朝鮮半島系渡来文化のあいだには、東北地方北部地域から北海道地方、あるいは琉球列島といったさらに周辺地域に存在していないという共通点もみることができる。これらのことから判断すれば、朝鮮半島系渡来文化の分布傾向の形成には、古墳のあり方に表されるような政治的動向が何らかのかたちでかかわっていると推測することもあながち荒唐無稽なことではなかろう。

そこで次章では、古墳動向との関連を考えるための前提として、九州本島北部地域における朝鮮半島系渡来文化の受容状況を、弥生時代にさかのぼって検討しておこう。

三　九州本島北部地域における朝鮮半島系渡来文化の動向

1．九州本島における甑形土器と造り付け竈の普及

（1）多孔タイプ把手付大型甑の普及状況

前章でも述べたように、甑を構成する要素は数多い。そのなかでも、朝鮮半島の甑との関係を考えるためには、牛角状の把手をもつことと多孔タイプの蒸気孔形態を取ることの２点がとくに重要である。なぜなら、これら要素は朝鮮半島の甑が有する特徴であるからである。また、西日本にはそれら特徴をよく保持した形態の甑が普及する。したがって、朝鮮半島と西日本の相互関係をさぐるためにも欠くことのできない要素なのである（杉井1994・1999c）。

上述したように、外面にタタキ目を残す甑が九州本島では少数である点に注意を払うことは重要である。ただし、九州本島北部地域の甑の蒸気孔が多孔タイプからつつぬけタイプへいち早く変化すること、すなわち、朝鮮半島の甑との類似性を急速に失っていくという点（杉井1999c）を考慮すれば、その当初期の特徴である多孔タイプの蒸気孔に注目して分析を行うことは、朝鮮半島系渡来文化の直接的な動きを知るという点でやはり重要な意味をもつ。

さて、以上のような視点にしたがい、先に提示した図２をもとに、図10では多孔タイプ把手付大型甑が集中して分布すると思われる地域をアミで囲んで示した。

これをみると、その分布の中心は九州本島北部地域にあること、なかでもその中央部、すなわち福岡平野周辺地域から筑後川中流地域にかけての範囲に分布が集中する点にあらためて気付かされる。また、このなかは分布のとくに集中するいくつかの小地域に区分されることも明らかである。さらに、唐津平野や佐賀平野、瀬戸内海沿岸地域では散漫な分布を示すのみであることもわかるだろう。

以上をもとに、以下で取り上げる弥生時代無文土器の分布なども考慮に入れたうえで、ここでは次のような５地域をとくに抽出しておきたい。

Ａ：糸島平野から福岡平野地域（前原市から福岡市を中心とする地域）
Ｂ：筑紫平野北東部地域　　（夜須町を中心とする地域）
Ｃ：筑後川中流地域　　（吉井町を中心とする地域）
Ｄ：津屋崎・宗像地域　　（津屋崎町から宗像市を中心とする地域）
Ｅ：佐賀平野地域　　（佐賀市を中心とする地域）

これらのうち、Ａ～Ｄの４地域が多孔タイプ把手付大型甑の普及度が高い地域として、とくに注目されるのである。

なお、図10に示した甑のほとんどは古墳時代中期以降のものであるが、福岡市西新町遺跡出土の甑は古墳時代前期のものであることに注意しておきたい。

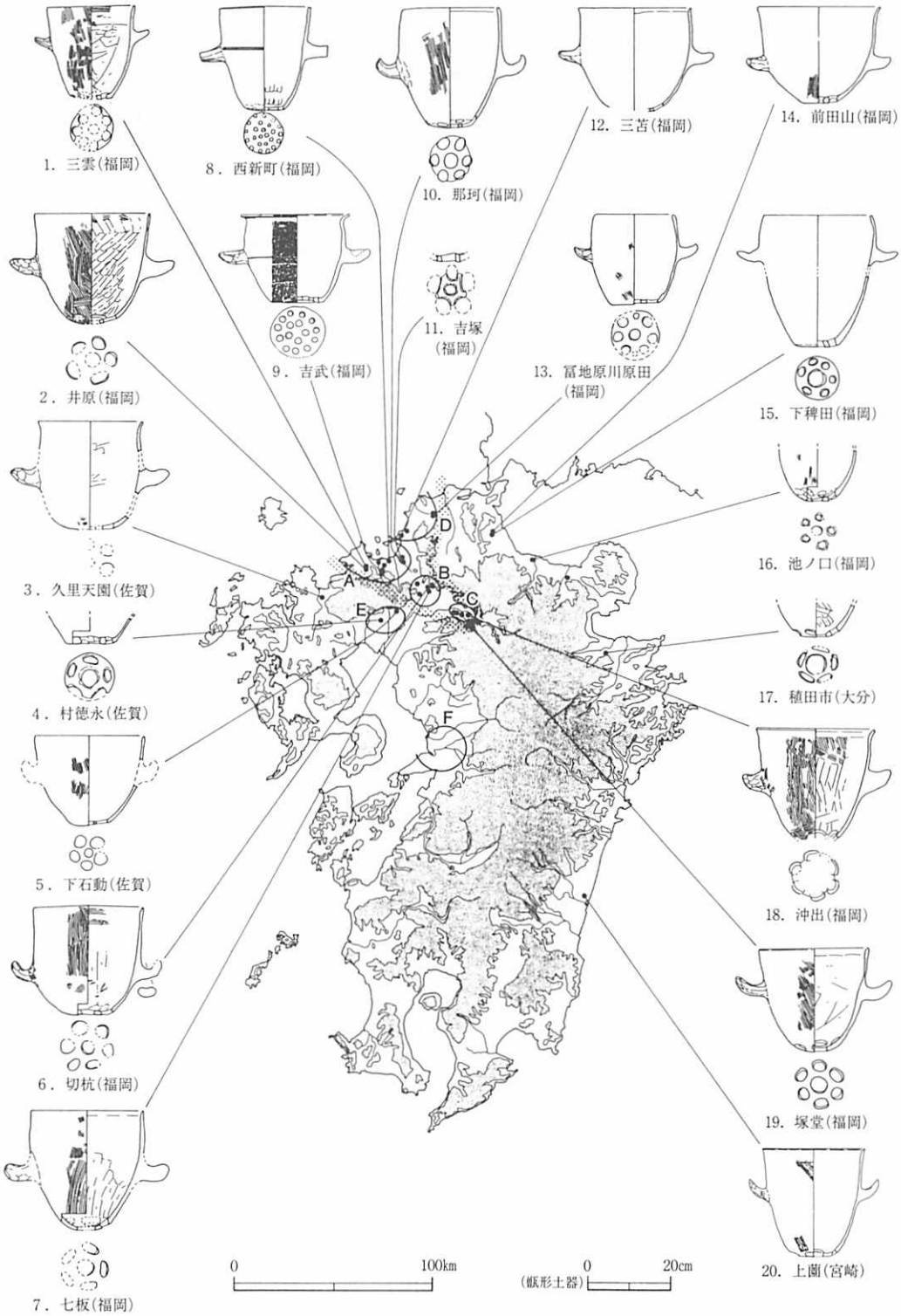


図10　九州本島における多孔タイプ把手付大型甑の分布集中地域

（2）造り付け竈の普及状況

図11は、5世紀から6世紀における造り付け竈の普及状況を示したものである。5世紀代は前半と後半に区分してそのおもな普及範囲を示したが、6世紀代を区分して示すことにはやや曖昧さが残るため、6世紀代はまとめて表示した。

ここにおいて重要なのは、５世紀前半における造り付け竈の普及範囲が、甑の分析で示したＡ～Ｄの４地域にかさなる点である。Ａ～Ｄの４地域は、甑においてもその普及度が相対的に高い地域である。すなわち、福岡平野周辺地域から筑後川中流地域にかけての範囲において、造り付け竈と多孔タイプ把手付大型甑がいち早い普及をみせるのである。

そして、５世紀後半における造り付け竈の普及範囲は、多孔タイプ把手付大型甑の分布範囲とほぼ一致する。ただし、図11では５世紀後半での普及範囲としてひとくくりにしたが、佐賀平野地域（Ｅ地域）や唐津平野地域、瀬戸内海沿岸地域では、その分布が散漫であることを指摘しておこう。このことは多孔タイプ把手付大型甑の普及状況と共通する現象だが、とくに、唐津平野地域では６世紀代の明確な竈や甑の分布がみられない点、また佐賀平野地域において竈が広域に普及するのは６世紀になってからである点に注意しておきたい。

さて、６世紀代になると、その普及範囲は熊本平野地域にまで広がる。しかし、長崎県地域にはいぜんとして竈が普及していないことは重要である。６世紀代に位置付けられる甑も分布していない。また、九州本島北部地域から離れて、宮崎平野地域に６世紀後半から末葉の造り付け竈がみられる点にも注意しておこう[5]。

ところで、熊本平野南部地域の城南町迎原西遺跡では５世紀中葉の造り付け竈が検出されている。このことを重視し、当該地域も上述のＡ～Ｅに加えて考察を進めよう。すなわち、

Ｆ：熊本平野南部地域（城南町を中心とする地域）、とする（図10）。

（３）小結

九州本島における５世紀代（古墳時代中期）の甑と竈の普及状況を検討すると、それらをいち早く普及させた地域とそうでない地域に区分できることがわかる。ここでは、普及度という観点から、Ａ～Ｆの６地域を以下のように大きく２つに整理しておきたい。

・５世紀代における甑と竈の普及度が高い地域：Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ地域
・５世紀代における甑と竈の普及度が低い地域：Ｅ・Ｆ地域[6]

２．弥生時代から古墳時代前期における朝鮮半島系渡来文化の様相

５世紀代（古墳時代中期）における朝鮮半島系渡来文化の普及状況を考察するうえにおいて、それ以前の渡来文化の様相を検討することは重要である。なぜなら、さまざまな文化要素の伝播が、以前の状況とまったく無関係に行われたとは考えがたいからである。

甑や竈は生活様式的側面に分類できる要素であるから、その受容初期段階の様相を検討することは直接的にしろ間接的にしろ渡来人の足跡を探ることにも関連してくる。このような要素と比較するためには、朝鮮半島系の土器を検討の俎上に載せることがもっとも適切な方法の１つだろう。そこで無文土器を例に取り、弥生時代の状況を概観するところから始めよう。

（１）弥生時代無文土器の分布

日本列島出土の無文土器については片岡宏二の著書に詳しい（片岡1999）。それによると、氏は、朝鮮系無文土器を前期・中期・後期に区分し、それぞれに孔列土器・松菊里型土器・粘土紐（帯）甕を対応させている。それらのうち、甑や竈との関連で問題となるのは、おもに中期無文土器（松菊里

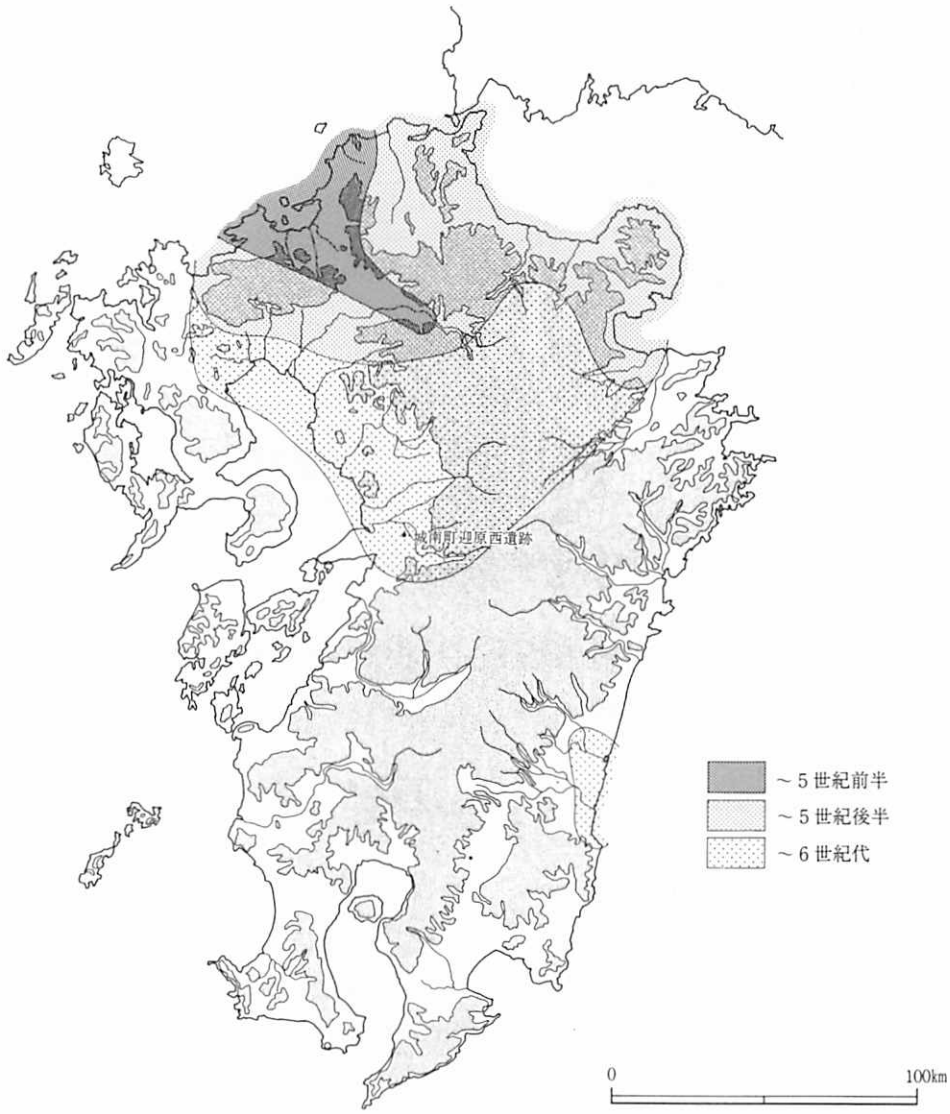


図11　九州本島における造り付け竈の普及

型土器）以降であると思われる。というのは、前期無文土器（孔列土器）の分布域は宮崎県地域から鹿児島県地域にまでおよび、古墳時代中期以降の甑や竈の分布域とは大きく異なっているためである。つまり、それら２つの時期における地域間の交流関係がおなじものであったとは考えがたいのである。

中期無文土器（松菊里型土器）の時期は、いわゆる松菊里型住居の動向（中間1987，伊藤・永井・蔭山1999）とも関連して検討に値する時期である。それら分布域が九州本島北部地域に限られるようになる点は、これ以降の渡来文化の動向を考えるうえでも重要であろう。ただし、古墳時代との関連を考察する立場から、本稿では時期のより近い後期無文土器に注目しよう。

さて、片岡は後期無文土器を前半と後半に分けている。前半は円形粘土紐甕の時期、後半は三角形粘土帯甕の時期である。それぞれおよそ弥生時代前期中葉から中期初頭、中期前葉から中期後葉に対応させている（片岡1999，p.18の表１）。

片岡はこの両者について、その分布状況を示しているが、そのうち後期前半無文土器の分布は非常に示唆に富む（片岡1999，p.83の図16）（図12）。これを、本稿のＡ～Ｆの６地域と対比してみると、後期前半無文土器が多く分布する地域とほとんど分布しない地域に分かれることに気付く。すなわち、

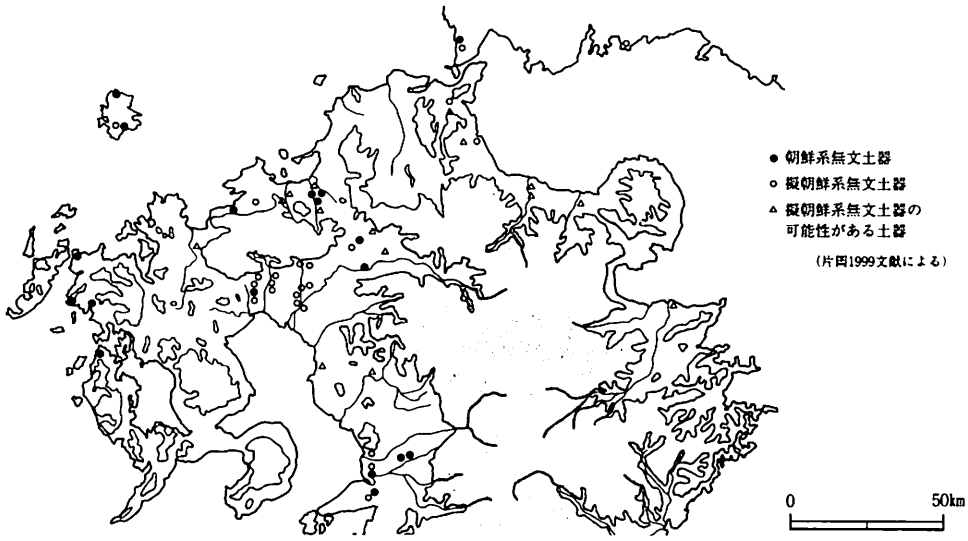


図12　後期前半無文土器の分布
（片岡宏二 1999 文献。p.83 －図 16 の地図部分を改変のうえ、再トレース。）

A（糸島平野から福岡平野）・B（筑紫平野北東部）・E（佐賀平野）・F（熊本平野南部）の 4 地域には多くの分布がみられるのに対し、C（筑後川中流）・D（津屋崎・宗像）の 2 地域にはほとんど分布がみられないのである[7]。

これを甑と竈の分布状況と関連させて整理すれば、以下のようになるだろう。

（後期前半無文土器）	（5 世紀代の甑と竈）	（地　域）
分布：密　－	普及度：高　－	A・B 地域
分布：密　－	普及度：低　－	E・F 地域
分布：粗　－	普及度：高　－	C・D 地域

さて、後期前半無文土器以降、とくに弥生時代後期について考えるためには瓦質土器の動向が重要となろう。これについて分析した武末純一の研究（武末1991・1993）を参考にすると、その分布は本稿の A（糸島平野から福岡平野）地域および壱岐、対馬地域に集中する傾向がある。片岡が示す後期後半無文土器の状況（片岡1999, p.90）を加味すれば、渡来人の動向に関連するであろう土器の分布は、A 地域および壱岐、対馬地域を中心としたものへと変化していく状況を読み取ることができるだろう。

（2）古墳時代前期の西新町遺跡

古墳時代前期において、朝鮮半島系渡来文化の濃密な影響を探し出すことはとても難しい。このことは、古墳時代前期頃までに朝鮮半島系渡来文化伝播の波が極端に縮小したことを物語る。こうしたなかにおいて、福岡市西新町遺跡にみられる様相は特筆されるべきものである。

西新町遺跡は福岡市早良区、本稿の区分では A（糸島平野から福岡平野）地域に所在する。弥生時代後期終末から古墳時代前期に集落の規模が著しく拡大したとみられている。

その集落の拡大期、とくに古墳時代前期前半を中心とする時期において、多孔タイプ把手付大型甑や造り付け竈を受容しているのである。日本列島全体でみた場合、そのような甑や竈を広く受容する

のは古墳時代中期以降であるから、西新町遺跡のこの状況はとくに注意される。ほかにも、陶質土器やガラス玉の土製鋳型など、朝鮮半島系渡来文化の存在を色濃く示す遺物が多数検出されている。以前筆者は、当該遺跡出土甑の形態が同時期の朝鮮半島の甑と共通することを指摘し、竈の存在をも加味して、その居住者集団は日常生活レベルにおいてきわめて密接な朝鮮半島とのつながりを有していたと指摘した（杉井1994）。つまり、西新町遺跡は、朝鮮半島系渡来文化伝播の波が小さくなった古墳時代前期にあっても、それを受容し続けていた特異な遺跡として評価できるのである。

3．朝鮮半島系渡来文化受容地域の3つのパターン

これまで述べてきたことから、おなじ九州本島北部地域といえども、朝鮮半島系渡来文化の受容の状況は一様でなかったことがわかる。検討したものはわずかに生活様式的側面に属する一部の要素にすぎないが、それのみから判断しても、その受容地域にはいくつかのパターンが存在していることを予想できる[8]。

それを、古墳時代前期の状況に視点をすえたうえで、甑や竈の受容期である中期へ向かう流れとしてみた場合、次のようなパターンを想定することができるだろう。すなわち、朝鮮半島系渡来文化の受容が、①弥生時代から古墳時代中期にかけて継続する地域、②古墳時代前期までにいったん縮小するが、中期になってふたたび開始される地域、③古墳時代中期になって顕著になる地域、の3つである[9]。これを、本稿で行っているＡ～Ｆの地域区分に対応させてみると、以下のように整理することができるだろう。

①弥生古墳継続型の受容地域：Ａ地域
②古墳前期中断型の受容地域：Ｂ・Ｅ・Ｆ地域
③古墳中期開始型の受容地域：Ｃ・Ｄ地域

これらのうち、②古墳前期中断型の受容地域は、古墳時代中期以降の受容の程度差によって、それが高い地域－Ｂ地域－と、低い地域－Ｅ・Ｆ地域－に区分することも可能だろう。

では、このような受容パターンの区分がどのような意味をもつのか。上述したように、本稿での分析対象が生活様式的側面に分類できる要素であるため、その分布は渡来人の居住地域をも示している可能性がある。とくに受容初期段階の状況にはその傾向が強いと考えられる。

古墳時代中期は、須恵器の製作技術をはじめとして、渡来系の生産技術が大規模に導入された時期である。そのような先進の技術を携えた渡来人の動向は、古墳を築き得た首長の動向と無関係ではないだろう。

そこで次章では、九州本島北部地域における古墳動向のいくつかについて検討し、中央政権が朝鮮半島諸地域とどのようにかかわろうとしたのかについて考えてみたい。

四　古墳動向からみた中央政権と朝鮮半島諸地域との交渉

1．鋤崎古墳が提起する問題

鋤崎古墳と中央政権　鋤崎古墳は福岡市西区、本稿の区分ではA（糸島平野から福岡平野）地域に所在する。古墳時代前期後葉、『前方後円墳集成』畿内編年案（広瀬1991，以下では集成編年と記述）では4期に位置付けることのできる前方後円墳である[10]。

鋤崎古墳の内部主体には横穴式石室が採用されている（図13－1）。それは日本列島最古段階に位置付けられ、朝鮮半島系の埋葬施設をいち早くとりいれた古墳として重要である。このことから、当古墳を築造しえた首長は朝鮮半島との密接な関係をもつことのできた人物であると予想できる。同時に、埋葬施設築造に際しての、その独自性もうかがうことができるだろう。

その一方で、当古墳にはヒレ付円筒埴輪が採用されているのである（図13－2）。これは、九州本島におけるほぼ唯一の事例である[11]。

かつてわたしは、京都府長岡京市長法寺南原古墳出土のヒレ付円筒埴輪を分析するなかで、鋤崎古墳出土のヒレ付円筒埴輪の製作技法は南原古墳のものと類似していることを指摘した（杉井1992，p.98）。また、高橋克壽の論考（高橋1988など）を参考にして、ヒレ付円筒埴輪を有する古墳のあいだに政治的一体性を認める視点を示した（杉井1992，p.98）。また、高橋克壽が、「大和北部勢力による規格性のある鰭付円筒埴輪と器財を中心とする形象埴輪の製作の開始」がなされたと述べる点（高橋1994，p.43）を考慮すれば、鋤崎古墳には、大和盆地北部地域を中心とする中央政権との密接な関係をみいだすことができるのである。

近畿地方中央部との関連という点でいえば、古墳に従属する周辺埋葬に、円筒埴輪を利用した転用埴輪棺が採用されていることにも注意を払うべきだろう。清家章が指摘するように、近畿地方中央部の主要な周辺埋葬のあり方と共通するものであるからである（清家1999）。

さて、このような視点で当該地域をながめた時、鋤崎古墳に続いて築造された丸隈山古墳から巴形銅器が出土している点は注目に値する（図13－4）。これは、古墳時代に属す巴形銅器に限ると九州本島唯一の事例である。巴形銅器副葬古墳について検討した福永伸哉が、そのような古墳は大和盆地北部地域あるいは河内地域の勢力と密接な関係を有すと想定していること（福永1998）を考慮すれば、中央政権との関係を指摘することのできた鋤崎古墳と同じ脈絡で、丸隈山古墳を理解することができるだろう。さらに、丸隈山古墳でも転用埴輪棺の存在が確認されており[12]、また河内地域の古墳との関連を考えるうえで重要な水鳥形埴輪も検出されているのである。

ところで、鋤崎古墳以前においても、A（糸島平野から福岡平野）地域との関係を中央政権が重視していたことは、福岡市西区若八幡宮古墳から舶載三角縁神獣鏡が検出されていることや、福岡県二丈町一貫山銚子塚古墳で8面もの仿製三角縁神獣鏡が出土していることなどをみれば明らかである。したがって、鋤崎古墳などにみられる中央政権との緊密な関係は、これらの延長線上でとらえることもできるだろう。

しかし、鋤崎古墳やそれに後続する丸隈山古墳が、従来から注目されてきた初期の横穴式石室をもつ点に加えて、大和盆地北部地域あるいは河内地域に勢力をおく中央政権との関連を想定できる要素、

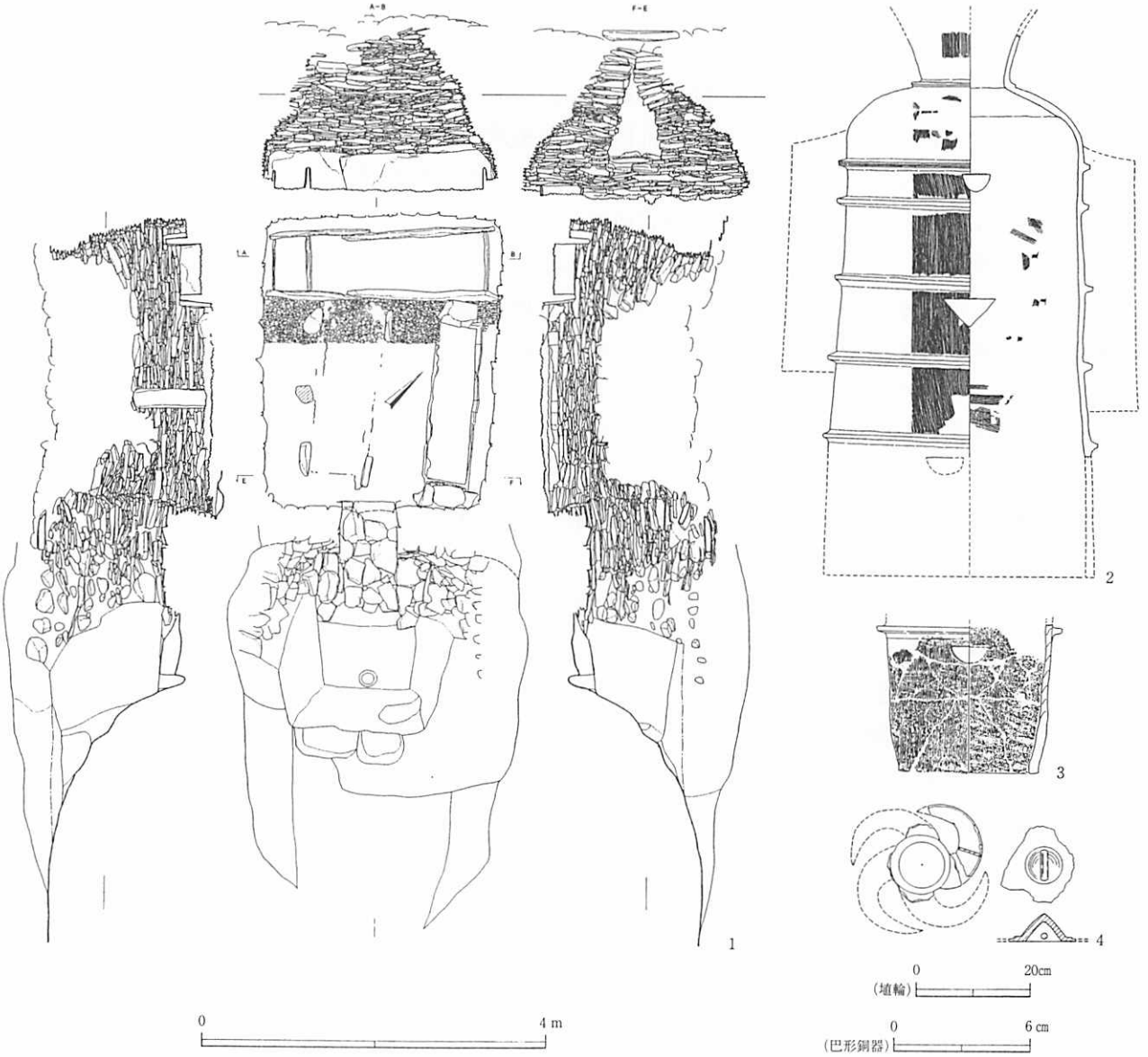


図 13　鋤崎古墳の横穴式石室・円筒埴輪と丸隈山古墳の円筒埴輪・巴形銅器
（1・2：鋤崎古墳，3・4：丸隈山古墳）

とりわけヒレ付円筒埴輪や巴形銅器といった要素を、九州本島ではほぼ唯一もっている点をとくに重視したいと思う。そして、そのような古墳が、古墳時代前期後葉から中期初頭という時期に、朝鮮半島系渡来文化受容パターンが①弥生古墳継続型の地域に出現している点に特別の意義をみいだしたいと思うのである。

中央政権と朝鮮半島諸地域との直接的交渉関係の構築　このことは、福永伸哉が、古墳時代前期前半の「初期大和政権は、政権としての権威の正統性を中国王朝による承認に求めた」が、前期後半になると「中国王朝の滅亡による権威の消失という事態の中で、半島勢力との相互交渉による鉄素材確保に成功した大和北部および河内の新興勢力が政権内の主導権を握ることになる」（福永1998，p. 23）と記述することと大いに関連すると思われる。

朝鮮半島南部地域において倭系文物が多く検出される時期の１つが、古墳時代前期後半併行期であるという事実[13]や、古墳時代前期までにいったん縮小した朝鮮半島系渡来文化伝播の波が古墳時代中期になってふたたび大規模になるという状況を考えるとき、対中国交渉重視から対朝鮮半島交渉重

視へという対外政策の転換を、古墳時代前期後半にみいだそうとした福永の視点は非常に示唆に富むのである。

つまり、古墳時代前期にあっても朝鮮半島との積極的な交渉関係を保っていたA（糸島平野から福岡平野）地域の首長は、対外政策の転換を目指した中央政権にとって無視することのできない重要な存在であったと想定することはできないであろうか。そのような地域の首長との関係を強化し、彼らを仲立ちとしながら、みずからの朝鮮半島諸地域との直接的交渉関係を築いていくことが、前期後半段階の中央政権にとってもっとも重視すべき政策課題の1つとなったのだろう。ヒレ付円筒埴輪や巴形銅器といった要素が当該地域の古墳にみいだされる理由は、ここが朝鮮半島系渡来文化の①弥生古墳継続型の受容地域であったことにあると思うのである。

2．朝鮮半島系渡来文化の動向と首長墓系譜変動の相互関係

古墳中期開始型の受容地域　朝鮮半島系渡来文化の③古墳中期開始型の受容地域、すなわちC（筑後川中流）地域やD（津屋崎・宗像）地域について考える際に、当該地域における首長墓系譜変動を考慮する視点は重要である。なぜなら、これら地域に有力な首長墓系譜が形成されるのは古墳時代中期になってからであり、時期のうえで、渡来文化の受容開始と共通性をみせるためである。具体的には、C（筑後川中流）地域では、集成編年6期に福岡県吉井町月岡古墳が築造されることを契機として、塚堂古墳、日岡古墳が継続して築かれている。また、D（津屋崎・宗像）地域では、福岡県宗像市東郷高塚古墳が集成編年3期に位置付けられやや先行するが、その西側の津屋崎地域において、集成編年6期に始まる有力首長墓系譜が集成編年10期にかけて連綿と営まれているのである。こうした時期的な共通性を勘案すれば、新たな有力首長墓系譜の形成と渡来文化の受容開始のあいだに何らかの関連が存在したことを想定する余地が生じてこよう。

このような視点でみたとき、花田勝広が指摘する（花田1991・1999）ように、D（津屋崎・宗像）地域は沖ノ島への玄関口であるという点が非常に重要な意味をもつ。沖ノ島祭祀の第1段階とされる岩上祭祀の場で検出された遺物は、おもに古墳時代前期後半の古墳から出土する遺物の内容と同じである（小田富士雄1979）。このことから、朝鮮半島諸地域との交渉を重視し始めた当該時期の中央政権が、海上交通の拠点としての沖ノ島での祭祀に積極的にかかわるようになった状況を想定できよう。そうすることによって、中央政権は朝鮮半島へ向かうルートの掌握をより確実なものにしようとしたのである。当該地域がこうした地域であったからこそ、渡来文化の受容と有力な首長墓系譜の形成が新たになされたと考えることができるだろう。

一方、C（筑後川中流）地域にいち早く甑や竈が受容された理由を明確に示すことは難しい。しかし、月岡古墳が帯金具や眉庇付冑などを有する点は、中央政権が当該地域の首長と緊密な関係を取り結ぼうとしたことを推測させる。このことは、朝鮮半島諸地域との交渉の中心を担うようになった中央政権が、それまでのA（糸島平野から福岡平野）地域とは異なったその周辺地域の首長をより重視し始めたことを表しているのではないか。

これをきっかけとして当地域には有力首長墓系譜が形成されるが、そのような地域首長の勢力伸張が渡来文化受容の背景にあったことを指摘しておきたい[11]。

古墳前期中断型の受容地域　では、②古墳前期中断型の受容地域の状況はどうであろうか。本稿ではこれにB（筑紫平野北東部）・E（佐賀平野）・F（熊本平野南部）の3地域を含めたが、それら地域

表3　古墳時代における倭と中国王朝および朝鮮半島諸地域との関係

		倭	関連事物	朝鮮半島諸地域	中国王朝		
弥生時代	終末期	239 卑弥呼，魏に遣使		238 公孫氏滅亡 魏，楽浪郡・帯方郡を支配	220 魏・221 蜀・222 呉建国	魏	蜀 呉
		248 このころ卑弥呼死す	三角縁神獣鏡 小札革綴冑				
古墳時代	前期	266 倭女王台与，西晋に遣使	中国関係		263 蜀滅亡 265 魏滅亡・西晋建国	西晋	
					280 呉滅亡・西晋中国統一		
					291 八王の乱(～306)		
				313 高句麗，楽浪郡滅ぼす 韓族ら，帯方郡滅ぼす	316 西晋滅亡		
			筒形銅器 巴形銅器		317 華北：五胡一六国 華南：東晋建国	五胡十六国	東晋
			朝鮮半島関係				
		369 百済から七支刀贈られる		369 百済，高句麗を破る 371 百済，高句麗を破る 372 百済，東晋に遣使 377 新羅，前秦に遣使			
			九州型 横穴式石室				
	中期				386 華北：北魏建国	北魏	
		391 高句麗と戦う？ 400 高句麗に敗れる 404 高句麗に敗れる 407 高句麗に敗れる？	須恵器 製鉄技術 乗馬技術 鍍金・鈒留 竈・大型甑	400 高句麗，百済・任那加羅を破る 404 高句麗，百済を破る 407 高句麗，百済を破る？			
		413 東晋に遣使？		413 高句麗，東晋に遣使			
		421 倭王讃，宋に遣使 425 倭王讃，宋に遣使 430 倭王讃，宋に遣使 438 倭王珍，宋に遣使 443 倭王済，宋に遣使 451 倭王済，宋に遣使		424 高句麗・百済，宋に遣使 427 高句麗，集安から平壌へ遷都 435 高句麗，北魏に遣使 439 高句麗，宋にも遣使	420 華南：東晋滅亡・宋建国 439 華北：北魏統一		宋
			画文帯神獣鏡 画像鏡	450 百済，宋に遣使 455 高句麗対百済・新羅戦争			
		460 倭王済，宋に遣使 462 倭王興，宋に遣使					
		471 稲荷山古墳鉄剣		468～472 高句麗対百済・新羅戦争 472 倭，北魏にも遣使 475 百済一時的滅亡・漢城(ソウル)から熊津(公州)へ遷都			
		477 倭王武，宋に遣使 478 倭王武，宋に遣使					
			畿内型 横穴式石室	479 百済東城王即位(倭の援助) 大加耶，南斉に遣使	479 華南：宋滅亡・斉建国		斉
	後期			490 百済，南斉に遣使			
		503 隅田八幡神社画像鏡？		502 百済武寧王即位	502 華南：斉滅亡・梁建国		梁
				523 百済聖明王即位			
		527 磐井の乱 534 武蔵国造の反乱 538 百済より仏教伝来		532 新羅，金官加耶を征服 538 百済，熊津から泗沘(扶余)へ遷都	534 華北：北魏分裂・東魏建国 535 華北：西魏建国	東魏	西魏
					550 華北：東魏滅亡・北斉建国 556 華北：西魏滅亡・北周建国 557 華南：梁滅亡・陳建国	北斉	北周 陳
				562 新羅，大加耶を征服			
					577 華北：北周が北斉を併合 581 華北：北周滅亡・隋建国 589 隋中国統一	隋	
		588 飛鳥寺建立開始 592 推古即位	寺院建築				
	終末期	600 第1回遣隋使			618 唐建国 621 開元通宝の鋳造	唐	
		630 第1回遣唐使					
		645 大化改新					
				660 新羅・唐により百済滅亡			
		663 白村江にて敗戦		663 白村江の戦い 668 新羅・唐により高句麗滅亡			
		672 壬申の乱					
				676 統一新羅建国			
		694 藤原京遷都					
奈良時代		701 大宝律令完成 702 遣唐使再開・出発					
		710 平城京遷都					

における古墳の動向を一様にとらえることは難しい。

たとえば、B（筑紫平野北東部）地域を、その西側の小郡地域と東側の甘木地域に大きく区分した場合、小郡地域に営まれる古墳時代前期の首長墓系譜が中期に継続しないのに対し、甘木地域には福岡県甘木市堤当正寺古墳が集成編年６期になって出現する。また、F（熊本平野南部）地域では、その西側の宇土半島基部地域において、古墳時代前期に有力な首長墓系譜の形成が行われるが中期に継続していない。しかし、その東側の緑川中流地域では、中期以降に、熊本県城南町塚原古墳群において数基の前方後円墳が築造されるという動きをみせるのである。一方、E（佐賀平野）地域において有力な首長墓系譜が形成されるのは、おもに古墳時代中期以降のことである。

首長墓系譜変動にみられるこのようなさまざまな状況は、単純にそれと関連付けて、渡来文化の受容状況を考えることの難しさをよく示している。しかし、B（筑紫平野北東部）地域における堤当正寺古墳の出現は、吉武孝礼によって池ノ上・古寺墳墓群や朝倉窯跡群との関連で考える視点が示されている（吉武2000）ように、渡来文化の動向と密接にかかわる可能性をもつだろう。また、F（熊本平野南部）地域のなかの城南町周辺におけるいち早い竈の受容を考えるためには、当該地域に所在する塚原古墳群の動向を無視することはできないと思う。このあたりのさらなる検討は、今後の課題としておきたい。

３．中央政権の対外交渉内容の変化と朝鮮半島系渡来文化

最後に、表３をみながら、中央政権の対外交渉内容の変化と朝鮮半島系渡来文化の関連について簡単に整理し、現段階におけるわたしの視点を示しておきたい。

古墳時代において、中央政権の視線が中国王朝にとくに注がれた時期は３度ある。それは古墳時代開始期前後から前期前半、古墳時代中期中葉、古墳時代終末期の３時期である。このうち古墳時代終末期は遣隋使や遣唐使が派遣された時期であり、本稿での議論に直接かかわるものでないため、その内容の検討については別の機会にゆずりたい。

さて、１度目の古墳時代開始期前後から前期前半は、魏および西晋との交渉が積極的に行われた時期である。その結果、三角縁神獣鏡をはじめとする中国系文物の近畿地方中央部を中心とした分布状況が成立した。しかし、このような対外交渉内容は、西暦291年、西晋に起こった八王の乱により大きく変化する。これ以降16年間にわたる内乱をきっかけとして匈奴や鮮卑などが侵入を開始したため、華北は五胡十六国の大乱となり、ついに316年、西晋は滅亡する。このような中国国内の混乱は、朝鮮半島に対する中国王朝の支配力をも弱めることとなり、313年には楽浪郡が高句麗に、帯方郡が韓族を中心とする勢力に滅ぼされた。中央政権の中国王朝への朝貢窓口が失われたのである。

上述したように、福永伸哉はこのような中国国内の混乱と中央政権の対朝鮮半島交渉の活発化を関連させてとらえている（福永1998，p.23）。この福永の視点は非常に重要であり、本稿で検討したように、中央政権は九州本島北部地域でもA（糸島平野から福岡平野）地域の首長との密接な関係を築きながら、対朝鮮半島交渉におけるみずからの立場を強化していったと考えられるのである。

２度目の中国王朝との交渉時期、古墳時代中期中葉は、倭の五王による遣使が行われた時期である。この時期は、中央政権による対朝鮮半島交渉がもっとも活発に行われた時期の１つでもあった。

しかし、この段階に受容された朝鮮半島系渡来文化は、経済活動にかかわるものを中心とすることに十分な注意を払うべきである。すなわち、製陶（須恵器製作）技術や製鉄技術、鍍金や鋲留などの

金工技術、乗馬の技術および畜力利用の技術などが受容され、普及していくのである。精神活動的意味合いをも包含する横穴式石室が、中央政権主導により受容され普及していくのは、中国王朝との交渉が停止して以降のことである。

こうした状況をみれば、中央政権の外交政策の一端をうかがい知ることもできるだろう。すなわち、古墳時代中期における中央政権は、朝鮮半島から受容する事物についての検討および取捨選択を行いながら、経済活動的側面にかかわるものから優先して、先進の半島文化を受容していったという可能性を想定することができるのではないか。そして、中国王朝の冊封を離れたのちに、新たなイデオロギー構築装置として機能させることを目的として、今度は横穴式石室の受容を開始したのではないかと思えるのである。

4．おわりに

本研究費の一部を使用して、2002年３月、熊本県植木町にて古墳の調査を開始した。古墳時代中期の前方後円墳である高熊古墳、および円墳とみられている高熊２号墳の測量調査である。後者にかんする調査成果は別に報告した（杉井・橙編2003）が、当該地域に所在する古墳の調査・研究を今後も継続していく計画である。

地域における首長墓系譜を具体的に検討する作業を通じて、本稿で示した視点をさらに発展させていきたいと考えている。

【註】

(1) 広瀬和雄は中国大陸や朝鮮半島から渡来してきた人々の大きな波を、紀元前4～5世紀、5世紀、7世紀の3回ととらえ、それぞれを「第1段階の渡来人」「第2段階の渡来人」「第3段階の渡来人」として考察を行っている（広瀬1996）が、その分析視点が大いに参考になった。

(2) 研究会では、福岡市吉武遺跡群出土甑として、蒸気孔のうちの周囲孔が針状孔となるものを提示していた（杉井2002a, p.9）が、本稿の図2では外面にタタキ目を有するものに変更した。この資料をご教示下さった久住猛雄氏に感謝する。なお、蒸気孔が針状孔である甑も朝鮮半島新羅地域との関連をうかがうことができるものとして重要であると認識している（杉井1999c, p.388）が、大阪平野周辺地域と比較した場合、やはりそのような甑が少数である点には変わりがないと考えている。

なお、本稿の図2では、先の文献（杉井2001, p.92）で提示したものに、宮崎県新富町上薗遺跡E地区2号住居出土例を追加している。蒸気孔は、円孔のまわりに楕円孔4孔を配するものである。これが検出された住居は竈を有さず、また共伴する土器も、須恵器高坏以外、在地系のものが大半を占める。当甑の存在理由が、今後検討されなければならない。

(3) 九州では、模倣坏を図化するに際し、須恵器坏蓋を模倣したものは蓋として、坏身を模倣したものは身として表現することが主流であり、両者を身として表現する東日本とは異なっている。本稿では、東日本の表現方法にしたがっておく。

(4) 表2にかんして断っておかなければならないのは、この表では日本海沿岸地域、あるいは四国地方南部地域の様相をほとんど示し得ていないことである。日本列島の東西差ではなく南北差に視点をすえれば、異なった表現ができる余地は十分にある。このあたりについては今後に期したい。

なお、本稿の表2では、奄美諸島についての認識が、研究会時点（杉井2002a, p.4）とは異なっている。研究会時点では、スセン當式（新里2000）を重視するあまり脚台付甕の分布範囲に含めていたが、当該地域の甕の全体的な流れから判断すれば、平底甕の分布地域とする方が妥当である。これをご指摘下さった木下尚子氏・中山清美氏に感謝する。

(5) 杉井1999d・1999eでは、宮崎県全体を含めたかたちで6世紀代までの造り付け竈の普及範囲を示していたが、本稿ではさらなる厳密さを求めたため、図11のような提示となった。

(6) 瀬戸内海沿岸地域を分類に当てはめれば、普及度が低い地域に相当しよう。しかし、瀬戸内海沿岸地域は、いわゆるL字形竈が検出された福岡県新吉富村池ノ口遺跡などいくつかの拠点的な遺跡を中心に小区分されるため、ひとくくりにできない。4地域程度に区分して分析することも考えたが、議論が煩雑になるため、本稿では当該地域を検討対象から除外した。また、唐津平野地域を検討対象からはずしたのは、甑や竈がわずかに分布するとはいえ、6世紀代にはみられない点を考慮すると、とうていそれらが普及したといえる状況ではないと判断したためである。

(7) 甑や竈の分布がみられなかった長崎県地域に、無文土器出土遺跡が点在する点には注意が必要である。ただし、片岡がこれらの遺跡を「島嶼分散タイプ」に分類したうえで、「このような遺跡は小規模な交易や偶然の漂着によってもたらされたもの」と評価し、無文土器の分布が集中するA・B・E・Fのような地域とは区別している点（片岡1999, p.106）にも注意すべきだろう。当該地域の検討は今後の課題としておきたい。

(8) 弥生時代にかんしてだけでも、生活様式的側面以外に、支石墓（埋葬習俗的側面）や多鈕細文鏡などの青銅器（祭祀・儀礼行為的側面）、青銅器の鋳型や紡織技術（生産技術的側面）、磨製石斧や鉄器（生業活動的側面）などを総合してとらえる視点が必要であるが、そのあたりの検討は今後に期したいと考えている。

(9) 長崎県地域や唐津平野地域の様相を考慮すれば、朝鮮半島系渡来文化の受容が、弥生時代には顕著だが古墳時代前期以降途絶える地域を、別に設定することが可能である。

(10) 本章で検討する古墳の動向についてはおもに以下の文献を参考にした。福岡県地域では石山1992、重藤1998、花田1991・1999、原1998、宮田1995、柳沢1992・1995、佐賀県地域では蒲原・田平・宮崎1992、蒲原1995a・1995b、甲元1995、熊本県地域では隈1992、甲元1995、髙木1995、髙木・藏冨士1998、宮崎1995。

(11) 大分県杵築市小熊山古墳においてヒレ状の破片が出土していることは承知しているが、円筒部を縦方向に半裁したような半円形の胴部に接合されたものである（九州前方後円墳研究会2000, p.327）ため、普通円筒埴輪に貼り

付けられた通有のヒレと同じ性格をもつものかどうかの判断が難しい。ただし、ヒレ部の形態や製作技法は通常のものと共通している。なお、これと同種の埴輪が鋤崎古墳でも検出されている（古墳関連文献：杉山編2002，p.35)。

(12) 九州本島を中心にして弥生時代に存在した巴形銅器は、古墳時代前期前半の断絶期のあと前期後半になって今度は近畿地方中央部に出現してくる。この現象は、特殊器台を用いた棺が岡山県地域に出現し、一方、埴輪棺は古墳時代前期後半になって近畿地方中央部を中心に盛行するという状況と極めて類似している。両要素を採用する古墳には階層性のうえで大きな相違が存在するが、弥生時代から古墳時代へ移行するなかで、両要素の現れる時期や分布の変化にみられる類似性は重要である。このあたりについても今後検討していきたい。

なお、筆者のみたところでは、転用埴輪棺に限れば、鋤崎古墳と丸隈山古墳の検出例が、九州本島におけるすべてである点にも注意しておきたい。

(13) 朝鮮半島全羅南道地域に前方後円墳が築造される5世紀後葉から6世紀前葉が、もう1つの大きな倭系文物流入時期であるが、このあたりの検討は別稿において果たしたい。

(14) 福尾正彦は、C（筑後川中流）地域が、大分市や臼杵市を中心とする豊後地域と福岡県八女市を中心とする筑後南部地域をつなぐ交通の要衝にある点を重視する（福尾1982)。そのような地域を中央政権が重視したとすれば、筑後南部地域を含めた有明海沿岸地域が、5世紀半ばから後半になって朝鮮半島諸地域や中国王朝との交渉における要地となったとする説（白石1997、山尾1999など）に関連して興味深い。

【参考文献】

石山　勲　1992「筑後」『前方後円墳集成』九州編　山川出版社，pp.41－47

伊藤秀紀・永井宏幸・蔭山誠一　1999「『松菊里型竪穴住居』の受容と展開－日韓の比較から－」『年報』平成10年度（財）愛知県埋蔵文化財センター，pp.82－107

今塩屋毅行・松永幸寿　2002「日向における古墳時代中～後期の土師器－宮崎平野部を中心にして－」『古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－』第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料　九州前方後円墳研究会，pp.145－173

今津啓子　1987「大阪湾沿岸地域出土の朝鮮系軟質土器」『東アジアの考古と歴史』下　岡崎敬先生退官記念論集　同朋舎出版，pp.102－126

今津啓子　1994「渡来人の土器－朝鮮系軟質土器を中心として－」『ヤマト王権と交流の諸相』（古代王権と交流5）　名著出版，pp.111－139

宇野隆夫　1999「古墳時代中・後期における食器・調理法の革新－律令制的食器様式の確立過程－」『日本考古学』第7号　日本考古学協会，pp.25－42

宇野慎敏　2002「豊前」『古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－』第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料　九州前方後円墳研究会，pp.73－94

小笠原好彦　1971「丹塗土師器と黒色土師器－土師器における二次的表面加工の問題について－」『考古学研究』第18巻第2号・第3号　考古学研究会，pp.36－57・64－72

小田和利　1994「北部九州のカマドについて」『文化財学論集』文化財学論集刊行会，pp.323－334

小田富士雄　1979「沖ノ島祭祀遺跡の時代とその祭祀形態」『宗像沖ノ島』Ⅰ本文　宗像大社復興期成会，pp.254－266

片岡宏二　1999『弥生時代渡来人と土器・青銅器』雄山閣出版

蒲原宏行　1995a「肥前（壱岐・対馬)」『九州における古墳時代首長墓の動向』九州考古学会・宮崎考古学会合同学会実行委員会，pp.46－68

蒲原宏行　1995b「肥前」『全国古墳編年集成』雄山閣出版，pp.24－27

蒲原宏行・田平徳栄・宮崎貴夫　1992「肥前」『前方後円墳集成』九州編　山川出版社，pp.48－57

木下正史　1976「古代炊飯具の系譜」『古代・中世の社会と民俗文化』和歌森太郎先生還暦記念論文集　弘文堂，pp.61－94

参考文献

九州前方後円墳研究会　2000「九州の埴輪　その変遷と地域性－壺形埴輪・円筒埴輪・形象埴輪・石製表飾－」第3回九州前方後円墳研究会発表要旨資料

九州前方後円墳研究会　2002「古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－」第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料

隈　昭志　1992「肥後」「前方後円墳集成」九州編　山川出版社，pp.65－69

甲元眞之　1995「古墳時代首長系譜の類型化－九州での事例的考察－」「西谷眞治先生古稀記念論文集」西谷眞治先生の古稀をお祝いする会，pp.119－141

小松　譲　2002「肥前地域における古墳時代中・後期土師器の編年」「古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－」第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料　九州前方後円墳研究会，pp.44－71

重藤輝行　1998「古墳時代中期における北部九州の首長と社会－福岡県を中心として－」「中期古墳の展開と変革－5世紀における政治的・社会的変化の具体相（1）－」埋蔵文化財研究会，pp. 207－233

重藤輝行　2002「福岡県における古墳時代中期～後期の土師器」「古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－」第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料　九州前方後円墳研究会，pp.21－43

白石太一郎　1997「有銘刀剣の考古学的検討」「新しい史料学を求めて」吉川弘文館，pp.189－240

新里貴之　2000「スセン當式土器」「琉球・東アジアの人と文化」上巻　高宮廣衛先生古稀記念論集　高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会，pp.153－173

杉井　健　1992「長法寺南原古墳におけるヒレ付円筒埴輪の製作技法」「長法寺南原古墳の研究」長岡京市文化財調査報告書第30冊　長岡京市教育委員会，pp.89－100

杉井　健　1993「竈の地域性とその背景」「考古学研究」第40巻第1号　考古学研究会，pp.33－60

杉井　健　1994「甑形土器の基礎的研究」「待兼山論叢」第28号　史学篇　大阪大学文学部，pp.31－56

杉井　健　1999a「熊本県における甑形土器と竈の普及－熊本県出土甑形土器・造り付け竈・移動式竈の集成－」「文学部論叢」第65号　歴史学篇　熊本大学文学会，pp.103－131

杉井　健　1999b「墓制と生活様式の共通圏の形成」「古墳時代首長系譜変動パターンの比較研究」平成8年度～平成10年度科学研究費補助金（基盤B・一般2）研究成果報告書　大阪大学文学部，pp.35－46

杉井　健　1999c「甑形土器の地域性」「国家形成期の考古学」大阪大学考古学研究室10周年記念論集　大阪大学考古学研究室，pp.383－409

杉井　健　1999d「首長系譜変動からみた生活様式の変化の様相－朝鮮半島系渡来文化と中央政権のかかわり－」「渡来文化の需要と展開－5世紀における政治的・社会的変化の具体相（2）－」埋蔵文化財研究会，当日配付資料pp.1－12

杉井　健　1999e「炊飯様式からみた東西日本の地域性」「古代史の論点」6　小学館，pp.103－124

杉井　健　2001「朝鮮半島系渡来文化の動向と古墳の比較研究試論－九州本島北部地域を題材として－」「考古学研究」第47巻第4号　考古学研究会，pp.90－104

杉井　健　2002a「古墳時代中期から後期の土師器研究の諸問題」「古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－」第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料　九州前方後円墳研究会，pp.1－20

杉井　健　2002b「第5回（2002年度）九州前方後円墳研究会によるひとつの成果－古墳時代中期以降の新規出現要素に着目して－」「九前研通信」第11号　九州前方後円墳研究会，pp.4－5

杉井　健・櫂　佳克編　2003「高熊2号墳測量調査報告」「考古学研究室報告」第38集　熊本大学文学部考古学研究室

清家　章　1999「古墳時代周辺埋葬墓考－畿内の埴輪棺を中心に－」「国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－」大阪大学考古学研究室，pp.231－260

髙木恭二　1995「肥後」「全国古墳編年集成」雄山閣出版，pp.16－19

髙木恭二・藏冨士寛　1998「肥後における古墳文化の特質－筑後八女古墳群との比較－」「八女古墳群の再検討－周辺地域で，なにがおこったか－」九州前方後円墳研究会，pp.69－84

高橋克壽　1988「器財埴輪の編年と古墳祭祀」「史林」第71巻第2号　史学研究会，pp.69－104

高橋克壽　1994「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41巻第２号　考古学研究会，pp.27－48
武末純一　1991「弥生時代の楽浪系土器と三韓系土器－瓦質土器を中心に－」『地方史研究』第41巻５号　地方史研究協議会，pp.9－20
武末純一　1993「朝鮮半島と日本の土器」『伽耶と古代東アジア』新人物往来社，pp.239－265
武末純一　1994「朝鮮半島南部の土器と九州の土器－若干の前提と予察－」『伽耶および日本の古墳出土遺物の比較研究』平成４・５年度科学研究費補助金（総合研究Ａ）研究成果報告書　国立歴史民俗博物館，pp.5－14
武末純一　1996「西新町遺跡の甕－その歴史的意義－」『碩晤尹容鎭教授定年退官記念論叢』，pp.599－615
伊達宗泰・森　浩一　1966「土器」『日本の考古学』Ⅴ　古墳時代（下）　河出書房新社，pp.188－210
東国土器研究会　1989『東国土器研究』第２号　特集　黒色土器－出現と背景
中西武尚・服部真和　2002「古墳時代中・後期の土師器－大分県－」『古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－』第５回九州前方後円墳研究会発表要旨資料　九州前方後円墳研究会，pp.95－115
中間研志　1987「松菊里型住居－我国稲作農耕受容期における竪穴住居の研究－」『東アジアの考古と歴史』中岡崎敬先生退官記念論集　同朋舎出版，pp.593－634
中村直子　2002「薩摩・大隅」『古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－』第５回九州前方後円墳研究会発表要旨資料　九州前方後円墳研究会，pp.175－200
西　弘海　1982「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集　平凡社，pp.447－471
橋口達也　1989「似非土師須恵器」『生産と流通の考古学』横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ　横山浩一先生退官記念事業会，pp.251－272
長谷川厚　1989「1988年『黒色土器－出現と背景－』の成果と課題」『東国土器研究』第２号　東国土器研究会，pp.178－181
花田勝弘　1991「筑紫宗像氏と首長権」『地域相研究』第20号上巻　地域相研究会，pp.149－203
花田勝弘　1999「沖ノ島祭祀と在地首長の動向」『古代学研究』148　古代学研究会，pp.1－13
林田和人　2002「肥後における中・後期の様相」『古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－』第５回九州前方後円墳研究会発表要旨資料　九州前方後円墳研究会，pp.117－144
原　俊一　1998「八女古墳群の再検討－宗像地域でなにがおこったか－」『八女古墳群の再検討－周辺地域で，なにがおこったか－』九州前方後円墳研究会，当日配布資料 pp.1－23
広瀬和雄　1991「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国・四国編　山川出版社，pp.24－26
広瀬和雄　1996「河内の渡来人－渡来文化の諸段階と渡来人－」『いにしえの渡りびと－近江・大和・河内の渡来人－』財団法人滋賀県文化財保護協会設立25周年記念　第７回埋蔵文化財調査研究会・シンポジウム　（財）滋賀県文化財保護協会・滋賀県立安土城考古博物館，pp.80－102
福尾正彦　1982「筑後月の岡古墳とその周辺」『森貞次郎博士古稀記念　古文化論集』下　森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会，pp.1027－1049
福永伸哉　1994「仿製三角縁神獣鏡の編年と製作背景」『考古学研究』第41巻第１号　考古学研究会，pp.47－72
福永伸哉　1998「対半島交渉から見た古墳時代倭政権の性格」『青丘学術論集』第12集　（財）韓国文化研究振興財団，pp.7－26
細川金也　1997「まとめ」『平成６・７年度東脊振村内文化財調査報告書（付　下川津西古墳・三津永田東遺跡）』東脊振村文化財調査報告書第21集　東脊振村教育委員会，pp.22－25
埋蔵文化財研究会　1987『弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題』（財）大阪府埋蔵文化財協会
埋蔵文化財研究会　1992『古墳時代の甕を考える』（財）和歌山県文化財センター
吉武孝礼・松尾　宏　1999「北部九州における渡来文化の様相」『渡来文化の受容と展開－５世紀における政治的・社会的変化の具体相（２）－』埋蔵文化財研究会，pp.89－125
宮崎敬士　1995「肥後における前方後円墳の動向」『九州における古墳時代首長墓の動向』九州考古学会・宮崎考古学会合同学会実行委員会，pp.110－121
宮田浩之　1995「筑後における古墳時代首長墓の動向」『九州における古墳時代首長墓の動向』九州考古学会・宮崎

考古学会合同学会実行委員会，pp.73－84
柳沢一男　1992「筑前」『前方後円墳集成』九州編　山川出版社，pp.31－40
柳沢一男　1995「筑紫」『全国古墳編年集成』雄山閣出版，pp.28－31
山尾幸久　1999『筑紫君磐井の戦争－東アジアのなかの古代国家－』新日本出版社
吉武孝礼　2000「初期須恵器からみた古墳時代中期の朝倉地方－堤当正寺古墳の位置づけについて－」『堤当正寺古墳』甘木市文化財調査報告書第49集　甘木市教育委員会，pp.91－96

【遺跡関連文献－図２～９の出典】

福岡県

赤岸遺跡　橋口達也・中間研志編『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第７集　福岡県教育委員会
赤幡森ケ坪遺跡　小田和利・中間研志編　1992『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第８巻　福岡県教育委員会
在自鬼塚裏遺跡　池ノ上宏・安武千里編　1995『在自遺跡群Ⅱ』津屋崎町文化財調査報告書第10集　津屋崎町教育委員会
有田遺跡　井沢洋一編　1986『有田・小田部』第７集　福岡市埋蔵文化財調査報告書第139集　福岡市教育委員会
飯氏遺跡群　松村道博編　1993『飯氏遺跡群１　国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ』福岡市埋蔵文化財調査報告第352集　福岡市教育委員会
池ノ口遺跡　池辺元明・杉原敏之編　1996『池ノ口遺跡』一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第３集　福岡県教育委員会
井原遺跡群　林　覚編　1990『井原遺跡群Ⅷ』前原町文化財調査報告書第32集　前原町教育委員会
沖出遺跡　児玉真一編　1987『沖出遺跡Ⅰ』浮羽町文化財調査報告第３集　浮羽町教育委員会
尾崎・天神遺跡　武田光正編　1991『尾崎・天神遺跡Ⅰ』遠賀町文化財調査報告書第２集　遠賀町教育委員会
貝元遺跡　中間研志編　1999『貝元遺跡Ⅱ』九州自動車道筑紫野I.C.建設に伴う筑紫野市所在弥生・古墳時代大集落の発掘調査報告　福岡県教育委員会
春日台遺跡　上村佳典編　1984『春日台遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第31集　財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
上唐原遺跡　小池史哲編　1995『上唐原遺跡Ⅰ』一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第２集　福岡県教育委員会
切杭遺跡　石井扶美子編　1997『夜須地区遺跡群ＸＸＩ　切杭遺跡』夜須町文化財調査報告書第36集　夜須町教育委員会
下稗田遺跡　長嶺正秀・末永弥義編　1985『豊前下稗田遺跡』行橋市文化財調査報告書第17集　行橋市教育委員会
惣利西遺跡　丸山康晴・平田定幸編　1985『春日地区遺跡群Ⅲ』春日市文化財調査報告書第15集　春日市教育委員会
鷹取五反田遺跡　水ノ江和同編　1999『鷹取五反田遺跡Ⅱ』一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第10集　福岡県教育委員会
立野遺跡　児玉真一編　1983「立野遺跡の調査」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』２　福岡県教育委員会
築城五反田遺跡　小池史哲編　2000『築城五反田遺跡・築城小迫遺跡』福岡県文化財調査報告書第153集　福岡県教育委員会
塚田２号墳　橋口達也・中間研志編『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第７集　福岡県教育委員会
塚堂遺跡　副島邦弘編　1984『塚堂遺跡Ⅱ』一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第２集　福岡県教育委員会
馬場弘稔編　1985『塚堂遺跡Ⅳ』一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第４集　福岡県教育委員会
徳永遺跡　松村道博編　1992『徳永遺跡（Ⅱ）　国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ』福岡市埋蔵文化財調査報告第306集　福岡市教育委員会

那珂遺跡　下村　智・荒牧宏行編　1991『那珂遺跡４』福岡市埋蔵文化財調査報告書第254集　福岡市教育委員会
永井遺跡　井上裕弘編　1985『永井遺跡』川崎町文化財調査報告書第１集　川崎町教育委員会
長野Ａ遺跡　山口信義・佐藤浩司編　1987『長野Ａ遺跡２』北九州市埋蔵文化財調査報告書第54集　財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査
柴尾俊介編　1987『長野Ａ遺跡３』北九州市埋蔵文化財調査報告書第55集　財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
野芥遺跡　米倉秀紀編　1998『野芥遺跡３　第７次・第８次調査の報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第576集　福岡市教育委員会
仲島遺跡　舟山良一編　1984『仲島遺跡Ⅳ』大野城市文化財調査報告書第12集　大野城市教育委員会
向　直也編　1992『仲島遺跡Ｘ』大野城市文化財調査報告書第34集　大野城市教育委員会
七板遺跡　佐土原逸男・佐々木隆彦編　1985『東小田遺跡群』福岡県文化財調査報告書第70集　福岡県教育委員会
西新町遺跡　重藤輝行編　2000『西新町遺跡Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第154集　福岡県教育委員会
野間窯跡群　橋口達也編　1982『野間窯跡群』岡垣バイパス関係埋蔵文化財調査報告第１集　福岡県教育委員会
藤の尾垣添遺跡　田中康信編　1989『藤の尾垣添遺跡Ⅱ』瀬高町文化財調査報告書第５集　瀬高町教育委員会
冨地原川原田遺跡　白木英敏編　1994『冨地原川原田Ⅰ』宗像市文化財調査報告書第39集　宗像市教育委員会
冨地原神屋崎遺跡　白木英敏編　1996『冨地原神屋崎』宗像市文化財調査報告書第41集　宗像市教育委員会
前田山遺跡　長嶺正秀編　1987『前田山遺跡』行橋市文化財調査報告書第19集　行橋市教育委員会
三雲遺跡　小池史哲編　1983『三雲遺跡Ⅳ』福岡県文化財調査報告書第65集　福岡県教育委員会
御床松原遺跡　井上裕弘編　1983『御床松原遺跡』志摩町文化財調査報告書第３集　志摩町教育委員会
三苫遺跡　榎本義嗣・長家　伸編　1996『三苫遺跡群２』福岡市埋蔵文化財調査報告書第477集　福岡市教育委員会
吉塚遺跡　池崎譲二ほか編　1989『吉塚１』福岡市埋蔵文化財調査報告書第202集　福岡市教育委員会
吉武遺跡群　二宮忠司・大庭友子編　2001『吉武遺跡群ＸⅢ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第675集　福岡市教育委員会

佐賀県

浦田遺跡　堤　安信ほか　1983「浦田遺跡」『西原遺跡　九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書３』佐賀県文化財調査報告書第66集　佐賀県教育委員会
久里天園遺跡　田島龍太・中島直幸編　1987『久里天園遺跡』唐津市文化財調査報告第19集　唐津市教育委員会（掲載図は一部改変）
下石動遺跡　高瀬哲郎編　1987『下石動遺跡　九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書６』佐賀県文化財調査報告書第86集　佐賀県教育委員会
東高田遺跡　西田　巌編　1992『原ノ町遺跡・東高田遺跡・櫟木遺跡・北宿遺跡・南宿遺跡』佐賀市文化財調査報告書第38集　佐賀市教育委員会
玉江遺跡　原田保則編　1987『玉江遺跡』武雄市文化財調査報告書第16集　武雄市教育委員会
野田遺跡　森田孝志編　1985『筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告書１』佐賀県文化財調査報告書第80集　佐賀県教育委員会
三津永田東遺跡　細川金也編　1997『平成６・７年度東脊振村内文化財調査報告書（付　下川津西古墳・三津永田東遺跡）』東脊振村文化財調査報告書第21集　東脊振村教育委員会
村徳永遺跡　前田達男編　1992『村徳永遺跡（Ｋ地区）・篠木野遺跡（１区）』佐賀市文化財調査報告書第37集　佐賀市教育委員会

熊本県

赤見前田遺跡　豊崎晃一編　1981『赤見前田遺跡』熊本県文化財調査報告第53集　熊本県教育委員会
櫛島遺跡　緒方　勉編　1975「櫛島遺跡」『久保遺跡・観音堂石塔群・櫛島遺跡』熊本県文化財調査報告第18集　熊本県教育委員会

神水遺跡　大城康雄編　1986『神水遺跡発掘調査報告書』熊本市教育委員会
瀬田裏遺跡　緒方　勉編　1991『瀬田裏遺跡調査報告Ⅰ』大津町教育委員会瀬田裏遺跡調査団・株式会社阿蘇大津ゴルフ場
中小野遺跡　隈　昭志編　1980『中小野・矢ノ下・目抜・アケサン』熊本県文化財調査報告第39集　熊本県教育委員会
迎原西遺跡　清田純一　1998「迎原西遺跡」『今どきの考古学－くまもと考古速報展－』熊本県立装飾古墳館

大分県

北ノ後遺跡　染矢和徳編　1999『馬姓遺跡・北ノ後遺跡・乙院屋敷遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（13）　大分県教育委員会
佐知遺跡　坂本嘉弘編　1989『佐知遺跡』大分県文化財調査報告書第81輯　大分県教育委員会
汐月遺跡　新宅信久編　1990『汐月遺跡』大分県佐伯市総合運動公園建設事業に伴う緊急発掘調査報告書Ⅰ　佐伯市教育委員会
長者原遺跡　土居直美編　1987『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ』日田市教育委員会
天神面遺跡　城戸　誠編　1990『竹田地区南部遺跡群Ⅰ』平成元年度竹田地区遺跡群発掘調査報告書　竹田市教育委員会
原田遺跡　村上久和ほか　1995『堂園遺跡・原田遺跡・岩塚古墳・玖珠SA地区遺跡群・谷ノ瀬遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（4）　大分県教育委員会
稙田市遺跡　吉田　寛編　1994『稙田市遺跡』大分県教育委員会

宮崎県

上薗遺跡　有馬義人・長津宗重編　1996『北原牧地区遺跡　上薗遺跡A・B・C地区（Ⅰ）　上薗遺跡E地区（Ⅰ）』新富町文化財調査報告書第19集　新富町教育委員会
大町遺跡　鳥枝　誠・久富なをみ編　1998『大町遺跡』宮崎市文化財調査報告書第33集　宮崎市教育委員会
上田代遺跡　中野和浩編　1997『田代地区遺跡群　上田代遺跡・松山遺跡・竹之内遺跡・妙見原遺跡』えびの市埋蔵文化財調査報告書第20集　えびの市教育委員会
源藤遺跡　伊東　但編　1987『源藤遺跡』宮崎市教育委員会
浄土江遺跡　中山　豪編　1993『浄土江遺跡Ⅱ』宮崎市教育委員会
童子丸遺跡　蓑方政幾編　1991『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第14集　西都市教育委員会
妙見遺跡　吉本正典編　1994『野久首遺跡・平原遺跡・妙見遺跡』九州縦貫自動車道（人吉～えびの間）建設工事にともなう埋蔵文化財調査報告書第2集　宮崎県教育委員会

鹿児島県

永野原遺跡　狭川真一編　2000『永野原遺跡』高山町埋蔵文化財発掘調査報告書（7）　高山町教育委員会・（財）元興寺文化財研究所
辻堂原遺跡　池端耕一ほか　1977『辻堂原遺跡』吹上中学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　吹上町教育委員会

【古墳関連文献－図13の出典】

鋤崎古墳　柳沢一男編　1984『鋤崎古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第112集　福岡市教育委員会
杉山富雄編　2002『鋤崎古墳－1981～1983年調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第730集　福岡市教育委員会
丸隈山古墳　柳沢一男編　1986『丸隈山古墳Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第146集　福岡市教育委員会
若八幡宮古墳　柳田康雄編　1971『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集　福岡県教育委員会
一貫山銚子塚古墳　小林行雄　1952『福岡縣糸島郡一貫山村田中銚子塚古墳の研究』便利堂
月岡古墳　児玉真一編　1986『月の岡古墳』吉井町文化財調査報告書第3集　吉井町教育委員会
平川祐介編　1989『月岡古墳　国指定重要文化財出土図録』吉井町教育委員会

塚堂古墳　　馬場弘稔編　1983『塚堂遺跡Ⅰ』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第１集　福岡県教育委員会
日岡古墳　　児玉真一編　1989『若宮古墳群Ⅰ』吉井町文化財調査報告書第４集　吉井町教育委員会
東郷高塚古墳　原　俊一編　1989『東郷高塚Ⅰ』宗像市文化財調査報告書第21集　宗像市教育委員会
堤当正寺古墳　松尾　宏編　2000『堤当正寺古墳』甘木市文化財調査報告書第49集　甘木市教育委員会
塚原古墳群　豊崎晃一・清田純一　1986『塚原古墳群発掘調査報告書－史跡・塚原古墳群整備事業に伴う調査Ⅰ－』城南町文化財調査報告第５集　城南町教育委員会，など

【甑形土器出土遺構詳細】

（図２）１：福岡県前原市三雲遺跡八龍Ⅰ－18地区１号住居、２：福岡県前原市井原遺跡群20号住居、３：佐賀県唐津市久里天園遺跡４号住居、４：佐賀市村徳永遺跡Ｋ地区105号住居、５：佐賀県東背振村下石動遺跡Ａ地区26号住居、６：福岡県夜須町切杭遺跡21号住居、７：福岡県夜須町七板遺跡15号住居、８：福岡市西新町遺跡第12次81号住居、９：福岡市吉武遺跡群第２次調査Ⅸ区溝状遺構07、10：福岡市那珂遺跡第23次調査22号住居、11：福岡市吉塚遺跡第１次調査６地点溝365、12：福岡市三苫遺跡第２・３次調査1011号住居、13：福岡県宗像市冨地原川原田遺跡27号住居、14：福岡県行橋市前田山遺跡土坑８、15：福岡県行橋市下稗田遺跡Ⅰ地点１号住居、16：福岡県新吉富村池ノ口遺跡26号住居、17：大分市稙田市遺跡流路１、18：福岡県浮羽町沖出遺跡13号住居、19：福岡県吉井町塚堂遺跡Ａ地区22号Ａ（新）住居、20：宮崎県新富町上薗遺跡Ｅ地区２号住居

（図３）１：福岡市有田遺跡第52次調査１号住居、２：福岡県志摩町御床松原遺跡55号住居、３：佐賀県東脊振村浦田遺跡17号住居、４：佐賀市東高田遺跡１区土坑123、５：佐賀県武雄市玉江遺跡202号住居、６：福岡県瀬高町藤の尾垣添遺跡１号住居、７：福岡県吉井町鷹取五反田遺跡67号住居、８：大分県日田市長者原遺跡竪穴住居、９：大分県玖珠町原田遺跡４号住居、10：福岡市吉塚遺跡第１次調査６地点遺構382、11：福岡市那珂遺跡第23次調査１号住居、12：福岡県筑紫野市貝元遺跡113号住居、13：福岡県夜須町七板遺跡３号住居、14：福岡県宗像市冨地原川原田遺跡28号住居、15：福岡県遠賀町尾崎・天神遺跡25号住居、16：福岡県北九州市春日台遺跡３号住居、17：福岡県北九州市長野Ａ遺跡Ⅲ区１号住居、18：福岡県川崎町永井遺跡11号住居、19：福岡県築城町築城五反田遺跡第２地点２号住居、20：福岡県大平村上唐原遺跡１号住居、21：大分県佐伯市汐月遺跡３号遺構、22：大分市北ノ後遺跡11号住居、23：大分市稙田市遺跡８号住居、24：宮崎市浄土江遺跡２区大型溝状遺構、25：宮崎県新富町上薗遺跡Ｅ地区14号住居

（図４）１：福岡県二丈町塚田２号墳周溝、２：福岡県二丈町赤岸遺跡竪穴住居、３：福岡県春日市惣利西遺跡７号住居、４：佐賀県神埼町野田遺跡土坑005、５：熊本県大津町瀬田裏遺跡133号住居、６：熊本県益城町櫛島遺跡第２調査区１号住居、７：熊本県城南町赤見前田遺跡Ｂ地区ｂ－２Ⅲ層、８：熊本県小川町中小野遺跡３号住居、９：福岡市徳永遺跡Ⅲ区６号住居、10：福岡市飯氏遺跡群Ⅰ区Ｃ調査区44号住居、11：福岡市野芥遺跡第８次調査溝02Ａ群、12：福岡県大野城市仲島遺跡溝03、13：福岡県津屋崎町在自鬼塚裏遺跡土坑05、14：福岡県宗像市冨地原神屋崎遺跡土坑８、15：福岡県夜須町切杭遺跡40号住居、16：福岡県吉井町鷹取五反田遺跡87号住居、17：福岡県大平村上唐原遺跡６号溝、18：大分県三光村佐知遺跡11号住居、19：宮崎市源藤遺跡２号住居

（図５）１：福岡県筑紫野市貝元遺跡243号住居、２：福岡県甘木市立野遺跡11号住居、３：福岡県吉井町鷹取五反田遺跡50Ｂ号住居、４：熊本県大津町瀬田裏遺跡155号住居、５：熊本市神水遺跡11・12号住居、６：福岡市大野城市仲島遺跡溝13、７：福岡県岡垣町野間窯跡群灰原イ上層、８：福岡県北九州市長野Ａ遺跡Ⅱ区１層、９：福岡県築城町赤幡森ケ坪遺跡39号住居、10：大分県玖珠町原田遺跡４号住居、11：大分市北ノ後遺跡11号住居、12：大分県佐伯市汐月遺跡３号遺構、13：大分県竹田市天神面遺跡１号住居、14：宮崎市大町遺跡14号住居

（図６）１：宮崎県西都市童子丸遺跡Ｃ地点、２：宮崎市大町遺跡39号住居、３：宮崎市源藤遺跡21号住居、４：宮崎県えびの市上田代遺跡８号住居

（図７）１～３：福岡県吉井町塚堂遺跡Ｄ地区９号住居

第Ⅱ部　甑形土器および竈にかんする主要文献一覧

一　凡　　例

1　わたしが甑形土器や竈についての勉強をはじめた頃、先行研究を認知し収集することにとても苦労した記憶がある。そこで、この種の資料についての今後の研究に資することを目的として、わたしが2002年12月までに、何らかのかたちで入手し、読むことのできた文献をここに掲げることにした。

2　今回は、国内発行の文献について一覧を作成した。韓国や中国など海外発行の文献については、別の機会にまとめたい。

3　掲載は、発行年順とした。そして、それぞれの発行年ごとに執筆者名の50音順に並べた。発行年順としたのは、研究史を学ぶ際の便を考慮したためである。

4　執筆者別の索引は最後に掲載した。

5　雑誌掲載論文についてはつねに注意を払っているが、すべての地方誌をチェックできているわけではないので、多くの遺漏があるかと思う。そのあたりについて、ご教示をいただければ幸いである。

6　発掘調査報告書に掲載されている考察についても極力目を通すように心掛けているが、今回、そのすべてを掲載することができなかった。したがって、発掘調査報告書に掲載されたものについては不十分な一覧になっていることを断っておく。

二　甑形土器にかんする主要文献一覧

1956年

中村孝三郎・寺村光晴　1956「縄文文化における甑様土器－とくに越後発見の多孔底の土器を中心として－」『考古学雑誌』42－1　日本考古学会

1964年

野村幸季　1964「古墳時代における甑形土器についての予察」『立正史学』28　立正大学史学会

1965年

武藤雄六　1965「中期縄文土器の蒸器－櫛形文土器の変遷と意義－」『信濃』17－7　信濃史学会

1966年

岩崎卓也　1966「甑小考」『信濃』18－4　信濃史学会

1969年

橋本澄夫　1969「縄文早期末における穿孔（丸）底土器の用途」『物質文化』13　物質文化研究会

1970年

堀田啓一　1970「日本上代の甑について」『日本古文化論攷』吉川弘文館

1976年

柿沼幹夫　1976「甑形土器に関する一考察－南関東地方出土例を中心として－」『埼玉考古』15　埼玉考古学会

木下正史　1976「古代炊飯具の系譜」『古代・中世の社会と民俗文化』弘文堂

1980年

桑原隆博　1980「三次市内出土の所謂『山陰型の甑形土器』について」『芸備』10　芸備友の会

清水真一・景山俊邦・村上裕紀　1980「『コシキ形土器』について」『長瀬高浜だより』20　長瀬高浜遺跡調査事務所

1982年

中村倉司　1982「大形甑－埼玉県を中心として－」『土曜考古』5　土曜考古学研究会

1984年

柿沼幹夫　1984「甑に関する覚書」『埼玉県立博物館紀要』11　埼玉県立博物館

米田文孝　1984「山陰型甑形土器の再検討－分布とその機能を中心に－」『関西大学考古学研究紀要』4　関西大学考古学研究室

1985年

中西克宏　1985「須恵器出現期の土師器－煮沸用土器を中心に－」『紀要』Ⅰ　（財）東大阪市文化財協会

門田誠一　1985「有溝牛角形把手－韓式系土器についてのメモ－」『考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズⅡ　同志社大学考古学シリーズ刊行会

1986年

谷若倫郎　1986a「いわゆる、山陰系『コシキ形』土器について」『宮前川遺跡』（財）愛媛県埋蔵文化財センター

谷若倫郎　1986b「山陰系『コシキ形土器』の垂下使用法」『愛媛考古学』9　愛媛考古学協会

東森市良　1986「甑考－山陰における古墳時代大形甑形土器を中心として－」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集　山本清先生喜寿記念論集刊行会

1987年

岡田龍平・岡田善治・杉谷愛象　1987「『山陰型甑形土器』の出自を巡って－会見町朝金・天王原遺跡について－」『水曜考古学談叢』1　水曜考古倶楽部

佐原　眞　1987「煮るか蒸すか」『飲食史林』7　飲食史林刊行会

外山政子　1987「甑について－平安時代の甑を中心として－」『研究紀要』4　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

名久井文明　1987「わが国甑の伝統と渡来に関する一予察」『岩手県立博物館研究報告』5　岩手県立博物館

1988年

酒井清治　1988「渡来人の移住と模倣土器」『季刊考古学』24　雄山閣出版

坂井秀弥　1988「古代のごはんは蒸した『飯』であった－古代の米調理法復原メモ－」『新潟考古学談話会会報』2　新潟考古学談話会

中西克宏　1988「把手付甑形土器について」『東大阪市文化財協会ニュース』3－3　（財）東大阪市文化財協会

坂野和信　1988「和泉式後期土器の様相－竈導入期の土器群－」『紀要』2　本庄市立歴史民俗資料館

1989年

阿部明彦　1989「山形県における黒色土器出現の様相と展開」『東国土器研究』2　東国土器研究会

池崎譲二・杉山富雄・小畑弘己　1989「いわゆる『山陰系甑形土器』について」『吉塚1』福岡市埋蔵文化財調査報告書第202集　福岡市教育委員会

伊藤博幸　1989「陸奥国の黒色土師器－岩手・宮城地域－」『東国土器研究』2　東国土器研究会

木本元治　1989「福島県内の黒色土器（古墳時代～奈良時代）」『東国土器研究』2　東国土器研究会

坂井秀弥　1989「新潟県の黒色土器－6～8世紀を中心に－」『東国土器研究』2　東国土器研究会

坂本美夫　1989「『黒色土器の出現と展開』－山梨県地域－」『東国土器研究』2　東国土器研究会

武内雅人　1989「和歌山県の初期須恵器・陶質土器・韓式系土器」『韓式系土器研究』Ⅱ　韓式系土器研究会

外山政子　1989「群馬県地域の土師器甑について」『研究紀要』6　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

中村倉司　1989「関東地方における竈・大形甑・須恵器出現時期の地域差」『研究紀要』6　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

名久井文明　1989「わが国甑の伝統と渡来に関する一予察（追加）」『岩手県立博物館研究報告』7　岩手県立博物館

原　明芳　1989「長野県における『黒色土器』の出現とその背景－5世紀末の食膳具様式の成立との関連で－」『東国土器研究』2　東国土器研究会

間壁葭子　1989「甕飯」『文明のクロスロード』31　博物館等建設推進九州会議

森　泰通　1989「梅坪遺跡出土の小形甑について」『三河考古』2　三河考古刊行会

梁木　誠・田熊清彦　1989「栃木県の彩色土器について」『東国土器研究』2　東国土器研究会

山本恵一　1989「静岡県下の6～8世紀の黒色土器について－主に東部地方を中心として－」『東国土器研究』2　東国土器研究会

1990年

神田恵子・大崎靖子・中川由夏・大沼芳幸　1990「有孔鉢について」『正伝寺南遺跡』滋賀県教育委員会

小林久彦　1990「須恵器出現以降の土師器の変遷－特に須恵器生産の開始と煮沸形態の変化に注目して－」『三河考古』3　三河考古刊行会

1991年

坂野和信　1991「和泉式土器の成立について－序論－」『土曜考古』16　土曜考古学研究会

間壁葭子　1991「米の食べ方－蒸すと炊く－」『考古学ジャーナル』337　ニュー・サイエンス社

松山智弘　1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相－大東式の再検討－」『島根考古学会誌』8　島根考古学会

三沢正善・三沢京子　1991「甑で何をつくったか」『日光道西・東原遺跡発掘調査報告書』小山市文化財調査報告書26　小山市教育委員会

南　博史　1991「遺跡出土の曲物製コシキ」『朱雀』4（京都文化博物館研究紀要4）　京都文化博物館

1992年

京嶋　覚　1992「古墳時代後半期における土師器の器種構成」『大阪市平野区長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ　（財）大阪市文化財協会

南　博史　1992「曲物製コシキ」『考古学ジャーナル』354　ニュー・サイエンス社

1993年

亀田修一　1993「考古学から見た渡来人」『古文化談叢』30（中）　九州古文化研究会

二　甑形土器にかんする主要文献一覧

桐生直彦　1993a「床面出土遺物の検討（Ⅱ）」『物質文化』56　物質文化研究会
桐生直彦　1993b「甑の特異な出土状態について－東京都における弥生時代後期～古墳時代中期の事例から－」『東国史論』8　群馬考古学研究会

1994年

植田文雄　1994「古墳時代土器論－近江の土師器、その変遷と画期－」『滋賀考古』12　滋賀考古学研究会
杉井　健　1994a「山陰型甑形土器と山陰地方」『古文化談叢』33　九州古文化研究会
杉井　健　1994b「甑形土器の基礎的研究」『待兼山論叢』28　史学篇　大阪大学文学部
鍋田　勇　1994「山城・丹波地域出土の韓式系土器と甑」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』2　（財）大阪府埋蔵文化財協会
原　明芳　1994「松本平における食器様式の変化と窯業生産－７世紀から12世紀を中心として－」『中部高地の考古学』Ⅳ　長野県考古学会30周年記念論文集　長野県考古学会

1995年

石本　弘　1995「福島県における律令制成立以前の土器様相とその背景」『東国土器研究』4　東国土器研究会
桑原隆博　1995「所謂『山陰型甑形土器』についての覚書－広島県出土例を中心にして－」『研究輯録』Ⅴ　（財）広島県埋蔵文化財調査センター
佐原　眞　1995「米と日本文化」『国立歴史民俗博物館研究報告』60　国立歴史民俗博物館
津野　仁　1995「栃木県における６・７世紀の土器編年と地域的特徴」『東国土器研究』4　東国土器研究会
坪根伸也　1995「羽田遺跡出土土器に関する二・三の問題」『羽田遺跡』Ⅱ　大分市営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（２）　大分市教育委員会
花岡　弘・西山克己　1995「信州の６世紀・７世紀の土器様相－現時点での概略として－」『東国土器研究』4　東国土器研究会
東　和幸　1995「弥生時代の煮沸土器に波状口縁がないのはなぜか」『鹿児島考古』29　鹿児島考古学会
村田晃一　1995「宮城県における６・７世紀の土器様相」『東国土器研究』4　東国土器研究会
森原明廣　1995「山梨県地域における古墳時代後期の土器様相」『東国土器研究』4　東国土器研究会
山本恵一　1995「静岡県下の６～７Ｃの土師器－主に駿河東部・伊豆北部の現状について－」『東国土器研究』4　東国土器研究会

1996年

上村安生　1996「伊勢・伊賀における古代土師器煮炊具の様相」『鍋と甕そのデザイン』第４回東海考古学フォーラム　東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
北野博司　1996「古代北陸の煮炊具」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東４　煮炊具－』古代の土器研究会第４回シンポジウム　古代の土器研究会
小森俊寛　1996a「近畿北部の煮炊具－但馬・丹後・丹波・山城・大和・近江・伊賀・伊勢・志摩－」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東４　煮炊具－』古代の土器研究会第４回シンポジウム　古代の土器研究会
小森俊寛　1996b「総説」『古代の土器４・煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会
小森俊寛　1996c「概説 古代前半期における大和・山城・近江の煮炊具」『古代の土器４・煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会
小森俊寛　1996d「山城北部・南部」『古代の土器４・煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会
佐藤憲幸・村田晃一　1996「東北の煮炊具」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東４　煮炊具－』古代の土器研究会第４回シンポジウム　古代の土器研究会
佐藤竜馬　1996「四国の煮炊具」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東４　煮炊具－』古代の土器研究会第４回シンポジウム　古代の土器研究会
佐原　眞　1996『食の考古学』東京大学出版会
高橋浩二　1996『食卓の考古学－食器からみた人々のくらし－』第14回歴民資料室テーマ展示　羽曳野市教育委員会
武田恭彰　1996「山陽地方の煮炊具」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東４　煮炊具－』古代の土器研究会

第4回シンポジウム　古代の土器研究会
巽淳一郎　1996「煮炊具の生産と供給」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東4　煮炊具－』古代の土器研究会第4回シンポジウム　古代の土器研究会
西川修一　1996「南関東の甕」『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム　東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
橋本勝行　1996「丹後北部」『古代の土器4・煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会
長谷川厚　1996「古代前半期における関東地方の煮炊具の様相」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東4　煮炊具－』古代の土器研究会第4回シンポジウム　古代の土器研究会
畑中英二　1996「近江」『古代の土器4・煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会
広江耕史　1996「山陰の煮炊具－出雲・石見－」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東4　煮炊具－』古代の土器研究会第4回シンポジウム　古代の土器研究会
三好美穂　1996a「都城の煮炊具－藤原京・平城京・長岡京・平安京－」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東4　煮炊具－』古代の土器研究会第4回シンポジウム　古代の土器研究会
三好美穂　1996b「大和」『古代の土器4・煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会
森川常厚　1996「伊勢・志摩・斎宮」『古代の土器4・煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会
山本信夫　1996「古代前期の煮炊具－筑前・筑後・豊前・豊後・肥前－」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東4　煮炊具－』古代の土器研究会第4回シンポジウム　古代の土器研究会

1997年

赤井博之　1997「律令制変質期の須恵器の系譜－茨城県－」『東国の須恵器－関東地方における歴史時代須恵器の系譜－』古代生産史研究会'97シンポジウム　古代生産史研究会
江口　桂　1997「律令制変質期の須恵器の系譜－埼玉県・東京都－」『東国の須恵器－関東地方における歴史時代須恵器の系譜－』古代生産史研究会'97シンポジウム　古代生産史研究会

1998年

川村満博　1998「熊の山遺跡の奈良・平安時代の土器様相について－平成7年度調査の成果から－」『研究ノート』7　（財）茨城県教育財団
酒井清治　1998「日韓の甑の系譜から見た渡来人」『楢崎彰一先生古稀記念論文集』楢崎彰一先生古稀記念論文集刊行会
南　博史　1998「蒸籠の民具学的研究」『列島の考古学』渡辺誠先生還暦記念論集　渡辺誠先生還暦記念論集刊行会

1999年

石神孝子・笠原みゆき　1999「甲斐における古墳時代中期の土器様相」『東国土器研究』5　東国土器研究会
植田千佳穂　1999「土器からみた地域性」『研究輯録』Ⅸ　（財）広島県埋蔵文化財調査センター
宇野隆夫　1999「古墳時代中・後期における食器・調理法の革新－律令制的食器様式の確立過程－」『日本考古学』7　日本考古学協会
小沢　洋　1999「房総の古墳中期土器とその周辺」『東国土器研究』5　東国土器研究会
樫村宣行・土生朗治・白石真理　1999「茨城県における5世紀の動向」『東国土器研究』5　東国土器研究会
亀田修一　1999「武蔵の朝鮮系瓦と渡来人」『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論文集　森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
坂口　一　1999「群馬県における古墳時代中期の土器の様相－荒砥北三木堂遺跡の出土土器を中心として－」『東国土器研究』5　東国土器研究会
杉井　健　1999「甑形土器の地域性」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室10周年記念論集　大阪大学考古学研究室
鈴木敏則　1999「遠江の古墳時代中期土器様式（山ノ花様式）」『東国土器研究』5　東国土器研究会
高橋誠明　1999「宮城県における古墳時代中期の土器様相」『東国土器研究』5　東国土器研究会
田中清美　1999「SE703出土韓式系土器と土師器の編年的位置づけ」『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告』Ⅶ（財）

大阪市文化財協会
冨沢一明・広田和穂・直井雅尚・島田哲男・山下誠一　1999「長野県における古墳時代中期の土器様相－屈折脚高坏の出現から消滅までの予察－」『東国土器研究』5　東国土器研究会
中村倉司　1999「埼玉県における5世紀代の土器－和泉式土器の行方－」『東国土器研究』5　東国土器研究会
長谷川厚　1999「神奈川県における古墳時代中期の土器について－変遷と画期の側面から－」『東国土器研究』5　東国土器研究会
福田健司・清野利明・中山弘樹　1999「東京都における5世紀の土器と問題点」『東国土器研究』5　東国土器研究会
藤田典夫　1999「栃木県における5世紀の土器編年」『東国土器研究』5　東国土器研究会
向井裕知　1999「加賀における5世紀の土器様相－計量的分析と使用痕の観察から－」『北陸の考古学』Ⅲ（石川考古学研究会々誌42）　石川考古学研究会
望月精司　1999「北陸型煮炊具の出現と成立過程－加賀地域及び小松市額見町遺跡の事例検討を中心として－」『北陸の考古学』Ⅲ（石川考古学研究会々誌42）　石川考古学研究会
柳沼賢治　1999「福島県における5世紀土器とその前後」『東国土器研究』5　東国土器研究会
山本恵一　1999「駿河の古墳時代中期の土器－東駿河を中心にして－」『東国土器研究』5　東国土器研究会

2000年

奥　和之　2000「出土した甑について」『安威遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告1999－6　大阪府教育委員会
亀田修一　2000「鉄と渡来人－古墳時代の吉備を対象として－」『福岡大学総合研究所報』240　福岡大学総合研究所
小林正史・柳瀬昭彦　2000「弥生時代の米の調理法（1）（2）」『考古学ジャーナル』454・455　ニュー・サイエンス社
佐久間正明　2000「福島県における五世紀代の土器変遷－様式的側面を中心に－」『法政考古学』26　法政考古学会
重藤輝行　2000「仁右衛門畑遺跡を中心とした浮羽郡の古墳時代土師器編年」『仁右衛門畑遺跡』Ⅰ　一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告　福岡県教育委員会
武末純一　2000「北部九州の百済系土器－4・5世紀を中心に－」『福岡大学総合研究所報』240　福岡大学総合研究所
弘前市教育委員会　2000「青森・弘前市・早稲田遺跡出土の甑状土器について－記者発表資料から－」『文化財発掘出土情報』2000－7　ジャパン通信情報センター

2001年

亀田修一　2001「出雲・石見・隠岐の朝鮮系土器－古墳時代資料を中心に－」『蟹谷遺跡・上沢Ⅲ遺跡・古志本郷遺跡Ⅲ』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XⅡ　島根県教育委員会・国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所
重藤輝行　2001「西新町遺跡における朝鮮半島系土器について」『西新町遺跡』Ⅲ　福岡県文化財調査報告書第157集　福岡県教育委員会
杉井　健　2001「朝鮮半島系渡来文化の動向と古墳の比較研究試論－九州本島北部地域を題材として－」『考古学研究』47－4　考古学研究会
高橋　学　2001「志木市における古墳時代の土師器の編年（2）－5世紀から7世紀の甑・甕形土器の変遷－」『あらかわ』4　あらかわ考古談話会
坪根伸也・塩地潤一　2001「豊後国の土器編年」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会
長川加奈子　2001「山陰型甑形土器」『神女大史学』18　神戸女子大学史学会
松永幸寿　2001「宮崎平野における弥生時代後期中葉～古墳時代中期の土器編年」『宮崎考古』17　宮崎考古学会

2002年

杉井　健　2002「古墳時代中期から後期の土師器研究の諸問題」『古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－』第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料　第5回九州前方後円墳研究会実行委員会
辻　美紀　2002「河内地域における古墳時代中期の土師器」『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告』Ⅸ　（財）大阪市文化財協会

三　竈にかんする主要文献一覧

1918年

高橋健自　1918「釜及竈形土器」『考古学雑誌』９－３　考古学会

1928年

島田貞彦　1928「本邦古墳発見の竈形土器」『歴史と地理』22－５　史學地理學同攷會

1929年

島田貞彦　1929「再び竈形土器に就いて」『歴史と地理』24－４　史學地理學同攷會

1937年

島本　一　1937a「稲村山古墳について」『考古学雑誌』27－５　考古学会

島本　一　1937b「竈形土器に就いて」『大和志』４－８　大和國志会

1955年

大川　清　1955「カマド小考」『落合』早稲田大学考古学研究室

大場磐雄　1955「土師式住居址から見た諸問題」『平出』平出遺跡調査会

岡崎　敬　1955「中国古代のかまどについて－釜甑形式より鍋形式への変遷を中心として－」『東洋史研究』14－１・２合刊号　東洋史研究会

郷田洋文　1955「竈神考」『日本民俗学』２－４　日本民俗学会

1958年

郷田洋文　1958「いろりと火」『日本民俗学大系』６　平凡社

1965年

中尾芳治　1965「竈をめぐる問題について」『難波宮址の研究』研究予察報告第五第二部　大阪市教育委員会・難波宮址顕彰会

1966年

宇田川洋　1966「北海道における擦文式土器時代の竪穴式住居址」『物質文化』８　物質文化研究会

和島誠一・金井塚良一　1966「集落と共同体」『日本の考古学』Ⅴ　河出書房新社

1970年

水野正好　1970「滋賀郡所住の漢人系帰化氏族とその墓制」『滋賀県文化財調査報告書』４　滋賀県教育委員会

1971年

金子裕之　1971「古墳時代屋内祭祀の一考察」『国史学』84　国学院大学内国史学会

椚　国男　1971「鬼高住居のカマドの設計」『小田原考古学研究会会報』４　小田原考古学研究会

原島礼二　1971「日本古代社会論－大家族の成立と発展に関する覚書－」『現代歴史学の課題』上　青木書店

水野正好　1971「素描・漢人系氏族の古墳をめぐって」『アジア文化』８－２　アジア文化研究所

1972年

水野正好　1972「外来系氏族と竈の信仰」『大阪府の歴史』２　大阪府史編集室

1973年

桐原　健　1973「釜から鍋へ－古代東国における火処と炊具の変貌－」『信濃』25－11　信濃史学会

林　博通　1973「カマド出現に関する二・三の問題」『水と土の考古学』小江慶雄先生還暦記念論集　小江先生還暦記念論集刊行会

松前　健　1973「古代宮廷竈神考」『古代文化』ＸＸＶ－２・３　（財）古代学協会

1974年

佐々木達夫　1974「古代村落の変遷過程－東国の竪穴住居址－」『原史古代社会研究』Ⅰ　校倉書房

佐藤克己　1974「小室遺跡における竈」『小室』千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　房総考古資料刊行会

三　竈にかんする主要文献一覧

1975年

石野博信　1975「考古学から見た古代日本の住居」『家』社会思想社

高橋一夫　1975「和泉・鬼高期の諸問題」『原始古代社会研究』2　原始古代社会研究会

林巳奈夫　1975「漢代の飲食」『東方学報』48　京都大学人文科学研究所

1976年

中山吉秀　1976「離れ国分考」『古代』61　早稲田大学考古学会

1977年

桐原　健　1977「古代東国における竈信仰の一面－竈内支石のあり方について－」『国学院雑誌』昭和52年9月　国学院大学

1978年

稲田孝司　1978「忌の竈と王権」『考古学研究』25－1　考古学研究会

笹森健一　1978「平安時代の諸問題」『埼玉県上福岡市川崎遺跡（第3次）・長宮遺跡発掘調査報告書』上福岡市教育委員会

1979年

柿沼幹夫　1979「住居址について」『下田・諏訪』埼玉県教育委員会

前川明久　1979「贊土師韓竈考」『日本歴史』374　日本歴史学会

1980年

田崎博之　1980「干潟遺跡出土土器の編年」『県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告1　干潟遺跡Ⅰ』福岡県文化財調査報告書第59集　福岡県教育委員会

1981年

岡　憲雄　1981「竈について」『六反田』大里郡岡部町六反田遺跡調査会・埼玉県立歴史資料館

寺社下博　1981「古墳時代住居の廃棄に関する問題点」『先史』12　駒沢大学考古学研究室

水野正好　1981「滋賀郡の文物－二、三の語り」『滋賀考古学論叢』1　滋賀考古学論叢刊行会

1981年

乾　芳宏　1982「擦文時代以降における火処変遷の一考察」『物質文化』39　物質文化研究会

大橋信弥　1982「近江における長胴甕の出現と展開－カマドの出現と関係して－」『吉身中遺跡発掘調査報告書－守山市吉身町所在』滋賀県教育委員会

窪　徳忠　1982「東南アジア在住華人の竈神信仰」『歴史における民衆と文化』酒井忠夫先生古稀祝賀記念論集　国書刊行会

栗城譲一・鶴間正昭・比田井克仁　1982「多摩ニュータウン地域の古代（1）」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』Ⅰ　（財）東京都埋蔵文化財センター

笹森紀己子　1982「かまど出現の背景」『古代』72　早稲田大学考古学会

谷　　旬　1982「古代東国のカマド」『研究紀要』7　（財）千葉県文化財センター

水野正好　1982「竈形－日本古代竈神の周辺」『古代研究』24　（財）元興寺文化財研究所

渡辺　武　1982「漢代の画像に見える庖厨と調理」『史観』107　早稲田大学史学会

1983年

高橋一夫　1983「集落分析の一視点－入口と集落の道－」『埼玉考古』21　埼玉考古学会

中島誠一　1983「近江におけるカマドの系譜－型式および伝承による一考察－」『角田文衛博士古稀記念　古代学叢論』角田文衛先生古稀記念事業会

西谷　正　1983「加耶地域と北部九州」『太宰府古文化論叢』上巻　吉川弘文館

林　博通・栗本政志　1983「近江国府関連官衙跡の調査－大津市瀬田野畑遺跡の調査概要－」『古代文化』35－1　（財）古代学協会

四柳嘉章　1983「古墳時代の沙庭と祭具－富来町高田遺跡祭祀遺構の一考察－」『北陸の考古学』（石川考古学研究会々誌26）　石川考古学研究会

1984年

川上秀秋　1984「カマドの付設位置について」『葛原（A)･(B）遺跡』（財）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室

桐生直彦　1984「カマドを有する住居址を中心とした遺物の出土状態について（素描)」『神奈川考古』19　神奈川考古同人会

駒見和夫　1984「古代における炉とカマドー北武蔵での検討を中心としてー」『信濃』36－4　信濃史学会

高橋　学　1984「奈良・平安時代の竪穴住居跡復元ーカマドの類型化作業を通じてー」『秋田考古学』38　秋田考古学会

樋口吉文　1984「SA01住居址内検出のSC01竈について」『四ツ池遺跡』堺市教育委員会

松浦俊和　1984「ミニチュア炊飯具形土器論ー古墳時代後期・横穴式石室墳をめぐる墓前祭祀の一形態ー」『史想』20　京都教育大学考古学研究会

1985年

大林太良　1985「蘆刈以前ー竈と夫婦・家族ー」『岩波講座日本考古学月報』2　岩波書店

金子裕之　1985「平城京と祭場」『国立歴史民俗博物館研究報告』7　国立歴史民俗博物館

富田好久　1985「古代に於ける炉とカマドの変遷」『末永先生米壽記念献呈論文集』乾　末永先生米寿記念会

中村　喬　1985「竈神と竈の祭についてー中国の年中行事に関する覚え書ー」『立命館文学』481・482　立命館大学人文学部

高橋一夫　1986「生活遺構・遺物の変化の意味するものー竈と鉄製農具ー」『季刊考古学』16　雄山閣出版

武田光正　1986a「カマドのあり方について」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』8　甘木市所在立野遺跡の調査（3）　福岡教育委員会

武田光正　1986b「カマド祭祀について」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』8　甘木市所在立野遺跡の調査（3）　福岡教育委員会

寺沢知子　1986「祭祀の変化と民衆」『季刊考古学』16　雄山閣出版

中沢　悟　1986a「焼失住居跡にみられる上屋構造と竈の扱いの一例ー村主遺跡6号住居跡の調査例からー」『大原Ⅱ遺跡・村主遺跡』一般国道17号線（月夜野バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　群馬県教育委員会・(財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

中沢　悟　1986b「竈の廃棄についてー村主遺跡における平安時代の竈を中心とした竈の様相ー」『大原Ⅱ遺跡・村主遺跡』一般国道17号線（月夜野バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　群馬県教育委員会・(財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

福田健司　1986「古代から中世へ」『東京考古』4　東京考古談話会

水口由紀子　1986「丘陵地帯に展開する古代集落の一様相ー多摩丘陵北部を中心としてー」『物質文化』46　物質文化研究会

1987年

岩松　保　1987「カマドの有る住居と無い住居ー京都府南部の場合ー」『京都府埋蔵文化財論集』1　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

岡崎　敬　1987「中国古代におけるかまどについてー釜甑形式より鍋形式への変遷を中心としてー」『中国の考古学随唐篇』同朋舎出版

黒沢はるみ　1987「カマドについて」『上野国分僧寺・尼寺中間地域』群馬県教育委員会・(財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

都出比呂志　1987「家敷地の成立」『世界考古学大系』日本編補遺　天山舎

馬淵和雄　1987「中世都市鎌倉の煮炊様態」『青山考古』5　青山考古学会

三浦圭介　1987「かまど遺構について」『境関館遺跡ー中小河川平川改修事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ー』青森県埋蔵文化財調査報告書第102集　青森県教育委員会

宮本長二郎　1987「三国遺事と日韓建築交流」『アジア公論』16－4　韓国国際文化協会

三　竈にかんする主要文献一覧

横川好富　1987「竈の出現とその背景－埼玉県を中心として－」『埼玉の考古学』新人物往来社
渡辺昌宏　1987「三田遺跡における竪穴住居とカマド構造の変遷」『三田遺跡発掘調査報告書』（財）大阪府埋蔵文化財協会
渡辺芳郎　1987「漢代カマド形明器考－形態分類と地域性－」『九州考古学』61　九州考古学会

1988年

大崎哲人　1988「大津市北郊の後期古墳の再考」『滋賀県埋蔵文化財センター紀要』2　滋賀県埋蔵文化財センター
神谷佳明　1988「東国出土の竈形土器についての検討」『群馬の考古学』創立十周年記念論集　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
合田幸美　1988「出現期の竈」『網干善教先生華甲記念　考古学論集』網干善教先生華甲記念会
斎藤利昭　1988「鮎川扇状地における竪穴住居跡の竈構築方法について」『群馬の考古学』創立十周年記念論集（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
坂井　隆　1988「中近世の食生活－上野国を中心として－」『群馬の考古学』創立十周年記念論集　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
関川尚功　1988「古墳時代の渡来人－大和・河内地域を中心として－」『橿原考古学研究所論集』9　奈良県立橿原考古学研究所
平嶋文博　1988「カマド内小杭痕について」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』13　小郡市所在薬師堂東遺跡の調査　福岡県教育委員会
宮崎幹也　1988「竪穴住居に付随するカマドの検討－滋賀県下の検出例から－」『紀要』1　（財）滋賀県文化財保護協会

1989年

大貫静夫　1989「極東における平地住居の普及とその周辺」『考古学と民族誌』渡辺仁教授古稀記念論文集　六興出版
合田幸美　1989「古墳時代の竈の出土状況」『大阪文化財論集』（財）大阪文化財センター設立15周年記念論集　（財）大阪文化財センター
小林清隆　1989「カマド内出土遺物の意味について」『研究連絡誌』24　（財）千葉県文化財センター
高橋　学　1989「竪穴住居と掘立柱建物が併立して構築される遺構について－能代市福田遺跡・十二林遺跡を端緒として－」『研究紀要』4　秋田県埋蔵文化財センター
外山政子　1989「群馬県地域の土師器甑について」『研究紀要』6　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
馬淵和雄　1989「囲炉裏と鍋と　中世鎌倉の煮炊き」『月刊百科』319　平凡社
水口由紀子　1989「研究メモ　土製竈」『貝塚』39　物質文化研究会
宮本長二郎　1989「古墳時代竪穴住居跡論」『研究論集』Ⅷ　奈良国立文化財研究所

1990年

石野博信　1990『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館
笹森健一　1990「竪穴住居の使い方」『古墳時代の研究』2　雄山閣出版
椙山林継　1990「粥と強飯－祭祀遺跡の炊飯具－」『国学院雑誌』91－7　国学院大学
谷　　旬　1990「所謂『F類カマド』型の集落（上総西部編）」『研究連絡誌』29　（財）千葉県文化財センター
近野正幸　1990「古墳出土の炊飯具形土器について」『神奈川考古』26　神奈川考古同人会
堤　　隆　1990「住居廃絶時における竈解体をめぐって－竈祭祀の普遍性の一側面－」『東海史学』25　東海大学史学会
外山政子　1990a「三ツ寺Ⅱ遺跡のカマドと煮炊」『三ツ寺Ⅱ遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
外山政子　1990b「矢田遺跡の平安時代のカマドと煮沸具　煮沸具の使用痕跡の観察結果から」『矢田遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
外山政子　1990c「羽田倉遺跡の煮沸具の観察から－古墳時代を中心にして－」『長根羽田倉遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

中村信義　1990「竈形土器考」『今里幾次先生古稀記念　播磨考古学論叢』精文舎
水口由紀子　1990「南関東における竈形土器を持つ集落遺跡の性格－（続）丘陵地帯に展開する古代集落の一様相」『物質文化』54　物質文化研究会
宮本長二郎　1990「炉からカマドへ」『季刊考古学』32　雄山閣出版
望月　映　1990「古代の竪穴住居址」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』4　（財）長野県埋蔵文化財センター
森原明廣　1990「関東地方におけるカマド初現をめぐって」『研究紀要』6　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

1991年

荒井健治　1991「武蔵国府にみる古代の住環境」『東京考古』9　東京考古談話会
卜部行弘　1991「土製品」『古墳時代の研究』8　雄山閣出版
江浦　洋　1991a「池島・福万寺遺跡出土の移動式竈－釜穴に同心円文圧痕を有する移動式竈に関する予察－」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』（財）大阪文化財センター
江浦　洋　1991b「河内玉作り遺跡と竈形土器・羽釜・甑」『韓式系土器研究』Ⅲ　韓式系土器研究会
緒方　勉　1991「瀬田裏遺跡発見の竈（カマド）について」『瀬田裏遺跡調査報告Ⅰ－ゴルフ場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－』大津町教育委員会瀬田裏遺跡調査団・（株）阿蘇大津ゴルフ場
小林公治　1991「古代集落の食生活と生業－草山遺跡と三ツ俣遺跡の検討を通じて－」『古代』92　早稲田大学考古学会
高橋一夫　1991「集落研究に関する二・三の覚書」『古代学研究』125　古代学研究会
山上雅弘　1991「竈について」『近世都市の構造　発表要旨』関西近世考古学研究会

1992年

赤司善彦　1992「古墳時代の竈（九州地方）」『古墳時代の竈を考える』第36回埋蔵文化財研究集会当日配布資料　埋蔵文化財研究会
石川直章　1992「竪穴住居の火処と生活空間」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズⅤ　同志社大学考古学シリーズ刊行会
伊藤禎樹　1992「東海地方の５世紀のカマド－尾張正木町遺跡・三河神明遺跡について－」『古墳時代の竈を考える』第37回埋蔵文化財研究集会当日配布資料　埋蔵文化財研究会
岡野秀典　1992「置きカマド」『甲斐型土器－その編年と年代－』甲斐型土器研究グループ第１回研究集会資料　山梨県考古学協会
金光正裕・合田幸美　1992「蛍池東遺跡の発掘調査－古墳時代前期の大型掘立柱建物と作り付け竈について－」『大阪文化財研究　20周年記念増刊号』（財）大阪文化財センター
亀田修一　1992「中国・四国地方のカマド」『古墳時代の竈を考える』第３分冊　第32回埋蔵文化財研究集会資料　埋蔵文化財研究会
合田幸美　1992「竈の出現と展開」『古墳時代の竈を考える』第３分冊　第32回埋蔵文化財研究集会資料　埋蔵文化財研究会
高　正龍　1992「朝鮮半島概説」『古墳時代の竈を考える』第１分冊　第32回埋蔵文化財研究集会資料　埋蔵文化財研究会
近藤　広　1992「カマドからみた集落の構成について－近江の例から－」『滋賀考古』8　滋賀考古学研究会
斉木秀雄　1992「『囲炉裏』考」『中世都市研究』2　中世都市研究同人会
杉井　健　1992「竈研究の可能性－造り付け竈の地域性とその背景から－」『古墳時代の竈を考える』第３分冊　第32回埋蔵文化財研究集会資料　埋蔵文化財研究会
杉浦隆支　1992「能登川町・西ノ辻遺跡の調査－須恵器出現以前のカマドをもつ竪穴住居について－」『滋賀考古』8　滋賀考古学研究会
田嶋明人　1992「北陸の竈とその周辺」『古墳時代の竈を考える』第３分冊　第32回埋蔵文化財研究集会資料　埋蔵

文化財研究会
谷　　旬　1992a「西日本のカマド」『研究連絡誌』36　(財) 千葉県文化財センター
谷　　旬　1992b「千葉県における古墳時代の竈」『古墳時代の竈を考える』第3分冊　第32回埋蔵文化財研究集会資料　埋蔵文化財研究会
田村晃一　1992「炕拾遺」『平井尚志先生古稀記念考古学論攷』第Ⅰ集　大阪郵政考古学会
近澤豊明　1992「竈形土製品について」『長岡京古文化論叢』Ⅱ　三星出版
寺沢知子　1992「カマドへの祭祀的行為とカマド神の成立」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズⅤ　同志社大学考古学シリーズ刊行会
外山政子　1992a「炉かカマドか－もう一つのカマド構造について－」『研究紀要』10　(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
外山政子　1992b「群馬県地域のカマドの構造について」『古墳時代の竈を考える』第34回埋蔵文化財研究集会当日配布資料　埋蔵文化財研究会
外山政子　1992c「『炉』から『カマド』へ－古墳時代の食文化－　新来の食文化の実態とその受容における東西日本の比較」『助成研究の報告』2　(財) 味の素食の文化センター
豊田宏良　1992「擦文時代における住居構造からみた竈について」『古墳時代の竈を考える』第3分冊　第32回埋蔵文化財研究集会資料　埋蔵文化財研究会
林　博通　1992「オンドルについて」『高句麗の都城遺跡と古墳－日本都城制の源流を探る－』高句麗都城制・日朝文化学術研究団記録　同朋舎
速水伸也　1992「弥生時代の住居跡壁際の焼土塊」『古墳時代の竈を考える』第35回埋蔵文化財研究集会当日配布資料　埋蔵文化財研究会
久松哉須子　1992「カマドをめぐる祭祀」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズⅤ　同志社大学考古学シリーズ刊行会
廣田和穂　1992「長野県における炉から竈への変化」『古墳時代の竈を考える』第38回埋蔵文化財研究集会当日配布資料　埋蔵文化財研究会
埋蔵文化財研究会　1992『古墳時代の竈を考える』第1～3分冊　第32回埋蔵文化財研究集会資料　埋蔵文化財研究会
埋蔵文化財研究会　1992『古墳時代の竈を考える』福岡県版　第32回埋蔵文化財研究集会資料　埋蔵文化財研究会
水野正好　1992「古墳時代の竈を考える」『古墳時代の竈を考える』第33回埋蔵文化財研究集会当日配布資料　埋蔵文化財研究会
宮崎幹也　1992a「滋賀県における竈の検出状況」『古墳時代の竈を考える』第3分冊　第32回埋蔵文化財研究集会資料　埋蔵文化財研究会
宮崎幹也　1992b「滋賀県下におけるカマドの導入と普及」『滋賀考古』8　滋賀考古学研究会
山本高照　1992「和歌山県のカマド－和歌山市田屋遺跡のカマドを中心にして－」『古墳時代の竈を考える』第3分冊　第32回埋蔵文化財研究集会資料　埋蔵文化財研究会
渡辺芳郎　1992「中国におけるカマド形明器」『古墳時代の竈を考える』第3分冊　第32回埋蔵文化財研究集会資料　埋蔵文化財研究会

1993年

浅井哲也　1993「カマドが東へ移るとき」『茨城県考古学協会誌』5　茨城県考古学協会
亀田修一　1993「考古学から見た渡来人」『古文化談叢』30（中）　九州古文化研究会
桐生直彦　1993「竈出現以降の竪穴住居址内の遺物出土状態をめぐる問題」『山梨考古』46　山梨県考古学協会
合田幸美　1993「炉と竈の比較」『関西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論叢』関西大学文学部考古学研究室
杉井　健　1993「竈の地域性とその背景」『考古学研究』40－1　考古学研究会
鈴木徳雄　1993「鬼高式における大形鉢の意義－調理形態の多様化に関する一視点」『土曜考古』17　土曜考古学会
田中茂良　1993「竈構造に関しての一考察」『市原市文化財センター研究紀要』Ⅱ　(財) 市原市文化財センター

堤　　隆　1993「住居廃絶時における竈解体をめぐって」『山梨考古』46　山梨県考古学協会
中田祐香　1993「礫を構築材としたカマドについて」『先史学と関連科学』吉崎昌一先生還暦記念論集　吉崎昌一先生還暦記念論集刊行会
西野善勝　1993「特殊カマドを持つ住居跡　武蔵台東遺跡」『東京の遺跡』42　東京考古談話会
花田勝広　1993「渡来人の集落と墓域」『考古学研究』39－3　考古学研究会
宮崎幹也　1993「カマドの採用と普及－L字型カマドの復原－」『古代世界の諸相』晃洋書房
用瀬町教育委員会　1993「雛送りと竈神その道教的なるもの」『余井唐堀遺跡発掘調査報告書　余井谷川荒廃砂防工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』
用瀬町教育委員会　1993「鳥取県内出土の移動式竈」『余井唐堀遺跡発掘調査報告書　余井谷川荒廃砂防工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』
山崎龍雄　1993「1．第125次調査　3）小結」『福岡市有田・小田部』18　福岡市埋蔵文化財調査報告書第340集　福岡市教育委員会
渡辺康弘　1993「竈神の祭祀」『二十一世紀への考古学』桜井清彦先生古稀記念論文集　雄山閣出版
渡辺芳郎　1993「中国におけるカマドの変遷と地域性－カマド形明器からの検討－」『古文化談叢』29　九州古文化研究会

1994年

阿久津久　1994「カマドにみる祭祀の一形態」『日立史苑』7　日立市史編さん委員会
今村敏照・中村守男　1994「大口市馬場A・辻町2遺跡におけるカマド跡－鹿児島県の中・近世カマド概観－」『大河』5　大河同人
梅川光隆　1994「中世京都の採暖・炊事の炉－絵巻物を資料として－」『風俗』32－3　日本風俗史学会
岡野秀典　1994「甲斐国の竈形土器」『山梨県考古学論集』Ⅲ　山梨県考古学協会十五周年記念論文集　山梨県考古学協会
合田幸美　1994「蛍池東遺跡住居26の調査」『大阪文化財研究』6　（財）大阪文化財センター
末木啓介　1994「埼玉県におけるカマド導入期の様相－カマド・大形甑・杯の形態を中心として－」『研究紀要』11　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
瀬尾真由美　1994「長原遺跡出土の“ミニチュア竈”」『葦火』49　（財）大阪市文化財協会
寺沢知子　1994「火処としてのカマドと炉」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズⅥ　同志社大学考古学シリーズ刊行会
則武忠直・岡　秀昭・塩見真康　1994「岡山県山陽町門前池東方遺跡の朝鮮半島系資料」『古文化談叢』32　九州古文化研究会
橋本雄一　1994「煙道の痕跡が確認されない造り付けカマドについて」『北久米浄蓮寺遺跡3次調査地』松山市文化財調査報告書42　松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団・埋蔵文化財センター
前田清彦　1994「竪穴住居・竈・掘立柱建物－住居構造転換の一視点－」『石川考古学研究会々誌』37　石川考古学研究会
李　弘鍾（三宮昌弘訳）　1994「竈施設の登場と地域的様相」『大阪文化財研究』6　（財）大阪文化財センター

1995年

香川県教育委員会　1995『太田下・須川遺跡』高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊
樫村宣行　1995「茨城県における初期竈の様相」『みちのく発掘』菅原文也先生還暦記念論集　菅原文也先生還暦記念論刊行会
桐生直彦　1995a「棚からボタモチ－竪穴住居址の壁際覆土から出土する遺物の認識について－」『東国史論』10　群馬考古学研究会
桐生直彦　1995b「竈出現以降の竪穴住居址内の遺物出土状態をめぐる問題」『山梨縣考古學協會誌』7　山梨県考古学協会
合田幸美　1995「朝鮮半島の竈」『研究紀要』2　（財）大阪文化財センター研究助成報告書　（財）大阪文化財セン

ター
高橋　勉　1995「土器所有－古墳時代後期の被災住居跡より－」『新潟考古学談話会会報』15　新潟考古学談話会
高浜侑子　1995「秦漢時代における模型明器－倉形・竈形明器を中心として－」『日本中国考古学会会報』5　日本中国考古学会
竹宮亜也子　1995「鳥取県倉吉市不入岡遺跡出の竈について」『古文化談叢』35　九州古文化研究会
谷　　旬　1995「カマド再考」『千葉県文化財センター研究紀要』16　20周年記念論集　（財）千葉県文化財センター
堤　　隆　1995「竈の廃棄プロセスとその意味」『山梨縣考古學協會誌』7　山梨県考古学協会
外山政子　1995「平安時代のカマド構築材の選択について－4号住居跡のカマドから－」『黒熊栗崎遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第184集・関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第29集　群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・日本道路公団
永塚澄子・小坂井孝修・上條朝宏　1995「多摩ニュータウンNo.327・330遺跡住居跡内粘土と竈構築材粘土の同定」『研究論集』XⅣ　東京都埋蔵文化財センター
平野　修　1995「竪穴住居の廃絶と竈破壊－山梨県須玉町上ノ原遺跡の事例から－」『帝京大学山梨文化財研究所報』26　帝京大学山梨文化財研究所
前川友秀ほか　1995a「作り付け竈について」『七ケ城遺跡・七ケ城古墳群・楳ケ森遺跡調査報告書－名賀郡青山町阿保字沢代・楳ケ森所在－』青山町文化財報告8　青山町教育委員会・青山町遺跡調査会
前川友秀ほか　1995b「伊賀地方との竈との比較」『七ケ城遺跡・七ケ城古墳群・楳ケ森遺跡調査報告書－名賀郡青山町阿保字沢代・楳ケ森所在－』青山町文化財報告8　青山町教育委員会・青山町遺跡調査会
前田敬彦　1995「古墳時代竪穴住居についての覚書」『紀北考古学談話会会報』7　紀北考古学談話会
湯原勝美　1995「集落内出土の竈形土器－東北南部から房総地方の出土例を中心として－」『研究紀要』創刊号　山武考古学研究所
渡辺　一　1995「工房・工人集落・古代村落と女性」『歴史評論』538　校倉書房
1996年
上垣幸徳・松室孝樹　1996「石組みの煙道を持つカマド－古代の暖房施設試論－」『紀要』9　（財）滋賀県文化財保護協会
上村安生　1996「伊勢・伊賀における古代土師器煮炊具の様相」『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム　東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
浦上雅史　1996「淡路」『古代の土器4・煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会
大上周三　1996「住まいの規模・構成・空間利用の推移」『青山考古』13　青山考古学会
岡垣町教育委員会　1996「墓ノ尾遺跡群の住居跡とオンドル」『図録　岡垣町の文化財』Ⅰ
岡垣町教育委員会　1996「瀬戸遺跡出土の移動式カマド」『図録　岡垣町の文化財』Ⅰ
貝川克士　1996「樫井西遺跡の調査－横煙道の竈を持つ住居跡と方形周溝墓群－」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第34回）資料』（財）大阪府文化財調査研究センター
春日真美　1996「越後における5～8世紀の竪穴建物」『新潟考古学談話会会報』16　新潟考古学談話会
北野　重　1996「炊飯具土器の埋葬事例」『韓式系土器研究』Ⅵ　韓式系土器研究会
北野博司　1996「古代北陸の煮炊具」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東4　煮炊具－』古代の土器研究会第4回シンポジウム　古代の土器研究会
桐生直彦　1996a「棚上の遺物－武蔵国における古代竪穴住居跡の事例から－」『東国史論』11　群馬考古学研究会
桐生直彦　1996b「竈を有する竪穴住居跡の外周にみられるピットについて－竪穴壁外屋内空間の存在をめぐって－」『土曜考古』20　土曜考古学研究会
古閑正浩　1996「京都府乙訓地域の韓式系土器・カマド形煮炊具の様相」『韓式系土器研究』Ⅵ　韓式系土器研究会
小森俊寛　1996a「近畿北部の煮炊具－但馬・丹後・丹波・山城・大和・近江・伊賀・伊勢・志摩－」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東4　煮炊具－』古代の土器研究会第4回シンポジウム　古代の土器研究会
小森俊寛　1996b「総説」『古代の土器4・煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会

小森俊寛　1996c「概説　古代前半期における大和・山城・近江の煮炊具」『古代の土器４・煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会
小森俊寛　1996d「山城北部・南部」『古代の土器４・煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会
(財)滋賀県文化財保護協会・滋賀県立安土城考古博物館　1996『近江・河内・大和の渡来人』（財）滋賀県文化財保護協会設立25周年記念第７回埋蔵文化財調査研究会シンポジウム
佐藤竜馬　1996「四国の煮炊具」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東４　煮炊具－』古代の土器研究会第４回シンポジウム　古代の土器研究会
篠崎譲治　1996「古代末期のカマド付き小竪穴について－特徴、出現、そしてその後－」『東京都日野市南広間地遺跡』７　日野市埋蔵文化財発掘調査報告35　日野市・日野市遺跡調査会
田形孝一　1996「集落から村落へ（１）－古代東国村落復元へのアプローチ－」『研究連絡誌』47　（財）千葉県文化財センター
武内雅人　1996「紀伊」『古代の土器４・煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会
武末純一　1996「西新町遺跡の竈－その歴史的意義－」『碩晤尹容鎭教授停年退任紀年論叢』
武田恭彰　1996「山陽地方の煮炊具」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東４　煮炊具－』古代の土器研究会第４回シンポジウム　古代の土器研究会
巽淳一郎　1996「煮炊具の生産と供給」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東４　煮炊具－』古代の土器研究会第４回シンポジウム　古代の土器研究会
中村和美　1996「古代前期の煮炊具－肥後・日向・薩摩・大隅－」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東４　煮炊具－』古代の土器研究会第４回シンポジウム　古代の土器研究会
西山克己　1996「７世紀代に用いられた円筒形土器」『長野県考古学会誌』79　長野県考古学会
日本の住まいの起源と系譜に関するシンポジウム事務局　1996『竪穴住居の系譜　討論の記録（内部資料）』日本の住まいの起源と系譜に関するシンポジウムⅠ
橋本勝行　1996「丹後北部」『古代の土器４・煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会
畑中英二　1996「近江」『古代の土器４・煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会
広江耕史　1996「山陰の煮炊具－出雲・石見－」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東４　煮炊具－』古代の土器研究会第４回シンポジウム　古代の土器研究会
福永信雄　1996「北・中河内」『古代の土器４・煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会
保立道久　1996「煙出と釜殿」『絵巻物の建築を読む』東京大学出版会
松室孝樹　1996「竪穴住居に設置されるＬ字形カマドについて－日本国内検出例の集成－」『韓式系土器研究』Ⅵ　韓式系土器研究会
丸山竜平　1996「オンドルをもつ家」『考古学による日本歴史』15　雄山閣出版
宮本長二郎　1996『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版
三好美穂　1996a「都城の煮炊具－藤原京・平城京・長岡京・平安京－」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東４　煮炊具－』古代の土器研究会第４回シンポジウム　古代の土器研究会
三好美穂　1996b「大和」『古代の土器４・煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会
村上泰司　1996「古代集落復元への一視点－北武蔵における竪穴式住居の分析を中心として－」『土曜考古』20　土曜考古学研究会
森川常厚　1996「伊勢・志摩・斎宮」『古代の土器４・煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会
森本　徹　1996「韓国冷水里古墳出土の竈形土器」『大阪文化財研究』10　（財）大阪府文化財調査研究センター
山本信夫　1996「古代前期の煮炊具－筑前・筑後・豊前・豊後・肥前－」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東４　煮炊具－』古代の土器研究会第４回シンポジウム　古代の土器研究会

1997年

網田龍生　1997「肥後における竪穴住居の終焉」『肥後考古』10　肥後考古学会
岡安雅彦　1997「三河地方で出土した竈形土器」『三河考古』10　三河考古学談話会

三　竈にかんする主要文献一覧

川津法伸　1997「竈の脇に棚をもつ住居について」『研究ノート』6　(財) 茨城県教育財団
桐生直彦　1997a「君は“棚”を見たか－武蔵国における棚状施設の事例分析－」『土壁』創刊号　考古学を楽しむ会
桐生直彦　1997b「『高い棚』と『低い棚』－竈を有する竪穴住居に設けられた棚状施設を理解するために－」『東京の遺跡』56　東京考古談話会
窪　徳忠　1997「かまど神と城隍神－天理参考館所蔵の神符－」『天理参考館報』10　天理大学附属天理参考館
黒澤秀雄　1997「古墳時代の置カマドについて－つくば市中台遺跡の出土例を中心として－」『研究ノート』6　(財) 茨城県教育財団
合田幸美　1997「中国の竈集成－検出遺構を中心に－」『調査研究報告』1　(財) 大阪府文化財調査研究センター
小林清隆　1997「竈と貯蔵穴　千葉市周辺地域の古墳時代の事例から」『研究連絡誌』48　(財) 千葉県文化財センター
小松市教育委員会　1997「額見町遺跡のオンドル状遺構をもつ13号竪穴住居跡」『小松市埋蔵文化財調査だより』7
坂本和俊　1997「河童・駒・鎌・竈－考古学的に見た河童駒引きの周辺－」『祭祀考古学』創刊号　祭祀考古学会
篠原祐一　1997「栃木県古墳時代祭祀総攬－祭祀関係遺物の出土から－」『研究紀要』5　(財) 栃木県文化振興財団・埋蔵文化財センター
筒井崇史・楢本順子　1997「竪穴式住居内に煙道を有するカマドについて－浦入遺跡における調査事例から－」『京都府埋蔵文化財情報』65　(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
奈良・平安時代研究プロジェクトチーム　1997「神奈川県におけるカマド構造の基礎的研究（1）」『かながわの考古学　研究紀要』2　神奈川県立埋蔵文化財センター・(財) かながわ考古学財団
西野善勝　1997「カマド様遺構を伴う掘立柱建物跡－武蔵台東遺跡『81号住居跡』をめぐって－」『土壁』創刊号　考古学を楽しむ会
畑中英二　1997「犬上川左岸扇状地の古墳にみられる習俗の研究」『紀要』10　(財) 滋賀県文化財保護協会
濱田延充　1997「寝屋川市域における出現期の造り付け竈」『大阪府下埋蔵文化財（第35回）研究会資料』(財) 大阪府文化財調査研究センター
森本　徹　1997「古墳時代葬送儀礼専業集落についての覚書」『大阪文化財研究』12　(財) 大阪府文化財調査研究センター
森　泰通　1997「移動式カマドについての覚え書き－豊田市江古山遺跡出土例をもとに－」『三河考古』10　三河考古学談話会

1998年

浅川滋男編　1998『先史日本の住居とその周辺』同成社
杉井　健　1998a「古代における竈の変質」『古代中世の社会と国家』大阪大学文学部日本史研究室創立50周年記念論文集上巻　清文堂出版
杉井　健　1998b「朝鮮半島における竈の特質および日本列島との相互関係」『青丘学術論集』12　(財) 韓国文化研究振興財団
近澤豊明　1998「青野遺跡の再検討」『第6回京都府埋蔵文化財研究集会発表資料集』京都府埋蔵文化財研究会
外山政子　1998「関東北西部の平安時代住居とカマド－群馬県矢田遺跡の検討から－」『法政考古学』24　法政考古学会
仲田茂司　1998「東北・北海道における土師甕使用方法の地域差－5～7世紀を中心に－」『福島考古』39　福島県考古学会
奈良・平安時代研究プロジェクトチーム　1998「神奈川県におけるカマド構造の基礎的研究（2）」『かながわの考古学　研究紀要』3　神奈川県立埋蔵文化財センター・(財) かながわ考古学財団
松室孝樹　1998「姉川左岸地域における遺跡の動態－弥生時代後期から古墳時代にかけて－」『滋賀考古』19　滋賀考古学研究会
三島道子　1998「富山県における出現期のカマドについて」『五社遺跡発掘調査報告－能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ－』富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第9集　(財) 富山県文化振興財団埋蔵

文化財調査事務所
望月精司　1998「額見町遺跡とオンドル状遺構」『加能史料研究』10　石川史書刊行会
山口耕一　1998「古墳時代後期の円筒形土製品－栃木県下の事例を中心に－」『研究紀要』6　（財）栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
1999年
青木　敬　1999「竈廃棄考－多摩市和田西遺跡事例からみた検討－」『土壁』3　考古学を楽しむ会
荒井健治　1999「かまどのある風景」『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論文集　森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
石守　晃　1999「竪穴住居と竪穴住居遺構に就いて－多比良追部野遺跡の古墳時代後期の竪穴住居をサンプルとして－」『研究紀要』17　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
伊藤博幸　1999「後半期の集落」『岩手考古学』10　岩手考古学会
樫村宣行　1999「星合遺跡における初期カマドの様相について」『菟玖波』3　菟玖波倶楽部
片岡　博　1999「竪穴住居内出土の須恵器杯と竈について」『研究紀要』8　創立10周年記念論文集　三重県埋蔵文化財センター
川津法伸　1999「竈の脇に棚をもつ住居について（2）」『研究ノート』8　（財）茨城県教育財団
桐生直彦　1999a「床面に段差のある竪穴建物跡－『幅広の棚状施設』をどのように理解するか－」『東国史論』14　群馬考古学研究会
桐生直彦　1999b「棚状施設・ベッド状遺構・テラス状施設－その概念的整理－」『東京の遺跡』62　東京考古談話会
櫛原功一　1999「炭化種実から探る食生活－古代～中世を中心に－」『食の復元－遺跡・遺物から何を読みとるか－』帝京大学山梨文化財研究所研究集会報告集2　帝京大学山梨文化財研究所
黒沢哲郎　1999「内面に墨書された土師器杯の一例－村田居山遺跡出土の土器墨書から－」『事業報告Ⅷ－平成9年度－』（財）香取郡市文化財センター
小嶋芳孝　1999「渤海のオンドル遺構」『考古学に学ぶ』同志社大学考古学シリーズⅦ　同志社大学考古学シリーズ刊行会
小林久彦　1999「もう一つの台付甕－三遠地域における大型台付甕の存在と土器の容量変化に注目して－」『三河考古』12　三河考古学談話会
柴尾俊介　1999「豊前における古代集落の諸問題」『先史学・考古学論究』Ⅲ　白木原和美先生古稀記念献呈論文集　龍田考古会
杉井　健　1999a「熊本県における甑形土器と竈の普及－熊本県出土甑形土器・造り付け竈・移動式竈の集成－」文学部論叢』65　歴史学篇　熊本大学文学会
杉井　健　1999b「墓制と生活様式の共通圏の形成」『古墳時代首長系譜の変動パターンの比較研究』平成8～10年度科学研究費補助金（基盤B・一般2）研究成果報告書　大阪大学文学部
杉井　健　1999c「首長系譜変動からみた生活様式の変化の様相－朝鮮半島系渡来文化と中央政権とのかかわり－」『渡来文化の受容と展開－5世紀における政治的・社会的変化の具体相（2）－』第46回埋蔵文化財研究集会発表要旨集当日追加資料　埋蔵文化財研究会
杉井　健　1999d「炊飯様式からみた東西日本の地域性」『古代史の論点』6　小学館
高橋泰子　1999「貯蔵穴の研究－武蔵国豊島郡内の竈付き竪穴住居跡にみられる貯蔵穴の分析について－」『土壁』3　考古学を楽しむ会
田中久生　1999「三重県下古墳時代後期竪穴住居内の造り付け竈の構造について」『研究紀要』8　創立10周年記念論文集　三重県埋蔵文化財センター
中沢　悟　1999「8号住居跡出土の石製紡錘車について」『荒砥下押切Ⅱ遺跡・荒砥中屋敷Ⅱ遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第249集　群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
中西克宏　1999「曲げ庇系竈を副葬する古墳」『光陰如矢－荻田昭次先生古稀記念論集－』「光陰如矢」刊行会
奈良・平安時代研究プロジェクトチーム　1999「神奈川県におけるカマド構造の基礎的研究（3）」『かながわの考古学　研究紀要』4　神奈川県立埋蔵文化財センター・（財）かながわ考古学財団

三　竈にかんする主要文献一覧

花本哲志　1999「広島県の中世山城跡から検出された遺構について（4）」『研究輯録』Ⅸ　（財）広島県埋蔵文化財調査センター

福田健司・清野利明・中山弘樹　1999「東京都における5世紀の土器と問題点」『東国土器研究』5　東国土器研究会

望月精司　1999「北陸型煮炊具の出現と成立過程－加賀地域及び小松市額見町遺跡の事例検討を中心として－」『北陸の考古学』Ⅲ（石川考古学研究会々誌42）　石川考古学研究会

望月精司・大橋由美子　1999「石川県小松市額見町遺跡」『日本考古学年報』50　日本考古学協会

四柳嘉章　1999「高田遺跡祭祀遺構の性格」『高田遺跡－能登における古墳時代祭祀遺構等の調査－』　石川県富来町教育委員会

2000年

青木　敬　2000「竪穴建物の掘り形を考える－特徴的な掘込みを有する事例について－」『土壁』4　考古学を楽しむ会

青山　晃　2000「富山県におけるカマド出現期の様相－婦中町中名Ⅳ遺跡検出のカマド付き竪穴住居跡を中心として－」『富山考古学研究』3（紀要3）（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

上床　真　2000「薩摩・大隅の古代の竪穴遺構－竪穴式住居の終末に関する一考察－」『Fragments』2　さくら研究会

上村安生　2000「宇田型甕衰退から伊勢型甕成立過程についての基礎的研究」『S字甕を考える』第7回東海考古学フォーラム三重大会実行委員会

宇部則保　2000「馬淵川下流域における古代集落の様相」『考古学の方法』3　東北大学文学部考古学研究会会報第3号　東北大学文学部考古学研究会

大上周三・依田亮一　2000「神奈川県における古墳時代のカマドについて－形態・構築材にみる地域差を中心にして－」『考古論叢　神奈河』8　神奈川県考古学会

岡安雅彦　2000「西三河出土の竈形土器」『安城市歴史博物館研究紀要』7　安城市歴史博物館

奥　和之　2000「竈について」『安威遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告1999－6　大阪府教育委員会

木村　高　2000「津軽地方における平安時代の住居跡－付属する掘立柱建物と外周溝の機能について－」『考古学ジャーナル』462　ニュー・サイエンス社

桐生直彦　2000a「君は“棚”を見謝っていないか、見落としていないか－竈をもつ竪穴建物跡にみられる棚状施設の報告に関して－」『東国史論』15　群馬考古学研究会

桐生直彦　2000b「“棚”をもつ竪穴建物の広がり－竈を有する竪穴建物跡にみられる棚状施設の分布－」『東京の遺跡』66　東京考古談話会

合田幸美　2000「壁灶の集成」『日本中国考古学会会報』10　日本中国考古学会

城ケ谷和広　2000「伊勢型甕の成立と展開－韓式系土器から伊勢型甕へ－」『S字甕を考える』第7回東海考古学フォーラム三重大会実行委員会

鈴木一有　2000「総括」『笠井若林遺跡4次』浜松市笠井町笠井若林遺跡第4次発掘調査報告書　（財）浜松市文化協会

鈴木　信　2000「H－13の竈廃用祭祀について－千歳市・恵庭市内の遺跡と比較して」『千歳市ユカンボシC15遺跡（3）』北埋調報146集　（財）北海道埋蔵文化財センター

高木　晃　2000「竪穴住居構造についての一考察－美濃地域の事例から－」『S字甕を考える』第7回東海考古学フォーラム三重大会実行委員会

田中清美　2000「韓式系土器と五世紀の土師器」『S字甕を考える』第7回東海考古学フォーラム三重大会実行委員会

田中　裕　2000「『S字甕』終焉のころの関東」『S字甕を考える』第7回東海考古学フォーラム三重大会実行委員会

中井貞夫　2000「竈」『あまのともしび』原口先生古稀記念集　原口先生の古稀を祝う集い事務局

中田　英　2000「炉を設けた竈をもつ竪穴住居跡について」『山梨県考古学協会誌』11　山梨県考古学協会

保坂康夫　2000「東原遺跡の平安時代集落の構造－実年代軸の設定と集団表象論の試み－」『研究紀要』16　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

森　泰通　2000「消える台付甕－炉とカマドの間から見えるもの－」『S字甕を考える』第7回東海考古学フォーラム三重大会実行委員会

米沢容一　2000「『タナ』状の施設から棚状施設へ」『土壁』4　考古学を楽しむ会

2001年

青山　晃　2001「古代北陸におけるカマドについて－富山県の造り付けカマドを中心として－」『富山考古学研究』4　（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

内堀信雄　2001「土師器煮炊具の様相－地域色と使用痕－」『美濃・飛騨の古墳とその社会』東海の古代①　同成社

大貫静夫　2001「韓国の竪穴住居とその集落－覚え書き－」『韓国の竪穴住居とその集落』平成12年度文部省科学研究費補助金特定領域研究（A）　日本文化班資料集3　国際日本文化研究センター

川崎志乃　2001「伊勢の古墳時代土師器生産－藤潟を取り巻く遺跡を中心に－」『Mie　history』12　三重歴史文化研究会

川津法伸　2001「竈の脇に棚をもつ住居について（3）」『研究ノート』10　（財）茨城県教育財団

桐生直彦　2001『竈をもつ竪穴建物跡にみられる棚状施設の研究－関東地方の事例を中心に－』自費出版

鯉渕義紀　2001「カマド構築期の祭祀行為の可能性について－中原上宿遺跡磨製石斧の分析－」『自然と文化』24（平塚市博物館研究報告）　平塚市博物館

小嶋芳孝　2001「加賀・能登における渡来人の足跡」『日韓国際シンポジウム　飛鳥の王権とカガの渡来人』石川県立歴史博物館

杉井　健　2001「朝鮮半島系渡来文化の動向と古墳の比較研究試論－九州本島北部地域を題材として－」『考古学研究』47－4　考古学研究会

須田正久　2001「上福島中町遺跡－泥流の下から現れた江戸時代の家と屋敷－」『埋文群馬』37　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

高橋玲子　2001「平安時代東北地方における掘立柱施設付竪穴住居について」『秋田考古学』47　秋田考古学協会

田中裕介　2001「第9章　調査の成果と課題」『日田市瀬高遺跡群の調査3　上野第1遺跡』一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　大分県教育委員会

丹治篤嘉　2001「福島県内の筒形土製品・異形土製品について」『福島考古』42　福島県考古学会

成瀬晃司　2001「竈」『図説　江戸考古学研究事典』柏書房

濱田延充　2001a「『用途不明板状土製品』について」『韓式系土器研究』Ⅶ　韓式系土器研究会

濱田延充　2001b「長保寺遺跡出土の移動式かまど」『韓式系土器研究』Ⅶ　韓式系土器研究会

原　智之　2001「竈復元の試み」『土壁』5　考古学を楽しむ会

藤藪勝則　2001「和歌山県出土のミニチュア炊飯具形土器」『花園大学考古学研究論集』花園大学考古学研究室20周年記念論集　花園大学考古学研究室20周年記念論集刊行会

松浦俊和　2001「『ミニチュア炊飯具形土器』を考える」『韓国（からくに）より渡り来て－古代国家の形成と渡来人－』平成13年度春季特別展図録　滋賀県立安土城考古博物館

間宮正光　2001「竈内に含まれる動植物遺体の分析について－夏見大塚遺跡第10次調査の事例報告－」『研究紀要』4　山武考古学研究所

望月精司　2001「小松市額見町遺跡と飛鳥時代の渡来人」『日韓国際シンポジウム　飛鳥の王権とカガの渡来人』石川県立歴史博物館

李　健茂　2001「韓国古代のオンドル（温突）状遺構と住文化」『日韓国際シンポジウム　飛鳥の王権とカガの渡来人』石川県立歴史博物館

2002年

青山　晃　2002a「古代北陸におけるカマドについて（2）－カマド構築方位についての検討－」『富山考古学研究』5　（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

三　竈にかんする主要文献一覧

青山　晃　2002b「古代東国におけるカマドの導入と展開の様相－関東地方の古墳時代におけるカマド・大型甑・長胴甕を中心として－」『Archaeo－Clio』3　東京学芸大学考古学研究室

荒井健治　2002「古代東国の暮らし－竪穴建物の居住環境－」『田辺昭三先生古稀記念論文集』田辺昭三先生古稀記念の会

大平　茂　2002「土製模造品の再検討－兵庫県内出土の古墳時代祭祀遺物を中心として－」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』2　大村敬通所長退職記念号　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

桐生直彦　2002a「棚状施設をもつ竪穴建物の性格（1）－茨城県つくば市中原遺跡の事例分析から－」『史学研究集録』27　国学院大学日本史学専攻大学院会

桐生直彦　2002b「棚状施設をもつ竪穴建物の性格（2）－都市と農村の比較－」『國學院大學考古学資料館紀要』18　國學院大學考古学資料館

合田幸美　2002a「大坂城跡の竈跡について」『大坂城跡発掘調査報告』Ⅰ　（財）大阪府文化財センター調査報告書第78集　（財）大阪府文化財センター

合田幸美　2002b「出現期の竈再考－庄内～布留式期の資料を中心に－」『究班』Ⅱ　埋蔵文化財研究会25周年記念論文集　埋蔵文化財研究会

笹森健一　2002「カマド起源説話と考古学－カマドの炊煙と嫉妬－」『土曜考古』26　土曜考古学研究会

島崎久恵　2002「泉州南部地域の作り付けカマドについて」『大阪文化財論集』Ⅱ　財団法人大阪府文化財センター設立30周年記念論集　（財）大阪府文化財センター

杉井　健　2002a「沖縄諸島における居住形態の変遷とその特質」『先史琉球の生業と交易－奄美・沖縄の発掘調査から－』平成11～13年度科学研究費補助金基盤研究（B）（2）研究成果報告書　熊本大学文学部

杉井　健　2002b「第5回（2002年度）九州前方後円墳研究会によるひとつの成果－古墳時代中期以降の新規出現要素に着目して－」『九前研通信』11　九州前方後円墳研究会

杉浦裕幸・荒井信貴・三田敦司　2002「矢作川の水運」『第10回記念春日井シンポジウム資料集』春日井シンポジウム実行委員会

花田勝広　2002『古代の鉄生産と渡来人－倭政権の形成と生産組織－』雄山閣出版

原　智之　2002「竈規格の復元」『土壁』6　考古学を楽しむ会

松浦俊和　2002「大津北郊の後期群集墳とミニチュア炊飯具形土器－群集墳の支群構成と、その性格について－」『田辺昭三先生古稀記念論文集』田辺昭三先生古稀記念の会

宮崎幹也　2002「続・カマドの採用と普及」『究班』Ⅱ　埋蔵文化財研究会26周年記念論文集　埋蔵文化財研究会

山口　均　2002「長岡京の祭祀－右京第689次調査（古城遺跡）発掘調査から－」『情報　祭祀考古』22　祭祀考古学会

四　執筆者別索引

【甑形土器】

ア　赤井博之　1997
阿部明彦　1989
池崎譲二・杉山富雄・小畑弘己　1989
石神孝子・笠原みゆき　1999
石本　弘　1995
伊藤博幸　1989
岩崎卓也　1966
植田千佳穂　1999
植田文雄　1994
上村安生　1996
宇野隆夫　1999
江口　桂　1997
岡田龍平・岡田善治・杉谷愛象　1987
奥　和之　2000
小沢　洋　1999
カ　柿沼幹夫　1976・1984
樫村宣行・土生朗治・白石真理　1999
亀田修一　1993・1999・2000・2001
川村満博　1998
神田恵子・大崎靖子・中川由夏・大沼芳幸　1990
北野博司　1996
木下正史　1976
木本元治　1989
京嶋　覚　1992
桐生直彦　1993a・1993b
桑原隆博　1980・1995
小林久彦　1990
小林正史・柳瀬昭彦　2000
小森俊寛　1996a・1996b・1996c・1996d
サ　酒井清治　1988・1998
坂井秀弥　1988・1989
坂口　一　1999
坂本美夫　1989
佐久間正明　2000
佐藤憲幸・村田晃一　1996
佐藤竜馬　1996
佐原　眞　1987・1995・1996
重藤輝行　2000・2001
清水真一・景山俊邦・村上裕紀　1980
杉井　健　1994a・1994b・1999・2001・2002
鈴木敏則　1999
タ　高橋浩二　1996
高橋誠明　1999
高橋　学　2001
武内雅人　1989
武末純一　2000
武田恭彰　1996
巽淳一郎　1996
田中清美　1999
谷若倫郎　1986a・1986b
辻　美紀　2002
津野　仁　1995
坪根伸也　1995
坪根伸也・塩地潤一　2001
冨沢一明・広田和穂・直井雅尚・島田哲男・山下誠一　1999
外山政子　1987・1989
ナ　長川加奈子　2001
中西克宏　1985・1988
中村倉司　1982・1989・1999
中村孝三郎・寺村光晴　1956
名久井文明　1987・1989
鍋田　勇　1994
西川修一　1996
野村幸季　1964
ハ　橋本勝行　1996
橋本澄夫　1969
長谷川厚　1996・1999
畑中英二　1996
花岡弘・西山克己　1995
原　明芳　1989・1994
坂野和信　1988・1991
東　和幸　1995
東森市良　1986
広江耕史　1996
弘前市教育委員会　2000
福田健司・清野利明・中山弘樹　1999
藤田典夫　1999
堀田啓一　1970
マ　間壁葭子　1989・1991

松永幸寿　2001
松山智弘　1991
三沢正善・三沢京子　1991
南　博史　1991・1992・1998
三好美穂　1996a・1996b
向井裕知　1999
武藤雄六　1965
村田晃一　1995
望月精司　1999
森川常厚　1996
森原明廣　1995
森　泰通　1989
門田誠一　1985
ヤ　柳沼賢治　1999
梁　木誠・田熊清彦　1989
山本恵一　1989・1995・1999
山本信夫　1996
米田文孝　1984

【竈】

ア　青木　敬　1999・2000
青山　晃　2000・2001・2002a・2002b
赤司善彦　1992
阿久津久　1994
浅井哲也　1993
浅川滋男編　1998
網田龍生　1997
荒井健治　1991・1999・2002
石川直章　1992
石野博信　1975・1990
石守　晃　1999
伊藤禎樹　1992
伊藤博幸　1999
稲田孝司　1978
乾　芳宏　1982
今村敏照・中村守男　1994
岩松　保　1987
上垣幸徳・松室孝樹　1996
上床　真　2000
上村安生　1996・2000
宇田川洋　1966
内堀信雄　2001
宇部則保　2000
梅川光隆　1994
浦上雅史　1996
卜部行弘　1991
江浦　洋　1991a・1991b
大上周三　1996
大上周三・依田亮一　2000
大川　清　1955
大崎哲人　1988
大貫静夫　1989・2001
大場磐雄　1955
大橋信弥　1982
大林太良　1985
大平　茂　2002
岡垣町教育委員会　1996a・1996b
岡崎　敬　1955・1987
緒方　勉　1991
岡野秀典　1992・1994
岡　憲雄　1981
岡安雅彦　1997・2000
奥　和之　2000
カ　貝川克士　1996
香川県教育委員会　1995
柿沼幹夫　1979
樫村宣行　1995・1999
春日真美　1996
片岡　博　1999
金子裕之　1971・1985
金光正裕・合田幸美　1992
神谷佳明　1988
亀田修一　1992・1993
川上秀秋　1984
川崎志乃　2001
川津法伸　1997・1999・2001
北野　重　1996
北野博司　1996
木村　高　2000
桐生直彦　1984・1993・1995a・1995b・1996a・1996b・1997a・1997b・1999a・1999b・2000a・2000b・2001・2002a・2002b
桐原　健　1973・1977
櫛原功一　1999
椚　国男　1971
窪　徳忠　1982・1997

栗城譲一・鶴間正昭・比田井克仁　1982
黒沢哲郎　1999
黒沢はるみ　1987
黒澤秀雄　1997
鯉渕義紀　2001
郷田洋文　1955・1958
合田幸美　1988・1989・1992・1993・1994・1995・1997・2000・2002a・2002b
高　正龍　1992
古閑正浩　1996
小嶋芳孝　1999・2001
小林清隆　1989・1997
小林公治　1991
小林久彦　1999
小松市教育委員会　1997
駒見和夫　1984
小森俊寛　1996a・1996b・1996c・1996d
近藤　広　1992
サ　斉木秀雄　1992
(財)滋賀県文化財保護協会・滋賀県立安土城考古博物館　1996
斎藤利昭　1988
坂井　隆　1988
坂本和俊　1997
佐々木達夫　1974
笹森紀己子　1982
笹森健一　1978・1990・2002
佐藤克己　1974
佐藤竜馬　1996
寺社下博　1981
篠崎譲治　1996
篠原祐一　1997
柴尾俊介　1999
島崎久恵　2002
島田貞彦　1928・1929
島本　一　1937・1937
城ケ谷和広　2000
末木啓介　1994
杉井　健　1992・1993・1998a・1998b・1999a・1999b・1999c・1999d・2001・2002a・2002b
杉浦隆支　1992
杉浦裕幸・荒井信貴・三田敦司　2002
椙山林継　1990
鈴木一有　2000
鈴木徳雄　1993
鈴木　信　2000
須田正久　2001
瀬尾真由美　1994
関川尚功　1988
タ　高木　晃　2000
田形孝一　1996
高橋一夫　1975・1983・1986・1991
高橋健自　1918
高橋　勉　1995
高橋　学　1984・1989
高橋泰子　1999
高橋玲子　2001
高浜侑子　1995
武内雅人　1996
武末純一　1996
武田光正　1986・1986
武田恭彰　1996
竹宮亜也子　1995
田崎博之　1980
田嶋明人　1992
巽淳一郎　1996
田中清美　2000
田中茂良　1993
田中久生　1999
田中裕介　2001
田中　裕　2000
谷　旬　1982・1990・1992a・1992b・1995
田村晃一　1992
丹治篤嘉　2001
近澤豊明　1992・1998
近野正幸　1990
筒井崇史・楢本順子　1997
堤　隆　1990・1993・1995
都出比呂志　1987
寺沢知子　1986・1992・1994
富田好久　1985
外山政子　1989・1990a・1990b・1990c・1992a・1992b・1992c・1995・1998
豊田宏良　1992
ナ　中井貞夫　2000
中尾芳治　1965
中沢　悟　1986・1986・1999
中島誠一　1983

仲田茂司　1998
中田　英　2000
中田祐香　1993
永塚澄子・小坂井孝修・上條朝宏　1995
中西克宏　1999
中村和美　1996
中村　喬　1985
中村信義　1990
中山吉秀　1976
奈良・平安時代研究プロジェクトチーム　1997・1998・1999
成瀬晃司　2001
西谷　正　1983
西野善勝　1993・1997
西山克己　1996
日本の住まいの起源と系譜に関するシンポジウム事務局　1996
則武忠直・岡　秀昭・塩見真康　1994
ハ　橋本勝行　1996
橋本雄一　1994
畑中英二　1996・1997
花田勝広　1993・2002
花本哲志　1999
濱田延充　1997・2001a・2001b
林　博通　1973・1992
林　博通・栗本政志　1983
林巳奈夫　1975
速水伸也　1992
原島礼二　1971
原　智之　2001・2002
樋口吉文　1984
久松哉須子　1992
平嶋文博　1988
平野　修　1995
広江耕史　1996
廣田和穂　1992
福田健司　1986
福田健司・清野利明・中山弘樹　1999
福永信雄　1996
藤薮勝則　2001
保坂康夫　2000
保立道久　1996
マ　埋蔵文化財研究会　1992a・1992b
前川明久　1979
前川友秀ほか　1995a・1995b
前田清彦　1994
前田敬彦　1995
松浦俊和　1984・2001・2002
松前　健　1973
松室孝樹　1996・1998
馬淵和雄　1987・1989
間宮正光　2001
丸山竜平　1996
三浦圭介　1987
三島道子　1998
水口由紀子　1986・1989・1990
水野正好　1970・1971・1972・1981・1982・1992
宮崎幹也　1988・1992a・1992b・1993・2002
宮本長二郎　1987・1989・1990・1996
三好美穂　1996a・1996b
村上泰司　1996
用瀬町教育委員会　1993a・1993b
望月　映　1990
望月精司　1998・1999・2001
望月精司・大橋由美子　1999
森川常厚　1996
森原明廣　1990
森本　徹　1996・1997
森　泰通　1997・2000
ヤ　山上雅弘　1991
山口耕一　1998
山口　均　2002
山崎龍雄　1993
山本高照　1992
山本信夫　1996
湯原勝美　1995
横川好富　1987
四柳嘉章　1983・1999
米沢容一　2000
ラ　李　健茂　2001
李　弘鍾（三宮昌弘訳）　1994
ワ　和島誠一・金井塚良一　1966
渡辺　武　1982
渡辺　一　1995
渡辺昌宏　1987
渡辺康弘　1993
渡辺芳郎　1987・1992・1993

朝鮮半島系渡来文化の伝播・普及と首長系譜変動の比較研究

平成12年度～平成14年度科学研究費補助金
（基盤研究Ｃ２）研究成果報告書

発行年月　2003年３月
編集執筆　杉井　健
発　　行　熊本大学文学部
〒860-8555　熊本市黒髪２－40－１
印　　刷　シモダ印刷株式会社
〒862-0951　熊本市上水前寺２－16－16